

# 生きる

～東日本大震災と地域青年の記録～

第1号

編集・発行：日本青年団協議会・

「生きる ～東日本大震災と地域青年の記録～」編集委員会

# 生きる

～東日本大震災と地域青年の記録～

第1号

編集・発行：日本青年団協議会・

「生きる ～東日本大震災と地域青年の記録～」編集委員会

この冊子を

未曾有の大震災にあっても職務を全うし

志半ばにして亡くなられた

加藤国雄さんと中村豊さんに捧げます



## はじめに

『生きる～東日本大震災と地域青年の記録～』は、2011年3月11日に発生した地震・津波・原子力発電所事故とその後を、日本の各地域で青年たちがどう生きぬいているか、その事実を記録として残すことを主たる目的として作成しました。

2012年3月までに、岩手・宮城・福島から15人の手記が寄せられました。これらは各々の地域で青年団・青年会の活動をしている青年たち、およびそのOB・OGの方々です。また、ここには被災地以外の地域の青年たちの記録もおさめました。直接的には甚大な被害がなかった場所であっても、一人ひとりの青年たちが、この震災をどのように受けとめ、どのように行動したのか、その事実もまた、このたびの震災を生きぬく青年たちの歩みであると考えたからです。

この記録を作成する直接的なきっかけとなったのは、「この経験を記録に残したい。多くの人に知ってほしい。伝えたい。そして、この経験を次に生かしてほしい」という、被災地の青年たちの声でした。この声に応え、日青協は次のように呼びかけました。

私たちは、大震災での一つ一つの経験を、同世代の多くの方々や次の世代へとつたえていきたいとします。また、書いた内容を元に話し合い、暮らしや地域を見つめ直すきっかけにつなげていきたいとします。

今、各所で震災の手記が多く作成されていますが、私たちのこの記録の特徴は、青年の経験と視点からの記録であること、青年団・青年会の全国ネットワーク（日青協）のなかで震災前から関係を有する者どうしが多く書いていること、そして書いたものをもとに話し合う場と仲間を持っていることだと考えます。

けれども、今回、書くことには大きな抵抗もありました。被災の現実、伝えたい、忘れてはならない事実であると同時に、思い出したくもない、忘れてしまいたい記憶でもあるからです。被災地の青年たちの記録は、多かれ少なかれ、そうした葛藤のなかから紡ぎだされたものであることは間違いありません。なかには、何十ページにもわたって書いたものの、掲載にあたり、そのほとんどを削除したものもあります。一つひとつの記録の背後には、そうした文字にはできないものがたくさんあることにも、私たちは思いをいたしながら読みたいと思います。

震災から一年を経てもなお、厳しい現実が目の前に立ちはだかっていることもまた事実です。この記録を一つの起点としつつ、これからの希望へつなげていきたいと思えます。

2012年3月

日本青年団協議会・

『生きる～東日本大震災と地域青年の記録～』編集委員会

# — 目次 —

## ■はじめに

## ■目次

## ■東日本大震災に関する青年団関係の動き

— 2011年3月11日～2012年3月11日 —

## ■第1章 大震災での体験をつづる

### 岩手県

東日本大震災手記・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 陸前高田市 泉田 将治 12

被災体験記・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 陸前高田市 松田恵美子 17

東日本大震災体験記・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 陸前高田市 村上 宏 21

### 宮城県

M9・0 震度7の地から・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 栗原市 加藤 義弘 22

大震災から学んだ地域のつながり・・・・・・・・・・ 気仙沼市 高橋 弘則 27

東日本大震災手記・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 気仙沼市 芳賀 孝司 31

東日本大震災体験記・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 気仙沼市 芳賀 広美 36

東日本大震災を経験して・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 登米市 岩崎 大輔 52

震災を経て・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 山元町 齋藤 緑 68

### 福島県

東日本大震災以降の行動記録と感じたこと 会津若松市 吉田 恵三 75

## ■第2章 支援活動の記録

石川県青年団協議会・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 92

大阪府岸和田市青年団協議会・泉佐野市青年団協議会・・・・・・・・ 98

岡山県青年団協議会・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 107

日本青年団協議会・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 113

■この記録冊子ができるまで・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 辻 智子 117

■おわりに ～青年団の仲間たちへ～・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 田中 潮 125

## 東日本大震災に関する青年団関係の動き

—2011年3月11日～2012年3月11日—

2011年

- 3月11日 **東日本大震災発生**  
日青協、ウェブサイト上に緊急掲示板を設置し安否確認の共有化。1週間で約 22,000 アクセス（掲示板設置は 18 日まで）。
- 3月12日 各地で義援金の行動が始まる。岡山県団の義援金の活動では 100 余名の青年が集まり、約 107 万円が寄せられる。
- 3月15日 日青協、3月の機関会議を中止し、5月の定期大会までの日青協運営を、規約や機関決定を踏まえず執行部委任とする異例の対応をはかる。これまでの国際募金等を取り崩し、緊急 100 万円募金拠出を決定。
- 3月20日 泉佐野市青協、佐賀県団などから 100 万以上が寄せられる。滋賀県団、イオンモールで横断幕にメッセージを書く取り組み。  
日青協、復興支援ブログ「今、私ができること」を立ち上げる。
- 3月21日 日青新聞を使ったメッセージ広告を呼びかける。
- 3月25日 陸前高田市青協・橋詰会長より米崎小学校避難所への支援物資要請。  
以降、継続的に各地への物資の支援活動を繰り返す。
- 4月7日 **宮城県などでM7の余震発生**
- 4月11日 日青協・吉田会長、現地視察と義援金贈呈のため岩手県を訪問。
- 4月12日 大槌町青協より支援物資要請。
- 4月16日 吉田会長、現地視察と義援金贈呈のため青森県を訪問。  
宮崎県美郷町北郷区青年団協議会が酒蔵チャリティコンサート実施。
- 4月17日 吉田会長、現地視察と義援金贈呈のため宮城県を訪問。
- 4月25日 気仙沼信用金庫職員・高橋弘則（元日青協副会長）がNHKのテレビ番組「クローズアップ現代」で取りあげられる。
- 4月28日 日青協・田中事務局長、義援金贈呈のため千葉県を訪問。
- 5月2日 宮崎県高原町青年団「灰プロジェクト実行委員会」設置。新燃岳の火山灰を瓶詰めして販売。売り上げを義援金に。
- 5月4日 第61回日青協定期大会（5日まで）  
震災復興にむけた懇談会実施。各加盟団より義援金が寄せられる。
- 5月13日 岸和田市青協、気仙沼へボランティア 35 名派遣。
- 5月17日 宮城県団より南三陸町立戸倉中学校卓球部への支援物資要請。
- 5月19日 田中事務局長、義援金贈呈のため茨城県を訪問。

- 
- 5月21日 山形県団、松島市へボランティア派遣。
- 5月26日 宮城県山元町で災害臨時FM「りんごラジオ」の齋藤緑（元日青協副会長）より支援物資要請。各地からカセットテープが寄せられる。
- 6月 2日 日青協、震災ボランティア募集開始。
- 6月 3日 大槌町役場職員・加藤国雄さん(前日青協常任理事)の遺体が発見される。
- 6月 5日 岡山県団、湯郷ベル県民デー（カンコースタジアム）で出店と募金活動。
- 6月11日 日青協全国代表者会議（12日まで）で、第2次義援金を岩手・宮城・福島の3県に50万ずつ配布。各加盟団からも義援金が寄せられる。遺体で発見された加藤さんへの寄せ書きを呼びかける。
- 6月26日 日青協震災復興ボランティアを宮城県山元町に派遣（27日まで）。
- 7月 1日 日青協第3次義援金(基金方式)の要項を公開（以降、復興支援基金）。
- 7月 2日 茨城県青少年協会、日青協義援金を活用してボランティアバスを宮城県石巻市に派遣。
- 7月 3日 愛知県団、福島物産市を実施。
- 7月14日 泉佐野市青協、南相馬市へボランティア派遣（16日まで）。
- 7月16日 日青協第2次ボランティアを宮城県山元町に派遣（17日まで）。
- 7月19日 日青協、第1次復興支援基金を、北海道、岩手、福島の計5団体に贈呈。
- 7月25日 日青協第2次復興支援基金を公募。
- 7月29日 福島県団、義援金の一部を会津若松市に寄付。
- 8月 3日 日青協第2次復興支援基金締め切り。
- 8月 8日 岡山県団と岡山県青年館、高校生ら60名を陸前高田市にボランティア派遣（12日まで）。
- 日青協、第2次復興支援基金を応募のあった北海道・岩手・宮城・福島の各団体に贈呈。
- 8月13日 陸前高田市横田青年会、横田夏祭り盆踊り大会を開催。
- 9月 1日 日青協第3次復興ボランティアを陸前高田市に派遣（2日まで）。
- 9月 3日 福島県団、いわき市青年会を沖縄県青年団協議会主催の「青年ふるさとエイサー祭」へ派遣（4日まで）。
- 9月11日 日青協第2回理事会で学習会「放射能と私たちの暮らし」を開催。「加藤国雄さんを偲ぶ会」を開催。
- 9月14日 南三陸町の軟式野球チーム「サンライズ」から支援物資の呼びかけ。
- 10月 8日 高知県西土佐連合青年団、仙台で行われた「みちのく YOSAKOI」に参加。名取市など視察（9日まで）。
- 10月 9日 陸前高田市青協、第55回青年芸能祭を開催。
- 10月15日 茨城県青少年協会、宮城県石巻市にボランティア派遣。
-

- 10月23日 大槌町青協、千葉県の人形劇団「旋風鬼」と人形劇公演を実施。
- 11月 2日 陸前高田市青協・橋詰会長、全国消費者団体連合会主催のシンポジウムで発言。
- 11月 6日 陸前高田市青協、「桜ライン311」の第1回植樹を実施。
- 11月 9日 第60回記念全国青年大会開催(11日まで)。義援金の活動などが各会場で行われる。
- 11月22日 (財)日本青年館、ピアノデュオ・クトロヴァツ兄弟による東日本大震災復興支援コンサートを日本青年館大ホールで開催。
- 12月10日 日青協第2回全国代表者会議(11日まで)で、復興支援コンサートの義援金を岩手・宮城・福島の3県団に贈呈。
- 12月17日 宮城県団、震災以降の子どもたちのケアをテーマとしたフォーラムを開催(18日まで)。
- 12月20日 日青協第3次復興支援基金の要項を公開。
- 12月21日 日青協、南三陸町「サンライズ」へ支援物資を送付。

## 2012年

- 1月10日 日青協第3次復興支援基金の支援先を決定。
- 1月12日 被災の手記の呼びかけ開始。
- 1月15日 石川県団、第57回県青年問題研究集会(第二部)「東日本大震災の今とこれから」開催。
- 1月22日 岸和田市青協、南三陸町へボランティア派遣。
- 1月28日 宮城県団、第34回県青年問題研究集会を開催(29日まで)。元日青協副会長・齋藤緑が山元町での青年活動、震災後の状況や「りんごラジオ」について基調講演。特別分科会「震災を語り継ごう」開設。  
滋賀県団、県青年問題研究集会で陸前高田市青協・橋詰会長を招へい。
- 2月26日 大槌町青年団体連絡協議会「復興の集い」開催。
- 3月 2日 「生きる～東日本大震災と地域青年の記録～」第1号(暫定・全国青研版)発刊。  
日青協、第57回全国青年問題研究集会開催(4日まで)。問題別集会「それぞれの3.11～東日本大震災を語る～」で被災地の青年たちが報告し、参加者と討議。
- 3月11日 陸前高田市青協、桜ライン311第2回植樹。

# 第1章 大震災での体験をつづる



## 付記

- ・手記は、居住地の北から順に、居住地内は名前のあいうえお順に、並べて掲載した。
- ・個々の手記執筆の経緯は、「この記録冊子ができるまで」に記載した。
- ・編集作業においては、誤字・脱字の加筆修正、漢字と平仮名との変換、必要と思われる改行などを行った。

(編集委)









---

## 東日本大震災手記

陸前高田市 泉田 将治

---

震災当日、職場であるガソリンスタンドからの配達途中に立ち寄ったコンビニにいました。携帯電話の緊急地震速報が鳴り出したと思ったら、ドンと大きな揺れがきました。2日前にも大きな地震があり、そのくらいだろうと軽く考えていたら、揺れはドンドン大きくなり、コンビニエンスストアの窓ガラスが割れ、駐車してあるタンクローリーが大きく揺れるさまを見て、これはちょっとしゃれにならないんじゃないかと思いました。そしてすぐ、津波が来ると頭に浮かびました。

揺れが収まると、すぐに職場に戻り、燃料の地下タンクに漏れがないかを確認——亀裂が入って洩れていると万が一の場合火事が発生する——していました。そうこうするうちに社長が来て、消防団だから早く出動しろ、と言われて、作業を他の人たちに任せ消防団としての活動へ移っていきました。

作業へ向かう途中では、あちこちの道路が渋滞し、大混乱に。やっとのことで渋滞をぬけ、川の堤防が崩れていないかを確認し、ひび割れた堤防に人が立ち入らないようにロープで封鎖したり、山に上って道路の陥没や、崖崩れがおきていないかを確認していました。その間に街を津波が襲っていたんです。山から降りてくると、津波はひいた後でしたが、これまで想像したこともないような場所まで波が来ていました。100年近く生きている人たちにしても初めてのことだそうです。川を見ると見慣れない物がある、何だろうと近づいてみると、港にある漁協のタンクが転がっ

---

て川の中にありました。どのような状況になっているか見当もつきませんでした。電気はないし、もちろん情報は遮断。頼みの綱はカーラジオだけ。ラジオから聞こえてくる情報では、津波がとんでもない高さだったと報道されていますが、肝心の陸前高田市の情報が一切入ってこない。どうなっているんだって思っていると、逃げて避難してきている人たちが、「高田は、もう終わりだ。何もない」と。何もないわけがないだろうってそのときは思っていました。

その後は、消防団として、屯所で待機していました。その最中、近所の人たちが、家が怖いと公民館に集ってきて、公民館に発電機を持っていくといった仕事をしていました。夜の9時くらいになってから、市の消防団から無線が入り、一ノ関に自衛隊が来ているから、明日の朝までに高田の町につながる幹線道路を確保しろという命令を受けました。

そもそも、道路の状況がわからなかったのを確認に行ってみたら、町につながる橋の上に家がちょこんと乗っていました。近くの道路も瓦礫の山。さらに、流されたプロパンガスや灯油タンクが洩れて、ものすごい臭いが充満していました。とりあえず、最初は手作業で瓦礫の撤去を始めました。何も機材がなかったのです。でも10分くらいで全員が埒が明かないと、重機を借りることにしました。森林組合に勤めている人たちに連絡して、山から重機を運搬してきて、深夜の2時くらいまで作業しました。とにかく、車一台くらいが通れる幅の道をどんどん作っていきました。その後しばらくして、その日の作業をやめ、明日の朝6時集合と連絡がありました。明日

といってももう4時間後に集合ですし、家に帰ったってどうしようもないし、電気来てないからと、とりあえず屯所に寝泊りする人もいれば、家や家族が心配だからちょっと家を見に来るといった人もいました。

次の日から我々は「生存者確認」に携わりました。瓦礫の山を歩いて超えて。自衛隊が搜索したのち、木の棒に赤いテープを取り付けていくのです。ここに遺体がありますよと。そうした遺体を我々消防団が見つけて、その場所に行きつけて引き揚げてくる。最初のうちは道路がないので担架で運びます。ある程度の高台まで搬送し、そこからは車という作業を、4月末までずっと行っていました。重機をつかい、瓦礫の撤去を行いながらの搜索活動は、凄惨なものでした。遺体が五体満足で見つかるのはまず稀でした。体の一部分だけといった状況も多々ありましたし、何より知っている方の遺体を引き上げる作業がつかった。数週間は満足に眠ることもできませんでした。あの時の記憶は一生消えないでしょう。毎日そうした光景を見て歩くと、気分が滅入っていききました。どンドン、どンドン、自分がおかしくなっていくのがわかるので、なるべくそういうことを考えないで、何か面白いことを、楽しいことを考えてないと、自分がおかしくなっていく気がしたのです。震災後、道路がまだ復旧していないころは、海に向かって歩く人が多かったです。家族も誰もなくなってしまっていて、生きる意味がないから死んでしまいたいって人が。でも、消防団員である以上は、そう言う人たちの首根っこをつかんででも阻止しなければ、死ぬなら俺の目の前じゃなくて違うところで死んでくれって。消

防団の半纏を着ている限りは市民の生命と財産を守る義務がある。目の前で死のうとしている人をほっとくわけにいかないんですよ。他の被災地でも同様のことがあったのではないのでしょうか。

電話が復旧してからは、日青協の関係者の方からもたくさん電話をもらいました。その時心がけたのが面白おかしく語ろうってことです。そうでないと、自分がどうにかなってしまいそうだったから。不謹慎だと思う方もいたかもしれないけども、悲しく話していたら自分自身が死んでしまうのではと感じていました。

被災地の実態を知りたいのであれば、現場に来てほしかったですね。ニュースで流れているような出来事は、何千とあるうちの一つに過ぎないのです。そうした状況は、やっぱり現場でないと伝わらないものもあるのではないかと思います。

今回、助かった方と亡くなった方を分けたのは、ほんの一瞬の差だったんじゃないかと思えます。後ろを走っていた家族が振り返るといえない、そんな友人もいました。そして、今回亡くなったお年寄りの中には、これまでの経験から、ここまで津波は来ないと逃げなかったことで、命を落とした人も多くいます。津波到達点を予想したハザードマップは、当然過去の記録をもとに作成されていますから、今回のような想定外の災害には対処できないのです。こうした経験は、今後にも引き継いでいくことが重要だと考えています。防災計画を見直すことももちろんですが、今回の体験を風化させないよう後世に伝えていくこともまた、残された我々の大事なことではない

かと考えています。

(陸前高田市青年団協議会)



日青協吉田会長（当時、右）より義援金を贈呈される泉田将治さん（左）



陸前高田市青協主催「青年芸能祭」掲載記事





## 被災体験記

陸前高田市 松田恵美子

---

### 1. 発生当時

平成23年3月11日、私の生まれ育った町が東日本大震災による大津波によって壊滅しました。

当時私は、陸前高田市の隣町、住田町にある工場で出荷の準備をしていました。最初の揺れは小さく、いつものように直ぐにおさまるだろう、と思い作業を再開したのです。しかし、揺れはおさまるところか大きくなる一方でした。大きくなってきたので、製品が落ちないように押さえていましたが、更に大きくなりついには電気も消えてしまいました。工場長の指示で直ぐに外へ避難しました。逃げ出すのと同時に、天井から板が2枚程落ちてきました。逃げている位置が悪かったら確実に当たっていたと思うと恐ろしくて仕方がありません。その後、工場長や幹部の皆さんの判断により全員帰宅指示が出されました。

帰る最中の道には、あちらこちらに小さい石や少し大きめの石が落ちていました。帰宅している最中に家にいる祖父が心配でした。

家に着くと、祖父が外に避難していて無事でした。ちょうど地震が発生した時は外で作業をしていたそうです。余震が頻繁に発生していましたが、その合間を見計らって物が落ちていないか、ガラスが割れていないかの確認をしました。その結果、異常はありませんでした。自室以外。自室だけ、机の上にあった書類や本が棚から落ちていました。何故自室のみなのだろうと感じました。

---

それから、外に避難し防災無線を聞いていました。防災無線では、津波が押し寄せて来ており、必死に市民に避難の呼びかけをしていました。その放送を聞きながら、どのくらい大きいんだ！？と思いました。何しろこのような体験はしたことが無いので、全く想像ができませんでした。そのうちに、防災無線も切れ携帯電話も使えなくなり、他の青年会の人達とも連絡が取れず心配でした。ちょうどその時、消防に入っている弟から青年会の泉田将治さん、橋詰琢見さん、村上和三さんが無事だったと聞いて安心しました。他の方々の安否を知ったのは暫くしてからでした。

## 2. それから

その日からの生活は大変でした。電気は来ていないので、暖房機器は使えませんし、明かりもつきません。昼間の明るい内に火をおこし、ご飯を炊いたりおかずを作ったり、その日使う分のお湯を沸かししたりしていました。幸い私の家は山から水をひいていたので水の心配はありませんでした。夜は、蝋燭の明かりだけで過ごしていました。夜はまだまだ寒かったので、高校時代に部活で使っていたベンチコートを着て、ソファの上に毛布に包まって寝ていました。いつ大きな地震が来てもいいように、一階の茶の間で寝ていました。

職場のことも心配でしたし、今後どうなるのか分からなかったもので、とりあえず翌週から職場に行きました。工場長の指示で男性は、地震により移動してしまった機械を元の位置に戻す作業に取り掛かりました。女性は、割れた蛍光灯を片付けたり、天井から落ちてきたゴミを片付けていました。私は、自分の部

署の片付けをしていました。震災から3日後の14日には、住田町のみですが、電気も復旧したので機械の立ち上げが始まりました。私も自分の部署で本来の仕事をしていました。

それと同時に携帯の電波も復活したのですが、何故か使えるのは au のみ。私の携帯が au だったので、私の携帯で本社や関係者に連絡していました。休み時間にメールの確認をすると、遠く離れた友人や全青研で知り合った方から、安否を心配するメールが入っていました。それを見て泣きたくくなりました。その内の一人の友人が毎日のように励ましのメールをくれて凄く元気付けられたのを今でも覚えています。その子のお陰で乗り越えることが出来ました。その子には感謝してもしきれません！！

その当時、ガソリンも無かったので、近くに住んでいる人同士乗り合わせて会社に行っていました。しかし、18日には燃料が底を尽きかけたので自転車で会社まで行きました。片道約40分の道程でした。その後、翌日の朝5時に行列に並び燃料を補給しました。早朝にもかかわらず既に長蛇の列。燃料も残り僅かだったので、待っている間はエンジンを止めながら進んだりしていました。入れられる燃料も制限があり、2,000円分までしか入れられませんでした。

私が住んでいる地域の電波と電気が復活したのは、住田町が復旧した2日後でした。その日から、テレビを見ることが出来ましたので、やっと色々な情報を得ることが出来ました。そうして、少し落ち着きを取り戻し、部屋の片づけも行い、ゆっくりと布団の中で眠りました。

翌週からは会社も日勤のみですが、動き始めることが出来ました。しかし、問題が起こります。会社は動き始めたものの配達業者が動いておらず、出荷が出来ませんでした。そこで他の会社のつてを辿り支援物資を運んできた業者のトラックに乗せてもらい出荷したり、遠野まで足を運びそこから出荷していました。暫くしてから宅配業者が元に戻りましたが、その間は大変でした。

### 3. 活動について

#### (1) 陸前高田市青年団体協議会

陸前高田市青年団体協議会（以下市青協）では、震災前から使用していた会館が津波によって流されてしまいました。そのことにより、会員の集まる場所が無くなってしまい、最初の内はなかなか集まる事が出来ませんでした。定期総会も通常どおりに開催することが出来ず、5月の末に横田町にあるコミュニティーセンターで臨時総会を開き、平成23年度の活動を開始しました。それから横田コミュニティーセンターを仮の会館として、市青協の拠点としました。市青協の一番の活動としては、例年1月の末に開催している『青年芸能祭』があります。今年は開催をするかどうかと悩みましたが、開催することにしました。少しでも地域の人達に笑顔になってもらいたいということで開催しました。しかし、開催を決めたものの時期をいつにするか、会場はどこにするのか、出演団体はどこにお願いすれば良いのかと、山のように問題点が出てきました。

皆でつてを頼り、開催時期は10月の3連休の日曜日に、開催場所は高田小学校の体育館

をお借りしました。出演団体については、会長の声かけで遠野市からは神楽、盛岡市からは獅子踊り、山形県からは大学のサークルで花笠踊りの方々に参加してもらいました。地元からは、横田青年会の舞踊、米崎青年会の太鼓を披露しました。

芸能祭のフィナーレとして、よく盆踊りで踊られている『高田音頭』を見に来てくれたお客さんや出演して下さった方々と一緒に踊りました。見に来てくれたお客さんの1人から、「まさか、高田音頭を踊れるとは思わなかった。来て良かった」と言う話を聞いた時、開催して良かったと思わず少し涙ぐんでしまいました。陸前高田市が復興するまでは、このように小学校などの体育館をお借りして開催することになると思います。この経験をいかして、今後の活動の参考にしてこれからも開催していきたいと思っています。

#### (2) 横田青年会の活動について

平成23年度は、私が横田青年会の会長兼会計として活動してきました。横田青年会の主な活動は、毎年8月13日に行っている盆踊り大会と、12月に行っているクリスマス行事です。今年は盆踊りを自粛しようか悩んでいましたが、地域の方や青年会の先輩方に「こんな時だからこそやった方がいい」という意見をいただき開催しました。今年は例年と違い、開催していた中学校の校庭に仮設住宅が建ったため、コミュニティーセンターの庭を借りて行いました。お知らせのチラシも仮設で来られている方たちにも来てもらいたかったので、一軒一軒に配りました。露店で販売する物の数量を約2倍に増やしました。当日

は販売等で忙しかったのですが、来てくださった方々の楽しそうな笑顔を見ることが出来て良かったと思えました。仮設に住んでいる方も参加してくださいました。不安でしたが、無事に終えることができました。

12月にはクリスマス行事があり、クリスマスツリーを建てたり、会員がサンタに扮して子ども達の家にお菓子を届ける行事を行いました。ツリーについては、毎年11月の下旬から12月の初めに小学校の向いにある田んぼをお借りして設置しています。今年は先輩もいなかったの、あ〜でもない、こ〜でもない、と四苦八苦しなから設置しました。その日の夜、きちんと点灯するのか心配だったので確認に行きました。きちんと明かりがついたことに安心していると小学校の仮設にいる子どもたちの歓声が聞こえて来て、設置して良かったと思えました。

サンタ行事については、横田に居る子どもたちの他に仮設に住んでいる子どももプレゼント配布の対象にしました。例年より人数が増えた為、配布に行く人の人数が足りなくなりましたが、この震災で知り合ったボランティアの方たちに手伝ってもらい配布しました。帰ってきたボランティアの方々の話を聞くと、子ども達が喜んでくれたとのことでした。ボランティアの方々のおかげもあり無事に終えることが出来ました。仮設住宅につきましても、何年かはこのままになると思いますので、地元の人達だけでなく、仮設に住んでいる方たちにも楽しんでもらえるよう頑張っていきたいと思えます。

#### 4. 最後に

今、私達市青協では、津波の到達地点に桜を植えて後世に伝えよう、というプロジェクト、『桜ライン311』を立ち上げました。後から生まれてきた子どもたちにこの大震災のことを伝えていくと共に、桜の花が咲いた時に、ここまで津波が来たのだと忘れずに胸に刻んで行きたいと思えます。そして今回と同規模の震災が起こった時、この桜の木よりも高いところ、遠い所に避難する目安にしてもらい、少しでも多くの方たちの命を守る役に立ててもらいたいと思えます。桜のラインになるまでには、まだまだ時間はかかりますが、私達で出来ることを一步一步前を向いて頑張っていきたいと思えます。

(陸前高田市青年団体協議会)



桜ライン 311 第2回植樹で司会をつとめる

松田恵美子さん(2012年3月11日)

## 東日本大震災体験記

陸前高田市 村上 宏

### 1、自分の状況と家族の状況とその後の避難生活

自分は、高台にある陸前高田市から民間委託された会社で仕事をしていました。

いきなり携帯電話の緊急地震速報と地震の揺れが同時におきました。とても激しい揺れで立ってられない程でした。その後、15時20分くらいに会社から帰社の指示があり帰社しましたが、途中で海沿いの道がある為、一時箱根山に車で避難しました。その直後に、高田松原を乗り越えて大津波がやってきました。その後、箱根山で16時15分位までおり、下山し、家まで帰れないようでしたので、小友町に有る友人宅に車を置き広田まで歩いて行きました。途中道が浸水していたりしていた為に、山道を3時間程歩き自宅の近くまで着いた時に自分の家も被害があったのだと聞き、部落の会館に着きました。

家族は、母がちょうど近所で不幸があった為仕事を休んでいて、地震と同時に近所の人達と位牌だけ持ち会館に避難し無事でした。妹は、隣の大船渡市の内陸部で仕事をしていたので無事でしたが、地震後4日間連絡が取れず、5日目に部落の人に連れて行ってもらい、無事が確認できました。

会館での避難生活では、約25畳の所に30人が避難し、入りきれない人達は、被害の無い家に避難しました。自分の部落は、井戸がある家が多数有り、かまどがある家もあり被害の無い家から食材や毛布を提供してもらい

ましたが、自衛隊の支援がやってきたのは地震から6日目でした。その後は、全国の皆様からの支援物資で大変助かりました。避難所の会館は、5月半ばに仮設住宅に入居する人達もいるため閉鎖されました。それぞれ仮設住宅に入居する人、知人宅に身を寄せる人もいました。自分は、被害の無い知人宅に身を寄せ、母は自分の実家に行きました。妹は仕事の都合上、高田町の高台の伯父の家に、無事が確認できた時から避難していました。その頃には、ライフラインも復活していましたので、避難生活も大丈夫でした。7月13日に仮設住宅に入居できました。

### 2、集落の被害と自分の家の被害

自分の集落は、海沿いにあり戸数28戸あり、自分の家は海拔5mの場所にあり、目の前には7mの堤防がありました。集落の被害は、流失4戸・全壊13戸・大規模半壊3戸・床下浸水2戸でした。波は、明治29年の大津波の、石碑のある海拔18mの場所より、1m以上奥まで駆け上がりました。今、集落では、自分の家を含め5戸が修復途中です。自分の家は1階の長押まで水に浸かりましたが、現在修復途中です。将来的には、集団的高台移転を計画しています。

### 3、近況

今自分は、仮設住宅の自警団活動をしています。20~40代の男性を中心に活動し、夜間パトロールや一人暮らしの老人への声かけ等の活動をして仮設住宅での安全・安心生活の為の活動をしています。それ以外に、住んでいた部落の集団高台移転の話し合いを毎週部落の人達としています。

(陸前高田市青年団体協議会広田青年会)

---

## M9.0 震度7の地から

栗原市 加藤 義弘

---

### 大地震発生…

平成23年東北地方太平洋沖地震（東日本大震災）が発災してから、1年が経過しようとしています。多くに皆さんが被災され、また尊い命を奪われた方もたくさんいたことを決して忘れず、心からお見舞いのご冥福をお祈りいたします。そして、今なお行方不明となっている方々が、一日も早くご家族の元にお戻りになることを願っています。

地震があった、平成23年3月11日金曜日午後2時46分頃は、平日であり当然仕事で市役所金成庁舎におりました。この強大な地震は、地震エネルギーが三度にわたり修正された結果、マグニチュード9.0となり、栗原市では、「観測史上最大の震度7」に加え、その強い揺れが約6分間続いた事実が後で分かりましたが、とてつもなく長い時間に感じていました。

栗原市では、平成20年岩手・宮城内陸地震でも被災し、復興への道のりを歩み続けていたところでしたが、その強い揺れと揺れ始めてすぐに停電したことなどから、内陸地震の際にも直感的に頭を巡った、これが今後20年以内に90%以上の確立で発生すると言われていた「宮城沖地震か」と、今回も直感的に感じました。

日青協が立ち上げた「青年団緊急掲示板」に、私が書き込みしていた内容が、当時の状況をリアルに表現していたのでその内容を記

します。

〈2011/03/18 (Fri) 23:22:49〉

日青協でお世話になりました、宮城県栗原市金成の加藤義弘です。

地震発生以来、全国の先輩・同志・仲間の皆さんから、たくさんのメールや電話をいただいていたようです。家族共々無事でいました。

発災以来、停電などの影響で、電話・携帯電話・インターネットなど通信手段が絶たれておりました。誠に申し訳ございませんでした。

発災した11日から3日連続完全徹夜で災害対応に追われていました。これで、2泊3日の青年問題研究集会を不眠不休でのりきる自信が取り戻せました

3日目の深夜に「家に戻って休んでこい」という指示のもと、一旦家に帰りましたが、建物は無事そうですが、部屋の中は散乱状態でそれから小1時間片付けをして、布団に入れたのが、午前3時を過ぎていました…そして、7時には職場に復帰しなければならず…という状況でした。

発災から、今日で7日目となりましたが、これまで家に帰って寝た（仮眠？）のは3晩目となります。帰ったと言っても、いずれの日も午前2時前後でしたが…。

地震が発生した11日14:46ごろは、東京から来た建築設計事務所と学校建築の設計協議中でした。会議室にいたので、外の状況をじっくりと観察していましたが、地面が開いたり閉じたりする様や地面が波のように揺れる

様子を確認することができました。

その後、市内の学校・幼稚園の児童生徒・教職員の安否確認から始まり、学校施設・社会教育施設の被害状況確認・調査・復旧方法の検討などで今日まできました。

仕事も一段落して、今日は、やっと早く帰れそうです。と言っても深夜ですが…

地震で揺れている最中に始まった停電によって、我が家では、昨年1月にIHとエコキュート（夜間電力利用給湯器）に切り替えていたので、調理・給湯や暖房の熱源が絶たれて困っていました。

昨日（17日）に通電が再開され、水道も復旧しました。…が、エコキュートが故障（もちろん地震が原因です）してしまい、未だにお風呂に入れません

食糧は、自家生産のうまい米「ひとめぼれ」は沢山ありますが、冬場で野菜が不足していたことや魚肉類は全く摂取することができませんでした。体調は、悪くありませんが絶好調ではありません（わかってくれるかなあ〜）。

発災した11日は、翌12日が市内中学校の卒業式を予定しており、その準備作業をしていました。金成中学校では、屋内運動場で卒業式の準備をしていて、コンクリート落下物によって、先生1人が左足首複雑骨折という大怪我をしましたが、生徒に人的被害はありませんでした。地震後に見た建物被害の状況からは信じられないくらい、不幸中の幸いです。

我が愛娘も12日に金成中学校卒業式の予定でしたが、延期となりました。実際の卒業式は、15日に同じ地区内の比較的被害の小さかった小学校体育館に会場を移して卒業式が

挙行されました。

仙台に新幹線通勤で勤務する妻は、交通手段が絶たれ今日までに帰ってきていませんし、自分も市職員として災害対応から抜け出せるはずもない状態でした。15日朝に一旦家に戻り娘に卒業式会場まで送っていくかと尋ねると「いいよ…自転車で行くから。ちちは、みんなのためにがんばって」と返され、思わず涙してしまいました

まだまだ、沢山伝えなければならないことが、有りそうな気がします…

とりあえず、無事でいて、皆さんからの連絡に応えられなかった事情を理解し受け止めていただければと思います。

そして、たくさんの仲間の皆さんからの激励に心から感謝を申しあげます。

ありがとうございました。

まだまだ、先が見える状態では有りませんが、皆さんとできるだけ早く再会できて、酒でも酌み交わしながら語り合うことができる日を楽しみにがんばっていきます。

ああ〜それとね…、発災の11日真夜中（午前3時頃だったと思います）に仕事ででしたが、そして、とても寒かったのですが、外に出て一息入れた時に見上げた星空は、見事でもとてもきれいでしたよ！

地域全体の全面停電がもたらした奇跡かもしれませんが、満天に無数の小さな星たちがとてもキラキラと輝いていました。普段は見えなくても、がんばっている存在を再認識させられた気分でした。

いつもはあまり目立たなくても…全国の青年団もきっとそれぞれの地域でキラキラと輝いていると確信をしています。

がんばりましょう！！！！

我が家の状況は、地震直後から始めた市内の学校幼稚園の児童生徒・教職員の安否確認の際に自宅前を通過したので、少しの時間で娘と父母の無事を確認していましたが、それから3昼夜後の午前2時頃に家に帰った時は、停電で当然真っ暗だったので娘と父母がどこで寝ているのかも分からずに部屋に行き休み、夜が明けて、茶の間に行ったら3人で固まって寝ていました。聞けば、強い余震が続いて、お互いにそばにいて、過ごしていたとのことでした。

家の中は、散乱状態で、人手もなかったので自分たちが生活するスペースを確保する程度の片付けをしていましたが、私の部屋は、地震の時のままでした。二日おき程度にしか帰宅できないため、なかなか片付けることができずに睡眠スペースを確保する程度がせいぜいでした。

他には、冬場は日常的に暖房用の灯油をストックしていましたが運悪く、間もなく給油が必要な時期の被災だったため、暖をとるための灯油が少なく、近所から分けてもらって凌いでいました。

断水による飲み水、生活水の確保も大変で、役所前の給水所は長蛇の列となり我が家族には大きな負担となっていたようです。

食糧も、コメ以外の食材がだんだん底をついていることを承知していたので、これも大きな不安となりました。避難所に行けば食事の供給はあるものの、自宅にいとその支援は受けられず自分が安心して仕事ができるように何とかならないものかとも感じました。

仙台に勤務する妻は、交通手段が絶たれ帰宅できず地震発生当日の11日金曜日から13日日曜日までは、会社の同期の同僚宅にお世話になっていました。14日月曜日からは、会社が用意したホテルで過ごしておりましたが、地震から5日目頃から長距離バスの運行が再開されており、翌土曜日の19日には仙台で調達をした食糧を持って帰宅できるようになりました。この時に、仙台では食材などを大量に持ち歩くと、実害はなかったものの物取りに狙われる感覚があり恐怖を感じたことを話していました。妻は、土曜日に帰宅し、日曜日に仙台に向かう、こんな生活が、新幹線が開通する4月末頃まで続きました。

発災から7日目に、停電と断水は復旧したもののエコキュートが被災したためお風呂に入れないことや食事が同じような内容の生活が続くと、家族の機嫌が悪くなっていることに気づきました。9日目に一関市の日帰り温泉施設に家族全員でお風呂に入りに行きましたが、ねらいどおり、風呂上がりには徐々に家族の笑顔を見ることができました。

この頃ようやく、停電と断水が復旧したので、地域の商店も少しずつ再開され、元の生活を緩やかに取り戻し始めてきました。

## 二度目の大地震

栗原市では、4月3日から大津波被害を受けた南三陸町の皆さんの二次避難先として受入を行い、当初は避難所運営を市職員が交替で行っており、私は4月6日の午後6時から翌朝午前9時までのいわゆる夜勤を担当しましたが、まだまだ混乱している状況下で午前3時ごろから午前5時少し前まで2時間程度

の仮眠しかとれませんでした。

翌日4月7日は木曜日であり、二次避難所から直接通常勤務となっていて睡眠不足もあったので、その日の勤務を終え午後9時過ぎには帰宅させていただき、夕食をとった後、疲労困憊し茶の間でそのまま横になって寝てしまっていた午後11時32分ごろ震度6強の余震が発生、災害時の緊急配備となり着の身着のままで役所に出勤しました。

再び、停電と断水との戦いが始まりました。「またか…」という想いを強く持ちましたし、もう災害復旧はご免だという感覚で業務にあたっていました。その内容も、3.11の被害拡大があり、さらに、この巨大余震で新たな被害が発生しており、学校をはじめとする教育施設の被害調査が完全に振り出しに戻りました。しかし、幸いに今回の停電と断水は、3日後には、復旧したことが唯一の救いでした。

この巨大余震で、沿岸部の津波は発生しなかったものの、内陸部では家屋倒壊など民間住宅被害が多発の状況となり、地震から1年が経過した今は、東京から青森を結ぶ国道4号線と三陸の海から山手を結ぶ主要道路が行き交う交通の要衝として栄えた我が地元、沢辺の町並みも高齢者の単身世帯を中心に解体され、町並みが歯抜け状態になっています。

3.11と4.7の大地震を比べると、わが地元金成では、4月7日の余震が揺れを強く感じ、被害も甚大でした。幸い人的被害は皆無に等しい状態だったことが救いでした。

実は、4月7日の巨大余震の際は、3.11で倒れなかった自分が寝ているところにある家具が見事に倒れていました。しかも、倒

れた場所が、いつも寝ている自分の枕の位置、つまり普通に寝ていれば自分の頭を直撃しており、前日の避難所運営で疲れ、茶の間で寝ていたため怪我をしないで済みましたが、布団に入ってゆっくり休んでいたら大怪我をしていたことは間違いなく、その状況を目にしたとき背筋が寒くなる思いをしました。

### むすびに

今回の東北地方太平洋沖地震（東日本大震災）では、家族や友人、親戚の安否が気になりながらも自治体職員としての使命を果たさなければならず、最も身近な家族である中学3年生の娘と年老いた両親が生活する自宅にもたまにしか帰れず、帰れたとしても深夜に帰宅し早朝に出かける生活で、家の中では、何も役に立つことができずにいました。

このような状況のなかで、地元青年団の後輩やPTAの仲間たちが、我が家におにぎりを差し入れてくれたり、飲み水を運んでくれたり、遅れていた中学校卒業式に出席する娘を自宅に招きお湯を沸かして身体を洗う配慮をしてくれたり、果ては卒業式に親代わりで出席してくれました。

もちろん日常的に深いおつきあいをさせていただいている仲間たちですが、2年前の岩手宮城内陸地震時の自治体職員としての仕事の話もしていたことを覚えていて「加藤さんは、家のことを気にしないで、仕事を一生懸命に頑張ってもらいたい。自治体職員がいないと復旧が進まないから」と言って自主的に支援してくれていたことを後で知り、とても感動したことを覚えています。やっぱり、仲間って大事です。

このほかにも、自分自身も被災し、断水・停電のなかでそれぞれの地域内で安否確認や助け合いを役所の指示など無くてもまさに自助・共助能力を発揮して、お互いに支え合っている姿をたくさん目にしたり、聞いたりしてきました。

このような仲間たちの熱い想いや沿岸部の津波被害から、自分が感じ取った大災害時の教訓としては、「まずは自分の安全確保。これが確保できたら、次は積極的に災害と闘い、周りの人たちを助ける」という精神とモラルを養っていくことが大事であると強く感じました。

日本社会では、人間関係の希薄化などと表現されて久しいが、お互いを気づかい、助け合っていこうとする魂が、決して失われたものではなく、日本人のDNAとして脈々と受け継がれていると確信し、信じ合うことが必要であると強く感じました。

困っている人や、助けが必要と思われる人がいたら、どんなにたくさんの方が周りにいようと「自分が最初の助け人になる覚悟が大切で、同じ時代、同じ国、同じ場所に生きている運命共同体の一員として、「被害者にならず」「加害者にならず」そして「傍観者にならず」が究極ではないでしょうか。

皆さんと一緒に考えてみたいです。

(元・日本青年団協議会会長)



日青協理事会でお話する加藤さん (2011年9月)

---

## 大震災から学んだ地域のつながり

気仙沼市 高橋 弘則

---

### この世の終わりを感じた日

3月11日、私は同僚と港の近くにある水産会社へ営業に向かっていた。車を止める場所がなく駐車場所を探している時、携帯電話から「ピュウピュウ、ピュウピュウ」という警告音が鳴りだした。車のラジオからは「緊急地震速報—緊急地震速報—」、間もなく立ってられないほどの激しい揺れが始まった。これまで経験したことのない激しく長い揺れ、地面からは水が噴き上がり、電柱は左右に交わるほど揺れ、電線は切れて鞭のように地面をたたいている。「これは大変なことが起きている」。命の危険さえも感じた私は無我夢中で職場へ向かって車を走らせた。

地震が収まって間もなく「大津波警報—大津波警報—」、サイレンとともに広報無線が鳴り続ける。何が起きているかも把握できず、とにかく高台へ高台へと車を乗り捨てて走った。港を見渡せる高台へ逃げ、大勢の避難者と海の様子を見ていた。サイレンの音しか聞こえない街に静かに津波が押し寄せた。海面が急激に高くなり、建物の高さで水が入ると間もなく、建物が持ち上がり土埃とともに道なりに壊れていった。人々はただ「あーっ、あーっ」という悲鳴とため息が混じった声を上げるばかりであった。街がなくなっていく、家も店も職場も、これまで積み重ねてきた営みがすべて流されていく失望感が悲鳴になっていた。

妻は、気仙沼湾の先端にある冷蔵庫会社に

勤めていた。大津波が市街地まで押し寄せているということは、湾の先端なら真っ先に被害に遭うはずと心配して携帯電話で呼び出したがつながらない、メールもしてみたが返答がない、「もしもの時はどうしよう」。胸が張り裂けそうになり、妻の会社が見えるところまでと、ひたすら歩いた。降りしきる雪の中、切れた電線につまずき、ガレキを乗り越えながら行けるところまで行ったが、低いところはすべて浸水しており、行く手は阻まれた。波にのまれた車のクラクションが至るところで鳴り続け、屋根の上で救助を求める人がたくさんいた。「この世の終わりか」と、なすすべのない絶望感で涙が止まらなかった。映画で見たシーンのような、あまりにもひどい光景に「夢であってほしい」と願うばかりであった。

しばらくして妻からメールの返信が届いた。「大丈夫です。とにかく、生きて家へ帰ろう」「そうだ、生きなくてはい」。気仙沼小学校の避難所へ戻って同僚の安否確認を行い、その夜はそこで過ごすことにした。しかし、災いは続いた。街は至る所で火災が発生し、海に流れた重油に火が付いて炎の波が繰り返し押し寄せた。ラジオでは「市街地はすべて燃えています」と伝えている。避難所のある高台の周りも真っ赤に燃えている。「ボン、ボン」と何かが発射している。水の恐怖から火の恐怖、厳しい寒さの中、毛布も食べ物もない教室で見知らぬ人々と体を寄せ合い「早く収まってほしい」と祈った。海が燃えている。「妻は大丈夫だろうか」と思ってメールを送った。

「大丈夫?」「火に囲まれた。ダメです。ダメです」と返信。その後メールもつながらなく

なった。「どうしよう」「生きてくれー」と手を合わせ祈るしかなかった。

夜明けを待って、妻の会社が見える高台まで走った。屋上に人影が見える。「助かった」。明るくなるとヘリコプターがたくさん飛んできた。妻も海上自衛隊のヘリコプターに救助された。降り立った小学校の校庭で妻と抱き合って喜んだ。「子どもたちの待つ家へ帰ろう」。生き残れたことを実感するひと時であった。

### 生き残った者の責任

私の住む地域は、小学校や幼稚園とも比較的高台にある。そこへ最大 23mの津波が押し寄せた。幼稚園児だった娘は地震で小学校の校庭へ避難、波がおしよせる中、さらに高台、もっと高台と3度に渡る避難ののち、先生と共に雪の中で一夜を過ごした。翌日、いくつかの避難所を探し、子どもたちが避難していると聞いて訪ねた中学校の体育館では、防寒のためゴミ袋をかぶった先生と園児がかたまって丸くなり、皆泣いていた。一人の先生は園児を救うために骨を折り、他の先生は自宅が流され家族も行方不明だと聞いた。しかし、園児を保護者に帰すまでとの責任感で子どもたちを守り続けてくれた。たくさんの方々が家を失い、家族を失った。あまりにもたくさんの方が亡くなり、死んだ人や行方不明の話が当たり前で聞こえ無感情になっていった。誰かが亡くなった悲しみよりも、助かったことが奇跡に思えるほど悲惨な津波であった。

震災後の街はガレキと泥にまみれ、空いっぱいヘリコプターが飛んでいた。まるで戦争に遭ったように自衛隊の車が行き交う中、

長靴を履きリュックを背負って歩くしかなかった。一日一個のおにぎりをありがたく食べ、ロウソクの火で暮らした。電気がなく水もない、車もガソリンもなく、食料もない状況で誰一人文句を言わず、わずかのカップ麺や電池を求め何時間も並んだ。家が残った人はたくさん避難者を受け入れ、衣類や食料を提供し支え合った。近所の家では約 30 人を受け入れて食料調達に奔走し、地元の寺では 350 名もの避難者を受け入れ、その状態が3ヶ月以上続いた。

隣の南三陸町では青年団で共に汗を流した仲間がたくさん亡くなった。あの、防災庁舎では最後まで避難を呼びかけ職務を全うして5人もの仲間が流された。責任感の強い彼らの死が無念でならない。

地元の仲間も家族や家を失い、仕事までも失った。仲間が言う。「家に帰りたくても家がない、子どもたちの思い出もなくなってしまった。それがとてもつらいです」一。その言葉に私はかける言葉がなかった。後輩は、父、母、祖母の3人が目の前で波にさらわれ行方不明となった。しばらくして母親の遺体だけが発見されたが、近所や親類にたくさんの方々の行方不明者がいる状況で周りを気遣い、見つかったことを話せず葬儀もしなかった。私も、父親代わりのおじ夫婦が亡くなったが遺族は「うちは遺体が見つかったので幸せです」と話していた。家族が亡くなったことを悲しむこともできず、弔うこともできない悲惨な状況で、私は家族が助かり家も残ったことに申し訳ないと思うしかなく、何もできなかった。

何か悪いことをしたのだろうか、津波はまじめに生きてきたたくさんの方々の命を奪い、

家や財産を奪い、これまで積み重ねてきた人生も夢も希望もすべてを奪っていった。どこにもぶつけられない悔しさと悲しみでいっぱいだった。ふるさとはなくなった。ここにはもう誰一人住むことはできないだろう。ただ生き残っただけで絶望感が心を埋めていた。仲間と過ごした思い出、懐かしいふるさとの景色、お世話になった人々、これからやろうとした仕事や夢、さまざまなことが頭をよぎる時、志半ばで逝った仲間はどんな気持ちだったろうか。彼らの悔しさ、無念さを思うと「生き残った者としての責任」を考えるようになった。彼らのためにも、自分にできる何かをしなければならぬと思うことが多くなった。

### 温かい血液を流したい

私は、地元の信用金庫に勤務している。この震災で12店舗中、本店を含む10店舗が被災したが、電気もなくオンラインがつかない状態で3日後から営業を再開した。理事長からの「皆が困っている。現金がある限り、損失覚悟で出しなさい」という号令の下、通帳も印鑑も身分証明もないお客様へ仮払いを行った。一方で被災店舗の復旧作業を職員の手で行い、2週間後に通常営業を再開、他行が復旧する5月末までの2ヶ月以上もの間、当金庫のみで対応し続けた。1日千人以上もの人が押し寄せ、数万にも及ぶ通帳を再発行した。資金繰りに悩む新規の事業者へも融資を行い、地元経済復旧へ不眠不休で取り組んだ。「地域への責任とは何か?」、まさに、青年団で学んだことをこの震災で実践させていただいているような気がしている。地域金融

機関の責任として、困ったときにこそ地域の役に立つ、ましてや被災地に本店を置く金融機関として、利益やリスクを考えるのではなく、前のめりに使命感を持って支援していくという経営姿勢に、かつて青年団で経験した熱いものがよみがえった。金融は企業に血液を流す役割であるとすれば、温かい血液を流したいと思う。それは、金融工学に基づいた財務分析やデータ主体のマニュアル化された融資とは違う、融資先の経営者の姿勢やパーソナリティ等、人を見抜き、「やる気」に融資を行うことである。それは理想論であるという人もいるが、私はそう思わない。融資先の経営者を単なるお客様と見るのではなく地域を形成する仲間と見れば、うわべの付き合いでなく、より深い信頼関係を築き、そこで本当の「やる気」を感じることができる。仲間は決して裏切らないし、こちらも裏切れない。企業の復興計画と一緒に作成し継続的に経営支援を行っていく、それには上から目線の指導的な考え方ではなく、共に考え共に実行するスタンスが重要で、それを丁寧に行うことが、温かい血液を流すことにつながると確信している。そして、そういった金融機関の姿勢がなければ震災で傷んだ企業を立ち直らせるのは相当困難であると考えます。

人を見抜く力、仲間との信頼関係を築くことなどは十分鍛えられており、私の得意分野である。今こそ蓄えてきた力を発揮できるチャンスに思え、思い切って企業支援に奔走している。今になって、青年団活動に没頭した日々と私を鍛えてくれた仲間感謝している。

### 青年団で学んだ助け合いの精神

社会教育が生涯学習と名前を変え、かなりの時間が過ぎた。この震災を経験して、地域とのつながりや、人々とのつながりがとても大切に感じられるようになり、あらためて「つながり」という言葉をかみしめる機会が増えた。経済的な効果が見えず手間のかかる社会教育は形骸化され、真綿で首を絞められるようにじわじわと地域の良識は失われてきた。薄れてきたつながりや絆は簡単には取り戻せず、助け合いや支え合いの一方で、疑いや迷惑といった言葉が聞こえてくる。地域コミュニティが崩壊しつつある中で信頼関係の構築は難しく、住居が被災し、仮設住宅に移った後、隣同士での争いや中傷が絶えないと聞く。集団移転も個人の主張のみが優先し協調できない人々が多く、まとまらない。それは、偶然なのか、社会教育への取り組みが弱かった地域に多く感じられる。

復興には国の力は必要であるし、地域行政の役割も重要である。しかし、それには膨大な金と時間が必要で、支援を待つばかりでは主体性もなく成果も小さいと思う。住民自ら立ち上がり行動する力があれば、わずかな支援で復興は早まるものと確信する。

かつて先輩から、青年団は地域のライフラインだと教わった。その時は意味がわからなかったが、この震災を経験して何となくわかったような気がする。青年団は特定のサークルや団体ではない。その地域に住む青年が当たり前前に集まり、祭りをを行い、芸能を伝承するなど地域の文化を守り、その地域を担う青年として地域の問題を解決しながら仲間とのつながりを深めていく組織である。それは自

治会のようにあるが、共に汗や涙を流す中で、人との絆、地域愛や良識を学ぶ場でもあると言える。いわゆる若者が社会を学ぶという意味合いからすれば、まさに社会教育を実践する場でもある。そういった地域を思う人々がはぐくまれた地域は、復興への動きが早いように感じる。岩手県陸前高田市の「青年芸能祭」や「けんか七夕」等の祭りが壊滅的な被害を受けたにもかかわらず行われたことも、宮城県南三陸町の福幸（復興）商店街がいち早く立ち上がったことも、昔から青年団が活発な地域であり、地域で生きてきた人々が多い町であるからだと思う。

わが町でも、青年団OBによっていち早く復興祭が行われた。それぞれが日常を取り戻していない状況の中、犠牲者の冥福と心の復興を願って、世界中からのボランティアを巻き込み、ガレキの中に花火まで上げた。もちろん、市のガレキ撤去を待たずに自分たちでできるところは撤去し、自力での事業所再開も進んでいる。

人が生きることの原点に立った時、人は一人では生きられないことを痛感する。人のために何ができるか、地域でどう生きるかを深く考える。電気も電話も車も、文明がもたらしたものはひとつも使えない状況で、生き残るために助け合う。それは、昔から当たり前に行われてきたはずである。すべてを失い荒廃した地域を復興させるためにも、今こそ思い出す必要がある。それは、理想論に聞こえるかもしれないが、それを当たり前に行っている人々がいるからこそ、震災直後食料がなくても、水がなくても助け合って生活し、不平も不満も出なかった。人と人の助け合い、

支え合いによって支援を待つことなく立ち上がり、復興に向かって協力し合う私の地域を見た時、青年団で学んだ精神が最大のライフラインであることを実感した。

今後、災害がどこで起きるかは予想できない。だからこそ、復興する力を蓄えるためにも、地域を学び人とのつながりを深めていく青年教育、社会教育の充実が重要であると伝えたい。私は青年団を経験した者として恥じぬよう、果てしない復興への道を歩んでいきたいと思う。

(元・日本青年団協議会副会長)

※『かがり火』142号、2011年12月より転載。

---

## 東日本大震災手記

気仙沼市 芳賀 孝司

---

あの日は、4日後に解禁を控えたイサダ漁の準備で、日門漁港内に係留している船の上にあった。地鳴り、強震。陸上より小さく感じるはずの、その尋常でない揺れの大きさで、即座に大地震の発生と津波の襲来を確信した。岸壁のトラックを倉庫脇に移動し、崩落した岸壁に接岸したままの僚船に避難を促して急いで沖合へと船を走らせた。明治の三陸大津波、昭和のチリ地震津波と何度も大きな津波を経験してきた三陸沿岸地方に伝わる先人からの教え「津波に船は沖へ」になったのだ。

その時にはそれが後に東日本大震災と称される大地震大津波だとは知る由もなく、万全の対応が出来たつもりでいた。日門漁港のほとんどの漁船が同様に沖出しをしたが、最後の船が出る頃にはすでに引き波が始まっていて船底を海底に擦りながらの避難であったという。2日前にもあった津波の避難の際と同様に、水深50mの海域で僚船と待機中、いち早く津波が到達した岩手県の漁業無線局から「ものすごい大津波だ。もっと沖合へ避難」との指示があり、全速力でさらに船を沖へ出した。水深110m付近で大津波を視認した。異様な形状の波、波頭は砕けずともその波の大きさと勢いは脅威そのものだった。覚悟をきめ船を波に対して垂直に保ちつつ中速にして乗り越えることが出来た。魚群探知機の画面は一面真っ赤な反応となって津波を表示していた。ブリッジから振り返り目視した津波は、唐桑半島の御崎灯台を呑込む様な勢いで

さらに陸地に向かい、岩礁域の戸倉磯を越える際には、まるで滝を逆さに見ているかのように水しぶきが天に向かって走った。

津波をやり過ぎた自身の安心感からは瞬時に醒め、家族の安否が頭を巡った。両親と妻、子どもは当時小学4年生の長男、1年生の長女、三歳の次男、同居する弟の8人家族。慣習のように津波から船の避難することだけを考へて沖出し、家族のことを沖で今頃思う自身の行動を後悔した。下校途中であろう小学生は無事だろうか。

携帯電話は発災直後の使用制限で通話不能になり、津波で中継基地局は破壊されていた。確認する手段を模索しながらもテレビとラジオの情報に集中した。それでも海上のためカメラは夜半までは断続的につながった。災害ダイヤルを介して気仙沼湾に面した水産冷凍組合に勤務する弟から「合同庁舎に避難し無事」だと伝言があった。ダメ元で安否確認のメールを家族や知り合いに片っ端に何度も送信する。すると小学校教頭から「4年生以上は学校で避難して皆無事。長男も隣いる」とショートメールが入る。長男の無事に安堵すると今度は下校した1年生の長女の安否で頭がいっぱいになった。向かうバス停留所は海岸沿いにある。

隣の学区内に所帯を持つ県職員の弟からもメールが入る。出張から帰る大阪駅の新幹線のなかで、二人の小学生の息子たちを心配する内容だが「まだ分からないがきっと大丈夫だ。まず情報を共有しよう」と励ましあうような内容を返信した。妻も甥たちの小学校に事務職員として勤務していた。沖合で一緒に避難していた僚船から、長女を乗せた父の軽

トラックが自宅に向かったとの情報が入る。母親からもメールが入り、空メールではあったが発信時刻が津波到達1時間後なので津波からは逃れたはずと状況を推測した。海拔12mで目の前にそれより高いJR気仙沼線の陸橋もある自宅は大丈夫だという思い込みから、どちらも安全な情報だとその時は受け取った。

辺りが暗くなる頃からテレビラジオが三陸沿岸の被害を伝え始めた。不確かながらも広範囲で壊滅的な被害があったことが何度も繰り返し報じられる様に、情報すら伝わらない厳しい状況なのだと察した。

しばらくして気仙沼上空を撮影する自衛隊のヘリの映像が映しだされた。真っ赤な炎に包まれる市街地、本当の火の海の映像だった。顔をあげて視線を気仙沼のほうに移すと、湾内の大規模な火災が大島の亀山の稜線を照らしていた。津波で重油タンクが破損し流れ出た油が押し波引き波の繰り返してガレキに塗した状態を作りあげ、それが海上火災の原因になっていた。気仙沼湾内には逃げ遅れ被害にあった船舶が相当数あったが、波や火災をさけている僚船もあり連絡を取り合っていた。

「地獄絵図だ」と繰り返すスピーカーから聞こえる声が言葉通りの現実の状況だということをテレビも伝えていた。湾内のガレキ火災をかわしながら2昼夜、船を操船した仲間は「寝ないように声をかけ続けてくれ」と叫び、脱出する3日目には憔悴し切っていた。

あいかわらず携帯電話の通話送信は出来なかったが通話受信は時折可能で、東京や北海道の親戚友人とは話もできた。ライフラインの無事なところに連絡を委ねるような気持ちで知れた情報をとにかく伝えた。日が暮れ

てきても未だ家族のはっきりした安否は分からない。火の勢いを増す湾内のガレキ火災以外に陸地に明かりはなかった。大阪駅に足止めの弟から「義妹と甥二人とも学校に避難し無事」とのメールが入る。その中に同じ学校にいるはずの妻のことは触れてない。もしや外勤で市内へでも行っていたか。テレビには気仙沼の市街地で濁流にもまれる車の映像もあったが、我が家のものがないことをひたすら願った。合同庁舎に避難していた弟からは辺りの状況の報告をかねて何度かメールがあったが、湾内を漂うガレキ火災の一つが合同庁舎付近に流れ着くと、直後から連絡が取れなくなってしまった。

長い夜になった。寝台には入ったものの眠れるわけもなく、無事を祈る気持ちで子どもたちの名を連呼した。

ようやく夜が明けると辺りはガレキで埋め尽くされていた。まるでガレキ置き場に船が浮かんでいるかのようなだった。無数の倒壊した家屋や転覆した船舶。平常時ならそのどれか一つが起きても一大事のはずだが、あまりの数多さにどう対処したらよいのかすら分からない。牛乳のテトラパック状に見えるものは沈みかけた大型保冷車。2階部分のみが平屋の家のように建って波間を漂うものには近寄って、取り残されたものがないかとマイクで声をかけたが答える声はなかった。今日こそはと自宅に戻って家族の安否を確かめたいと思っていたが、先に上陸を試みた僚船から波が収まらないから港にはまだ入れないとたしなめられた。

そんな僚船との連絡の無線に叔父が割り込んできた。自宅近くに住む叔父はアマチュア

無線の愛好者で電源の確保できる自家用車から声を出したのだ。これで陸上の状況がわかる。話では高台にある親戚宅にいるという。この時、初めて自宅が流されていたことを知る。おそろおそろ家族の安否を問うと両親と子供たちは無事に親戚宅にいることが確認出来た。ここからは聞いた話になる。父は会議のあった漁業協同組合で地震を感じ、表に出たところをバス停に向かう1年生の長女が歩いていて自宅まで連れて帰った。娘が歩いていた歩道も会議をしていた漁協も直後に津波によって崩壊していた。母と3歳になったばかりの次男は自宅で地震を感じた。妻の両親がイサダ漁の祝いに来ていたが、広報無線からの大津波警報で義父母は帰宅し、母は軽乗用車に次男と帰宅した長女を乗せ毛布や非常食、オムツをとりに戻ろうとしていたところ、ふと海を眺めると国道下の家がすでにぐるぐる回り始めていたという。車で避難は危険と感じた母は、子どもたちを連れて裏山を駆け上がった。間もなく自宅、作業場兼倉庫、自家用車までも流された。気仙沼線の陸橋も耐えられなかった。その後、逃げた先の親戚宅で一家50日間もお世話になった。学校で避難した長男も迎えにいかないとならないが国道も寸断されていたため、平常時なら5分ほどで着く小学校へはやはり軽トラックで父が45分かけて山道をいつてくれた。軽トラックは本当に役立った。不在のなか子どもたちはその祖父母らが守ってくれていた。

沖では船同士が食糧のやり取りなどをしながらあまり離れずに避難待機していた。叔父との無線のやり取りを聞いていた僚船からも家族の安否確認を求める声があり、叔父の無

線機を介しての情報によって安心を得ることが出来た人もいた。

妻の話が一向に出てこない。家族は避難所になっている小学校の手伝いで帰れないと思っていたらしいが、母親を求めて騒ぐ次男にたまりかねて父が勤務先の小学校に迎えに行った。避難した人たちが混沌とした学校で事情を説明し、妻のことを尋ねると戻ってないことを逆に心配され、午後2時から南三陸町へ出張だったことを伝えられた。南三陸町の惨状から覚悟しなければと思ったという。国道も崩落していた南三陸町へ行くには内陸の山越えをしなければならない。ガソリンも手に入らない状況。あてもなく尋ねながらたどり着いた高台にある中学校に妻の車を見つけようやく安心したという。妻も無事でいてくれた。二日目も暗くなりかけていた頃に妻も家族と合流、子どもたちは特に喜んだはずだ。思いがけず無線機に出た妻の「ただいま」の声を聞いたときは涙がでた。

二日目の晩、消火作業もままならないのであろう、気仙沼の市街地では昨日と違う場所が夜空を朱色に染めていた。少しずつ家族の安否がわかってきたその晩は、流れてきた若布養殖施設に船を係留し寝台に入った。昨夜とは違って少し眠ることが出来た。

3日目の朝、辺りのガレキは潮で集まり斑上に点在していた。近くに無傷の小舟が漂流していた。おそらく港に戻っても無事な船はなく、これからはなにかと必要なはずと回収し曳航した。日門漁港に接岸できたという一報が入り、避難していた僚船も帰港しはじめた。

陸よりに進路を向けると海上自衛隊の掃海

艇を確認し接舷会合した。発災直後に横須賀から出航し情報収集が任務だという自衛艦の艦長室に招かれ、当時の様子や被害状況を尋ねられた。艦長室では常に電話回線が開いていて、海図を指さしながら道路の寸断や落橋などの知る限りの情報をすべて話した。伝えた情報は逐一上層部に報告され後続の支援の参考になったようだった。「救助した漁民からの情報」という言い回しには違和感をおぼえたが、食料と飲料水をもらい何度も励ましの言葉をかけられた。別れ際に五目御飯のおにぎりをオードブル皿で2包もたせてくれた。ありがたかったし、なにより自衛隊が来てくれたことを心強く感じた。

船首を港に向け、岩井崎の上を越えてきたであろう水産高校の実習船を横目に海一面を埋め尽くすガレキを慎重にかわしながら帰途を急いだ。

陸地に近づき目にした景色はおとといのそれとはまるで違うもので、波にさらわれ、あらわになった土の色と残ったコンクリートの灰色だけの印象だった。日門漁港は崩落と地盤沈下で岸壁が使えず、先に入った船が沖側の防波堤に横着けしていたので並べて係船した。曳航してきた小舟を使って錨を入れ、いつ動かせるか分からない気持ちから嚴重にもやい綱を絞めた。一緒に避難していた20人ほどで、もらった五目御飯おにぎりを分け合い、すででない自宅を目指した。途中で父の迎えの軽トラックに拾われた。何もかも壊され、なくなっていて人気もなく静かだったことがかえって今でも耳に残っている。自宅が見えるはずの国道に着くと向いの家が横たわっていた。近寄ってのぞきこむとやっぱり自宅は



---

## 東日本大震災体験記

気仙沼市 芳賀 広美

---

### 地震発生直後

3月11日、この日は通常通り朝から気仙沼にある勤務先（印刷会社）へ出勤していました。金曜日ということで、翌日または週明けに納品しなければならないものが多く、そっちこっちに印刷済みの紙が山積みになっている状態でした。また、細々した手作業が必要なものもあり、地震の瞬間はカッターを使用しての手作業中でした。

地震が起こった瞬間は、二日前にも同じくらいの地震があったため、「ああまたか。最近多いなあ」とちょっと手を止めただけで、一度揺れがおさまってきたような感じだったので一応逃げ道確保ということで、駐車場に面した引き戸は全開にした状態で作業に戻ろうとしました。ところが、数秒後、揺れが強くなって停電し、棚に重ねておいた在庫品や、机の上の物がばたばたと落ちてきたところで、「これヤバイかも。外に出よう」と誰かが叫んだことで、社員全員が社屋前の駐車場に避難しました。

駐車場に出てからも立ってられないくらいの揺れが数分間続きました。駐車場に置いていた車は、上下左右にゆらゆらと揺れていて、サイドブレーキを引いていなかったら動き出すのではないかと不安になるほどでした。そんなときに、宮城県団の伊藤治彦会長（現監事）と佐久間祥平副会長（現会長）から役員宛に一括送信で安否確認メールが届いたので、無事なことを送信しましたが、その間に

も道路向かいにある車販売店の一階から二階の上まで張られた大きなガラスにひびが入って行くのが見えました。揺れが静まった時に営業車で出かけていた人も帰って来ましたが、あまりの揺れで運転ができなくなっていた上に停電で信号が消えてしまっていたそうです。この時、携帯電話で情報を調べた若い社員が「なんか、震度5強とか書いてあるんですけど…」とかなりあせった様子で教えてくれました。

5分ほど揺れが続きましたが、とりあえず揺れもおさまり、電気は使えないけど手作業なら続けられるか、その前に崩れた在庫品を棚に戻さないと…と、のん気に考えていたら広報無線で大津波警報が発令されたと放送されました。

まさかここまで波は来ないだろう（気仙沼湾から1.4km）、来たとしても床下程度と思ったのですが、電気がないとほかの仕事ができないし、暖房も止まってしまったので、念のためということで、防寒着を着込み、財布等を入れた鞆を持ってすぐ近くの高台にある市立病院に避難しました。こういう時は車で避難すると渋滞等を引き起こし、迅速な避難ができなくなると聞いていたので徒歩での移動でしたが、後々なんでこのときに車を持ち出さなかったんだと後悔しました。

病院の駐車場には近所の保育園の通園バスなど多くの人たちも集まっていました。通院やお見舞い等で病院に来た人も多く、どうやって帰ろうかと話し合っている人たちがいました。そこで同僚たちと集まっていたのですが、数人足りないと思ったら、自宅が徒歩圏内で家族が心配なので、家族とともに避難す

るために帰宅したとのことでした。

しばらく経っても大津波警報が解除されたとの放送もなく、情報を収集しようと携帯電話でワンセグ放送を見てみると、見たことのある建物が見たことのない風景として映っていました。気仙沼湾の最奥にあるフェリー発着所に隣接する市営駐車場が水没している映像でした（その後ネット上で探しましたが見つけれず、もしかすると見間違いだったのかも…、と思っていたら後日、同じく気仙沼で被災した友人がワンセグで見たとっていたので、恐らく現実だったのでしょう）。ここでやっと今回の津波が普段のものとは比べ物にならないものだと思いましたが、やっぱりさすがにここまでは…という気持ちの方が強かったです。家族のほうも心配になったのですが、携帯電話どうしの通話機能は使えなくなっていて、固定電話にかけてみると、ずっと呼び出し音が鳴るだけなので、自宅から出て避難していると判断し、妹と弟の携帯電話に避難場所を知らせるメールを送りました（15時30分）。

そうしてまた少しすると、街並みの奥のほうに煙が上がるのが見えてきました。火事の煙にしては色などがおかしく、だんだん横に広がって行くのが見えました。波の水しぶきかとも思ったのですが、多分津波によって家屋が壊されたときにあがった土埃だったのだと思います。そのすぐ後に病院の上層階から街の様子を見ていた看護師さんたちが下に向かって「早くこっちきてー。急いでー」と声を上げ始めました。高い場所から波が見えていたのだと思います。そこから病院の中があわただしくなりました。正面玄関横の救急用

入り口の前にテントを張り、タンカを並べ、ドラマで見たことがある黒・赤・黄・緑の色のついた札も用意されていました。

え？これって大規模災害時に使うあれ？そんなに大きな騒ぎになるの？と戸惑っていたら、病院から出てきたお医者さん？看護師さん？が「緊急車両が入ってくるので、避難している方は第5駐車場へ移動してください」と叫んでいました。そこで、職員さんの案内で第5駐車場に移動し、そこから大通りを見下ろすと、まさに波が大通りにひたひたと流れ込んでくる所でした。しかし壁や屋根などもない状態で、さてこの後どうすればいいのかと途方にくれているとき、近所の人が「この辺りの最終避難場所は気仙沼高校ですよ」と声をかけてくれたので、そちらに移動することにしました。

### 気仙沼高校へ避難

山の上にある気仙沼高校に着くと、校庭にいくつものテントとパイプ椅子が用意され、かなりの人たちが集まっていました。校庭の入り口付近やテント周りでは、先生方や高校生たちが制服や部活のユニフォームのまま避難者の誘導を行っていました。私たちが着いた頃から雪が降り出してきたので、第二体育館が開放されてそこに入るよう誘導されました。しかし校舎の配置の関係か、広報無線がまったく聞こえなくなり、街の様子もわからないので、一度外に出て街が見下ろせる場所に行ってみると、会社から500mほど山側に離れた店の前まで水が来ているのが見え、その付近の車のハザードが点滅しているのが見えました。ここで、これは下手すると今日は

帰れないかもしれないと思い至り、もう一度兄弟と家族の携帯電話に、現在高校にいることと車が水に浸かったらしいことを知らせるメールを送りました（16時18分）。

しばらく街の様子などを見ていましたが、気仙沼大川の下流付近で火事が起きているのが見えました。この高校と病院の建っている山から下りても波が来ているので、どうすることもできず、段々日も暮れてきたので再び体育館に向かいました。体育館内はブルーシートが敷かれていて、何台か石油ストーブが設置されていました。また非日常の光景で興奮したらしい子どもたちが、あちこちで駆け回っていました。見回すと一台のストーブの側に同僚たちが固まっていたので、そこに加わり暖をとりました。

私は防寒着を着込んでから避難したのでまだよかったのですが、ほかの同僚たちはほとんどが車通勤、徒歩10歩で社内という状況なので、もともと防寒着を持ってきていなかった人が多く、また持っていたとしてもやはりこんな状況になるとは予想していなかったため、作業着のまま避難していて、体育館に入るまでかなり寒かったようです。そこへ高校生たちがダンボールと新聞紙、さらに各教室からはずしてきたカーテンを防寒用にと配ってくれていたのも、何枚かもらって下に敷いたりして何とか落ち着くことができました。この間も何度も余震が起こり、先生から照明の下は落下の危険があるため、照明の下を避けて座ってほしいとの連絡もありました（後から知ったことですが、第一体育館は照明が落下していたため、開放できなかったそうです）。

この時、後輩の一人がワンセグでテレビを見ていて、福島沖と茨城沖を震源にした地震が起こっていることや、大船渡、大槌、陸前高田、石巻も津波で大きな被害があったことを知りました。大槌と陸前高田、石巻には青年団仲間がいることから心配だったのですが、連絡する手段もなく、ただし自分も心配されるような地域にいるという方向までは思考がいかなかったです。

### 3月11日夜

暗くなってくると、体育館の観覧部分に何本かロウソクが灯されました。石油ストーブでもそれなりに明るかったのですが、こうなると完全にここで一晩過ごさなければならぬ状態だと実感がわいてきました。屋外が完全に暗くなるとロウソクだけではかなり暗く感じたのですが、近所の電気工務店が発電機と大型の照明を体育館に持ち込んで、天井に向けて照射してくれました。これによって火事の心配のあるロウソクを消し、安心感のある灯りの中にいることができました。

この時にA5サイズほどの紙が配られ、そこに自分の名前と、居住地名等を記入するよう指示されました。避難者を把握するためのものだったのでしょう。同時に連絡を取りたい人の名前も右側に記入するよう言われたので、家族の名前を記入していたのですが、後に市の発表した「避難者名簿」では、その点の事情が市に対して説明されなかったのか、私の家族は共に気仙沼高校にいました。混乱の為、最終的に本来の情報とは違ってしまった部分がありましたが、冷静に名簿を作成した高校の行動は、その後の

家族探し等に非常に役立ったと思います。

近くにいた家族連れなどの話が聞こえて来たのですが、近隣の川の近くの中学校では下校していなかった生徒全員を校舎内に避難させていて、家族の迎えがない限り生徒を帰さないようにしていたとか、両親ともに迎えに行けない状態で、山のほうの集落に住んでいるおばあさんが、学校まで迎えに行って高校に避難している人もいたようです。また、「〇年〇組の〇〇さんいますかー」という声も何人も聞きました。これは高校の生徒を迎えに来た家族が探していたようです。私たちの中でも、一番若い後輩の家族が迎えに来て帰りましたが、「自宅が山の上だから津波がきたわけじゃないけど、地震で住めない状態になったらしい」と話していました。それ以外にも徒歩圏内で、高校のある山からバイパスに下りて歩けば、何とか帰れそうだという人も自力で帰って行きました。残ったのは、徒歩では帰りにくい距離のひと、今現在確実に津波が押し寄せている地域に家を持つメンバーだけになりました。私も徒歩なら帰れるかもしれないのですが、距離的に海沿いの国道を使っても最低3時間以上はかかるため、暗くなってから歩くのは自殺行為だと思い、翌日山側を通る基幹農道を5時間も歩けば何とかかなるかも知れないと計画していました。

残った人のうち、一人は病院から体育館に移動する際に会社の戸締りがされていなかったことを思い出し、施設に戻ったそうですが、その際にちょうど波が押し寄せたので、再度避難してきたそうです。「あれじゃ、ロッカーにPSPとiPodを入れておいたのが完全に沈んだ…」と言ったので、そういえば山積

みにしてきた印刷物もかぶったかもなあという方向にやっと考えが及びましたが、どうも私はのん気すぎるのか危機感がなかったのか、あるいは現実逃避のためだったのか、「加湿器スイッチ入れっぱなしだったなあ。停電が終わったら空焚きになるんじゃないかな」とか「自宅で買ったばかりのテレビ、地震で倒れてなきゃいいけど」なんてところまで思考がぶっ飛んでいました。

しばらくして、近所のお寿司屋さん（浸水地域！）からおにぎりが差し入れされました。「生徒たちが配りますので、そのままお待ちください」と先生が話していましたが、案の定、大勢が殺到し、人数分があったわけでもないで私たちはもらえませんでした。幸い、会社の先輩が同僚たちと別れて家族と病院に避難したときに、後輩の一人と出会い、病院の売店で数種類のお菓子類とジュースを買って差し入れてくれていたので、何とかなっていました。

9時くらいに市の職員の方が状況説明にやってきました。国道45号線は5箇所が橋が落ちて寸断されていること、津波により重油タンクが破壊され、その油に引火して、現在火事が広がっていること、その火事は鹿折地区の奥まで広がっていて、とある公共施設まで達していることを伝えられました（公共施設の名前は忘れてしまいました）。その話の後に一緒にいた鹿折地区に住む先輩は「そこまで火が来ているんだったら、うちはもうだめだ」と肩を落としていました。火事の地域は高校からは山の向こう側であったため、空が赤くなっているのが見えました。

この段階でも家族とは連絡が取れなかった

のと、携帯電話の電池残量が不安だったためしばらく電源を落としていたのですが、念のため電源を入れてみると両親用の携帯から着信があった履歴がありました。その前に災害時緊急伝言板にも書き込んでいたのですがまったく返事がなかったのととりあえず安心しました。この時、docomo が圏外になっても au は大丈夫だったり、au がだめでも softbank は圏内、softbank がだめなときは……と通信状況がかなり混乱していました。

夜も更けてきて、ほかの家族の人たちも回りにいたので、座っていることしかできないような狭さでしたが、起きていても体力が落ちるだけだし、体を伸ばすことはできないけど横になって休むことにしました。何よりも「明日は家まで歩く」と決めていたので、体力の温存を第一に考えました。夜間、余震の度に起きたりしましたが、2度ほどストーブの給油が行われ、それほどひどい寒さを感じることはありませんでした。

トイレは、学校の給水タンクに残っていた水があったので夜間は何とかりましたが、紙を流すと必要以上の水が必要になるので、個室には大きなゴミ袋が設置されていました。しかし、朝になると流すことができなくなり、たった一晩でかなりひどいことになってしまいました。

### 3月 12 日朝

翌朝、明るくなるとすぐに同僚のうち何人かは体育館を出て行きました。自宅までの道路の状況と会社の状態を見に行ったそうです。帰れる人は帰宅し、何人かは戻って来ましたが、ズボンの裾を泥だらけにしている、車は

多分使えない、かなり覚悟しないと歩けないような状態だと話していました。

まだ家族と直接連絡が取れていなかったため、連絡しようと携帯の電源を入れたのですが圏外だったため、ほかの携帯会社の状態を聞いてみると全滅でした。そのため公衆電話が無料でかけられるらしいと聞いたので、近くの公衆電話に行ったのですが、カードを入れても硬貨を入れても使えない状態でした。近くの商店の人に固定電話は使えるか、使えるなら借りたいと聞いたら、固定電話も使えないとのことでした。「もしかしたら病院においてある公衆電話なら緊急時用に何か対策がされているかも」と一緒に行った先輩に言われ、車に乗せてもらって市立病院まで移動することにしました。なぜ車があるのかと聞いたら、高校に移動するというのが決まってから一度会社に戻ってとってきたとのこと。なぜその時、誘ってくれなかったんですか先輩……。

昨夜の雪はうその様に晴れ渡っていて、山を下りると周りは泥だらけで至る所に箱や看板等、普段道路上にはないものが散乱しているのがはっきり見えました。車もあちこちで泥だらけになっていて、カーディーラーに置いてあった試乗車が 100mほど先の電信柱に立てかけられていたり、道路の真ん中にマグロやカツオ、サンマが落ちていました。写真を撮ればよかったのですが、携帯の電池残量を考えると家族との連絡が取れるまでは無駄遣いはできないと諦めました。この時もう自衛隊の車が来ていました。

結局、病院の公衆電話も使えず、寄り道して会社の様子も見たのですが、外壁に 1.3m

ほど浸水した跡があり、駐車場においていた車はすべて奥の方に押し付けられていました。私の車が一番奥に置いていたので、中の物をとりに行くこともできませんでした。波の反対側のサッシは水の勢いで下部分の鉄板がはずれ、そこから中をのぞくと、惨憺たる有様で、大きな印刷機械が紙と泥と流されてきたゴミまみれになっていました。そのときに地区の消防団の人達が各家を訪問して避難していない住民がいないかの確認をしているのに出会い、この会社の人達は地震直後に全員避難したことを伝えました。

思い返してみると、私の見た波は遠方だったこともあります。ほとんど動いていない状態のものでした。なので、波が来たとはいっても、ゆっくり浸水していったものだと思います。自動車を流したり、ドアをぶち抜いたりするほどの勢いのある波が押し寄せてきていたというのをこの時に知りました。

### 弟との再会

体育館に戻るとかなり避難住民の数が減っていました。同僚も私を含め4人だけになりました。どこかからの差し入れでみかんが配られたので人数分をもらいに体育館の端のほうに移動したところ、周りの人の体や荷物を踏まないように下を向いて歩いていたので、頭上から声をかけられました。「？」と見上げると弟が立っていたのですが、人相が違って一瞬わからなかったです。こんな顔だけ？こんなにお腹出てたっけ？（防寒用に配られた新聞紙を服の中に入れていたのです）とちょっと戸惑いましたが、どうやら私を探

して避難所をめぐっていたそうです。一度この体育館にも来ていたが、ちょうどいなかったため、もしかして会社にも戻ってさらにあの状態の車に行ったんじゃないか。いや、姉ならやりかねない…と、私と一足違いで会社と体育館を行き来していたそうです。

弟は一度自宅付近を見に行ってきたらしく、家がなくなっていた、家族とも連絡が取れない、近所の人に聞いてもわからないらしいということを知っていました。

弟のいる避難所に一緒に行こうとしたら、弟とともに来ていた上司の方が「避難所ではなく私の自宅で一休みしてはどうか」と言ってくださいました。正直、直接面識のある弟だけでもお世話になるのはずうずうしいのに、ここで私まで行ってはご迷惑になるのではと言ったのですが、この連絡も取り合えない状態では、できる限り一緒に行動しておかないと一度はぐれたらもう一度出会える可能性も低いということでお邪魔することになりました。同僚たちには、弟が迎えに来てくれたから一緒に行く旨を話して、もらったばかりのみかんを渡して別れました。

上司の方のお宅に向かう際、辺りの状況を見たのですが、高校の下の街は私の会社よりも海から離れていることもあって、水の勢いがどうのという状態ではなく、泥水が浸水して辺り一面泥だらけという感じでした。また高台を通るバイパスに東京の消防車が何台も並んで停車していました。

上司の方のお宅に到着すると、温かい味噌汁とおにぎりをご馳走になりました。やっぱり温かいものを食べると落ちつきました。ここで弟に、両親からの不在着信があったこと

を携帯の表示を見せながら伝えたので、弟もやっと安心したようでした。

上司の方が一度会社の様子を見てきてから、私たちを自宅付近まで送り届けてくださるといってくださったので、もう少し甘えることにしました。応接室を私たちだけにしてくださいだったので、今までの情報交換と、今後どうなるかわからないということでお互いの所持金の確認、家族を探す際にメモを残すことがあるかも知れないということでメモ帳と偶然作業着のポケットに入れていたマジックペンも準備しました。この時に、近所の父の実家の伯父伯母、従兄が行方不明らしいということを教えてくれました。もう一人の伯父と従兄は無事らしいという話も聞いてきたそうです。その間もヘリコプターが何度も上空を飛び交って大津波警報が発令されていることを放送していました。

しかし、上司の方が暗くなってから帰っていらしたので、その日は一晩泊めていただくことになりました。なぜこんなに遅くなったかということ、市内各地にある営業所を巡り、あれこれの作業を行っていたそうです。津波に飲まれた営業所付近で、会社の属するメーカーの作業着を来た遺体が発見されて、その確認を求められたりもしたそうです。幸い、というわけではないのですが、その営業所の方ではなく、近所に同じメーカーの別会社の営業所もあったため、そちらの人ではないかという話でした。

布団を用意していただいたのですが、二人ともズボンの裾に泥が跳ねている状態で、布団を汚すわけにはいかないため、ズボンだけでも脱いで休もうと思ったのですが、かなり

強い余震が起こったため、夜中にその状態で逃げることになるのはかなり恥ずかしいということになり、申し訳ないとは思いつつ裾をまくった状態でできるだけ汚さないように気をつけて休みました。

### 3月 13 日朝

翌朝、朝食をいただき、さて出発という時に、上司の方と奥様が、私たちが着の身着のまま出ており、ほかの家族も同じような状態であるだろうからと防寒着や下着類、さらに長靴などを用意してくださいました。そこまでは、と遠慮したのですが、下着は新品でそれ以外は最近着ていないものだし、今後避難所がどうなっているかわからないから、と渡され、ありがたくいただくことにしました。

出発してから外を見ていたら、バイパスの下にある住宅街が瓦礫の山になっているのが見えました。この地域は普段は海がまったく見えないような場所なのに、奥のほうには海が見えていました。ガソリンスタンドの前には何台も車が並んでいましたが、ガソリンスタンドでは緊急車両への給油を最優先にするよう市から言われているため、一般の人には給油したくてもできないのだ、ということも上司の方に説明していただきました。

もう二晩経ったため、国道をそのまま進めるのかと思ったのですが、通行止めに遭い、基幹農道へ向かうよう立て札が立てられました。この基幹農道は大谷海岸から気仙沼市に抜ける道なのですが、もう少しで国道、という小学校の裏手で、またしても裏道に抜けるよう指示され、小学校の頃に遠足で通ったことのあるような山道を、自宅近くの鉾山

跡地まで抜けました。そのまま家の前までいけるはずだったのですが、鉾山跡地から流れ出した土砂が道路をふさいでいたため更に迂回を余儀なくされ、やっとのことで自宅付近に着いたのですが、驚いたことに国道の上に近所のお宅の二階部分が置かれていました。自宅のあったはずの場所には何もなくなっていました。家の残骸などがあることを予想していたのですが、自宅裏にあった国道の盛り土が崩れて人が一人しか通れない幅になっており、さらにその土が自宅の土台部分を覆い隠していました。本当にきれいさっぱり何もなくなっていたのと、このような災害の直後とは思えないほどのいい天気だったため、まったく現実感がありませんでした。

父の実家は、全壊状態とはいえ半分くらい形が残っており、そこに伯父と従兄がいたので、うちの家族の行方を知らないかと尋ねたのですが、伯父と従兄は津波に一度飲まれて、何とか逃げることができ、高台にある親戚の家に避難していたそうなので、何もわからないといわれました。国道の上にあったお宅に人がいたので、同じように声をかけると、母と妹と犬とは鉾山跡近くの駐車場で一緒に過ごしたそうですが、翌朝この地域の避難所となるはずの集会所も流されてしまっていることから、消防団の人に、総合支所近くの避難所に誘導されていったと聞かされました。父は船を沖に逃がすために出港したらしいことも聞きました。

本当はここで上司の方と別れて、弟と二人で探しに行くつもりだったのですが、「もう少し付き合うから」と言ってくださり、町内の公民館や集会所を回っていただきました。母

の実家の辺りにも行ったのですが、そちらも集落すべてがなくなっている状態で、中学校の体育館に住民の皆さんが避難していましたが、一人布団一枚のスペースしかなく、どうにか大叔母を探し出し、母が来ていなかったかと聞いたのですが、ここでも手がかりはありませんでした。

「もう一度、自宅の場所に行ってみましょう。きっと家族の皆さんもそこに来るはずだから」と励ましてもらい、もう一度自宅跡地に行きました。先刻のご近所さんが父をついさっき見かけたと教えてくれました。

#### 父との再会

その方向に行ってみるとやっとなら父を見つけることができました。父は「沖出し」に出ていたため、海の側から町が津波に飲まれていく様子を見ていたそうです。その後、大津波警報が解除されないため港に戻ることもできず、同じように沖出しで出てきた船の人たちと一塊になって二晩過ごしていたそうです。船に米を積んでいた人がいて、それでご飯を炊いて配ってもらったとか。また我が家の船も、幸い水などはある程度積んでいたし、前日に重油を入れたばかりだったおかげで無事に帰ることができたそうです。

車に乗っていた間ラジオを聴いていたのですが、「〇〇に住んでいる□□です。全員無事です」とか「南三陸町の××さん。連絡が取れなくて心配しています。連絡をください」という伝言がいくつも流されていましたが、気仙沼市では携帯電話も固定電話も繋がらない状態なので、同じ通信回路を利用する FAX も電子メールも使えないので、どんなに連絡

を取りたくても取れないのです。こういう場合でも繋がる通信手段がもっと普及してくれば…と切実に思いました。

後日知ったのですが、最新のスマートフォンや衛星電話も有効だそうです。昔ながらのトランシーバー等の無線機やアマチュア無線機もかなり有効だったそうです。しかしトランシーバーは特定の相手としか通話できず、アマチュア無線は一時期大勢いた愛好者も最近では激減しているそうです。それでも岩手・宮城内陸地震の際にも、山で孤立した被災者が助けを求めたのが受信されたり、今回も唐桑町で孤立した集落での救援物資要請を発信したりしていたそうです。

母と妹を探すため、もう一度心当たりを探して近所の人に聞いたところ、地元の集会所がなくなったため、隣の地区の集会所にかなりの数のご近所さんたちが集まっていると聞き、向かってみましたが、やはり二人の姿は見つかりませんでした。そこではその地区の皆さんが米などを持ち寄って炊き出しをしてくださっていて、おにぎりや味噌汁をいただいて、私はこの集会所で待ち、弟と父は自宅跡地で情報を集めることにしました。すると「お寺にいたって誰かが言ってたよ」と教えてもらいました。お寺への道は、国道が崩れて通れないのと、裏道も土砂崩れで迂回させられた場所にあるので、絶対に行けない筈と思い込んでいて探さなかった場所でした。父達に伝えようにもすでに車で移動してしまっていて、携帯電話も使えない状況なので、とりあえず貴重品の入った鞆だけ持って、上司の方にいただいた防寒着類は集会所に置かせてもらって、父たちの後を追って歩くこと

にしました。

改めて自宅付近に来て見ると、自宅にいたる道路がなくなっており、国道もえぐられていて、改めて呆然としてしまいましたが、背後から「あーっ、広美さん、よかったー、生きてたー！」と声をかけられ振り向くと、近所の青年団と一緒に活動していた仲間が立っていました。彼の家は我が家のほぼ真上の国道沿いに建っていたのですが、そこも跡形もなく、側に二階部分が置かれている状態でした。彼は気仙沼の魚市場近くで働いていて、当日は近くにあった津波避難ビルに指定されている合同庁舎に逃げていたそうです。ずっと歩いて帰ってきたようで、途中で避難所になっていた公民館に立ち寄り、青年団仲間とも数人会ってきたと話してくれました。

### 家族とともに避難生活

自宅跡地には父たちの姿がなかったので、そこから更に歩いてお寺の駐車場に着くと、父たちと、母と妹と犬が怪我もなくいました。

よその避難所に行っても犬連れだと中に入ることができなくて、お寺の駐車場で一晩過ごしたそうです。そこで、自宅の一階だけが津波に通り抜けられたという親類と出会い、二階に置いていて無事だった毛布などをいただいたお陰で何とかすごすことができたそうです。これでやっと家族が揃うことができ、改めて話を聞くと、何もかもなくなったと思っていた我が家ですが、別棟の物置の屋根部分だけがちょっと離れた場所に流れ着いていて、そこに以前収穫して保管していた、ふのりやひじき等の乾燥海草が残っていて、大型冷凍庫も一つ見つけてあり、その中に冷凍魚もい

くらかあったそうです。それらを携えて集会所に行き、そこでお世話になることにしました。

集会所（避難所）に着いても、小さい子ども達もいたこともあり、犬は入れるわけにはいかず、車の中においていてもさびしがって吠えてしまうので、私と妹は車中泊で犬と一緒にすごすことにしました。ここで弟の上司の方からいただいた防寒着が役に立ち、二枚重ねで着込むことで寒さをしのぎました。

翌朝、自宅跡地から少しでも使えるものを集めるために父母と弟、更に次々と集会所から人が出て行き、残ったのは地区の方二人と、私たち姉妹、小学生が数名と大人は高齢者が数名だけが残るだけでした。そこに市の給水車や、灯油の配達、支援物資や市役所からの避難所の状態を調べる方が来たのですが、地区の方は自宅に帰ってしまい、誰が対応すべきなのかわからず、とりあえず私たちが受け取りや事務連絡を受けたのですが、さて、これを誰に連絡すべきなのか…。この避難所には私たちの地区の区長さんは来ておらず、残念なことにこの避難所ではまだそういう組織作りを行っていなかったようで、誰がリーダーなのかすらわからない状態で一日留守番役をこなしました。

数日間は、市内の道路上で国道が寸断され、ガソリンも補給できないということで、トラックで運んでいた冷凍食品などが、調理環境のある避難所に配られました。15日に大手パンメーカーの製品が大量に届けられ、これで昼食をまかなうことができるようになりました。

二日間留守番をこなしたのですが、やはり

連絡系統などが解らないままでは何もできないということで、急遽会議が開かれることになりました。そこで、同級生のお母さんが代表者に、妹が副代表に決まりました。代表者の方は、昼間は自宅の片付けに出かけるので名前だけ出すということでした。妹が副代表というのは、昼間の対応係という意味合いが非常に高いのですが、なぜ区長さんあるいはそれに準じた男性が代表者になって、市などの間に立ってくれないのかと。私は会社が再開していればどうにかして通勤するつもりだったので、最初から頭数には入っていませんでした。

さらにこの時、地区の名簿を作成し、この避難所にいなくても、どこに避難しているかが一目でわかるような表を作り、貼り出すことにしました。こうすることで、後日親戚の居場所を探しに来た人に対して、説明をしやすくなりました。

私はこの前日あたりで無断欠勤状態になっていることを思い出し、家の状況を会社に報告しなければならぬこともあったので、歩いて会社に向かおうとしましたが、自宅跡地付近で気仙沼から歩いてきた人と出会い、いたるところで国道が通れない状態になっているとこのことで、一日で帰宅できない可能性もでてきたこともあり、会社への報告は後日に回して、どうしても必要なものがなかったため、町の中心部のスーパーとDIYセンターが点数限定で販売しているとの情報もあったので、そちらに向かうことにしました。

途中同じように買い出しに来た人と出会い、歩きながらいろいろと情報交換をするなど、今までの生活では絶対に出会うことのない人

たちと気軽に話すなど、妙な連帯感が生まれていました。DIY センターでは店内へは入れずに、門のところで店員さんが注文を受ける形で商品を運んでいました。一人3つまでの購入制限があり、自宅避難者が多いのか、トイレトーパー等はすでに売り切れとの貼り紙がありました。たくさんの方が並んでいて、その人たちの買うものを見てみると、カセットガスや練炭を買っている人たちに混じって、ペットフード等の大袋をかついで帰る人が多く見られました。やはり、どこの家でも人用の食べ物は何とかなるかも知れないけれど、ペット用のものは自力で入手しなければならぬと思っていますので。確かに我が家もペットは家族として接してはいるけれど、避難所で「犬の分のご飯をください」とは言うことはできませんでした。これは幸いまだ売り切れてはいないようだったので購入できました。

この頃、福島第一原発の事故で、「雨に放射性物質が混じっている可能性があるので、雨にはあたらないように」という指示が来ていました。このため、17日に雨が降った時、みんなにこのことを伝え、片付けには行かないようお願いしました。すると午後になって伯父が、胸が苦しいと訴えました。もともと持病で薬を毎食後に飲んでいたので、津波で流してしまい、一週間近く飲んでいなかったためか狭心症のような症状が出たのです。ちょうど看護師をしていた人がいたので、脈と血圧を測ってもらい、水分を摂って横になっておさまったものの、念のため病院に行った方がよいということで、前日に偶然、消防団の方が伯父の「お薬手帳」を拾って届けてくだ

さっていたので、それも持って本吉病院に行きました。

病院に着くと、一階部分は泥だらけで、診療をしているのか心配になるほどでした。二階部分で診療を行っているという案内で、階段を上っていくと、そこで受付をしていた方はなんと沖縄から来たそうです。ほかにも山口から来たというお医者さんもいました。避難所で一緒に食事をしている人の中に、医療ボランティアをしている方がいて、同じような医療派遣の方たちに対して方言の通訳をやっていると聞いていたので、方言は大丈夫なのかと思い訊ねてみたところ、やはり「最初はわからないが、数日経つとなんとなくわかってくる」と話してくれました。ただ私がいた間だけでも、伯父を始め、年配の患者さんは方言だけでなく、いつごろから薬を飲んでいたかなど、きちんと他所の方にわかるように説明していなかったりするので、その辺の対応のためか、この病院でも地元の方が通訳のようなことをしていました。

診療が終わって、近所の薬局に処方箋を持っていくと、薬が仕入れられないため、「お薬手帳」をもとに出してもらった処方箋に書いてあるものは、在庫がなくなっており、同じ働きをする別の薬に変えてもらえないかと在庫の薬のメモを渡され、それを持ってもう一度病院に行くことになりました。処方箋発行の窓口で事情を話すと、その薬でも大丈夫というサインをいただき、薬局に戻りましたが、本来であればつけるはずの薬の効能や飲み方の説明書は停電のため発行できず、薬袋もないため、薬局にきた請求書等が入っていた封筒に入れて渡されました。病院も薬局も、保

除証等を流された人が多数という状況からか、保険証の提示もなく住所と氏名をメモするだけですべての対応がなされました。

二度目に病院に行ったとき、地元の青年団の仲間で消防団として動いていた人と、病院で働いていた人に出会えました。二人とも忙しい中だったにもかかわらず「大丈夫だった？」と声をかけてくれました。少しの間でしたが、お互いに「〇〇さんは大丈夫だったよ」とか「△△さんには会ったよ」と共通の知り合いの無事を報告し合い、またお互いの無事を喜びあいました。

### 市街地へ

津波から数日後に、国道に乗っていた家屋が自衛隊によって解体され、一人しか通れなかった部分も補修され、なんとか車も通れるようになったことから、18日に従兄から自転車を借りて気仙沼市内を目指しました。途中、道路が寸断されたことにより孤立していた地域では、国道の歩道に「ガソリン 食料 求む」とペンキで書いてありました。

そこから先は見慣れた景色が一変していました。ちょっと高台だった地域なのに一階部分が壊されていて、家の前に瓦礫と共に家財道具が持ち出されていたり、大型バスが崖下に落ちていたり、建物があって向こう側の海水浴場を見渡すことなんてできなかったはずなのに一望できたり、国道の東側を並走していた鉄道のレールが、線路用の橋のコンクリートと共に国道を越えて西側の田んぼに並んでいたり、コンビニおよび元コンビニの建物の3店舗が鉄骨の骨組みだけが残ってひしゃげていて、3店舗が跡形もなくなっていたり、

平野部分では、こんなに近くに海があったのかと改めて驚くことがたくさんありました。途中、瓦礫が多すぎてとりあえず車道部分だけの瓦礫をよけた部分があり、まだ少ないながらも車が通るのでそれを交わしながら進みました。

45号バイパスの途中で一休みをして、携帯電話の電源をいれてみました。前日、病院の待合室でつけられていたテレビのニュースで、気仙沼市の小学校に docomo の移動基地局を設置したと言っていたので、ここならきっと電波があるはずだと思ったのです。思ったとおり久しぶりにアンテナが立ちましたが、とんでもない量のメールを受信しました。大半が迷惑メールでしたが、中に青年団仲間や、結婚で遠方に引っ越した地元の友人からの安否確認のメールや着信履歴が届きました。ここでようやく自分が安否確認されるような立場だと気づいたのですから、我ながら間抜けな話です。状況は報告しておかないと、とは思っていたのですが、ここまで心配される地域だという実感がなかったのです。返信しようにも電源がここで切れてしまったので、後日改めてなんとかして連絡しないと心配をかけることになるのが心苦しかったのですが、電波と電気がなければ何もできない状況でした。

3時間近くかかって、やっとのことで会社にたどり着きましたが、付近一帯が泥だらけのまま、入口や搬入口のガラスは割れ、社内をのぞいて声をかけても誰もいないようでした。どれだけ想像力が麻痺していたのでしょう。正直こういうことも想定していなかったもので、何か伝言メモでも残していったほう

がいいのかと思っていたところ、中から同僚が二人出てきました。家が全て流出したことを伝え、今後会社はどうなるんだろうと話しながら、内部の歩ける場所をいろいろ覗いて見ました。12日に会社に来たときは、泥がまだ水を含み、分厚く堆積していて表からは駐車場内にすら入ることができなかつたので、初めて内部を見ましたが、とんでもない状態でした。大型機械はゴミだらけ、梱包して納品するばかりだったものは、完全に波に飲まれ、泥の中に転がっていました。周りには印刷済みの紙が散乱し、棚の上に置いていて波には当たらなかったものも、湿気によってほとんどが波打っていました。そこに社長と、当日東京に出張だった専務がやってきて、状況を報告したところ、社員みんなになんとか連絡を取って25日に集まってもらうからそのときにまた来るように言われました。そこで驚いたのですが、会社付近では水道が復旧していました。こちらの地域では復旧はいつになるかわからないと言われ、隣町の業者さんが大きな水タンクで運んでくれているというのに…。

専務から市役所で docomo の充電サービスが行われているとの情報をもらったので、ついでに寄ってみることにして、またエッチラオッチラ泥の中を自転車を漕ぎました。ただこの自転車が、ずっと物置にあったものだそうなので、油も差していなかったようで、平地でもかなり体力を奪われるものでした。しかし、「会社に行けば機械用潤滑油のスプレーがあったはずだから、帰りは楽になるはず」と思っていたのですが、とても探し出すことなどできる状態ではありませんでした。

市役所前には大勢の人が並んでいました。docomo だけでなく au の充電サービスも行われていたためです。特に au は移動基地局も市役所前に来ていたので、充電してすぐに話すことができたようでした。1時間近く並んで、30分だけの充電でしたが、誰もが長時間かけて移動し、長時間並ぶのも当たり前になっていて、こんな状態なのに、誰もピリピリしたり、声を荒げたりなどの混乱はありませんでした。移動中も家族連れが楽しそうに自転車で走っている姿や、大きなリュックを背負って買出しをする人が数多く見られ、みんな粛々と、生きるために動き、災害後の混乱はほとんど見られませんでした。

帰り道で、また電波受信可能な場所で電源を入れ、さっきの残りのメールを受信すると、直前に県団の伊藤会長からの受信があったことがわかったので、早速かけて無事であること、家と車がだめになったことを伝え、県内の仲間や岩手・福島の役員の方の安否を聞きました。現役員の中で、最後まで連絡が取れなかったことで、かなり心配を掛けていたようで、毎日安否確認のメールが入っていました。30分の充電では10分話せたら上出来という専務の言葉を思い出し、ほかのみんなにはメールでとりあえず無事なことだけは伝えようと文章を打っていましたが、案の定間に合わず電源が切れました。

### つづく避難生活

この日、帰るとなんだか避難所全体が楽しそうな雰囲気でした。なんとご近所の方が、ドラム缶に沢の水をため、薪で沸かして、お風呂にそのお湯を溜めたの

で入りにいらっしゃいと言ってくださったそう  
うで、久しぶりのお風呂ということでテンシ  
ョンが上がっていたようでした。このお風呂  
は3回ほど入らせていただきましたが、頻繁  
に入れるわけではないし、ヘアブラシもなか  
ったことから、この際ということで、ゴムで  
結べるギリギリの長さで髪を切ることにしま  
した。結べない長さだとそれはそれで鬱陶し  
いし、それに結んでおけば数日梳かせなくて  
も、ごまかしが聞きますから。

避難所の日中の対応役は私たち姉妹だけ  
なく、地元の先輩も子ども達と共に避難所に  
泊まって手伝ってくれたので何とかあったの  
ですが、連日ではストレスもたまってしま  
うので、数日に一回は休みがほしいと訴え、お  
互いに調整して用足しに出かけることもでき  
るようになりました。

こうしてやっと避難所のほうも、平和に運  
営ができるようになり、毎日2～3回食料物  
資が届き、給水車、保健師、医療団、ボラン  
ティアの方々の対応を行いました。

この避難所（集会所）は、ガスは大きなボ  
ンベを据え置くタイプで、トイレは簡易水洗  
タイプでした。飲料水は給水車のみでしたが、  
近所に井戸があったので利用させていただき、  
手洗い用には井戸水を、掃除やトイレ用には  
川の水を利用できました。生ゴミも近くの畑  
に、大きな穴を掘って、そこに埋めるという  
昔ながらの方法を取らせてもらえました。灯  
油も毎日避難所宛に配給があったので、反射  
式石油ストーブがあったものをお借りし、発  
電機を使わないで昼間の暖を取れるようにも  
なりました。そのお陰で調理もでき、衛生状  
態も普通の避難所とは比べ物にならないほど

良い状態だったので、風邪やインフルエンザ  
などが流行することもなく、その点では大変  
恵まれた場所でした。避難所にいた老夫婦の  
お子さんが安否を心配して尋ねて来た時も、  
「テレビですし詰め状態の避難所を見ていた  
から心配していたが、こんなに衛生的に過ご  
せているのでとても安心しました」と言われ、  
他に比べればかなり恵まれた状態なのだと再  
確認しました。

世の中がどんどん便利になっていきまし  
たが、このような電気がない状況では、昔な  
がらの方法を残しておいたほうが、比較的ス  
ムーズに生活が営めるような気がします。実  
際、気仙沼に行った際に寄った水洗トイレは、  
とんでもない状態になっていました。自宅避  
難をしていた方たちの中には、浄化槽が停電  
のため細菌が死滅してしまったという家もあ  
ったそうですし、逆に練炭や薪を利用して調  
理を行ったという家もあったそうです。逆に  
文明の利器で有効だったのは、屋根に載せる  
ソーラー発電パネルです。載せていたお宅  
では、毎日子どもたちが携帯ゲームをやっ  
てはいましたが…。

ライフラインは、24日に電気が避難所に  
届き、携帯電話も docomo と au は3月中に  
避難所付近で使用できるようになりました。22  
日頃に、ガソリンの一般販売も始まりました。  
ただし、10Lまでの数量限定。地区ごとに携  
行缶をまとめてガソリンスタンドに持ち込む  
という方法がとられ、道路の渋滞をなくすよ  
うな工夫がされていましたが、これは一部の  
地域だけの処置で、25日に気仙沼市内に車  
で向かった際には、ガソリンスタンドの前  
から1km 近くの渋滞が発生していて、と  
ても大変

でした。

## 失業

25日に会社に行った時、いつの間にか集合場所が変更になっていて、専務の自宅に行くよう張り紙がしてあったので、泥がまだ残っている道を歩いていきましたが、この頃には各店舗やお宅では、歩道に大量の泥だらけになった家具家電を積み上げていました。私の自宅付近では、洗えば使えるから、といろいろ拾っていたお宅が多かったのですが、市中心部では、湾内に溜まっていたヘドロや重油、汚物の混ざった水が襲ってきたので、ほとんどが廃棄処分になっているようでした。考えてみたら、私のところはほとんどの物が海に持っていかれているので、「少しでも『自分の物』が欲しい」と思うものですが、自宅いっばいに泥だらけの家具家電があったら、「まず買い換えよう」と思うのかも知れません。

専務宅に着くと、ほぼ全員が2週間ぶりに顔を合わせました。自宅を津波で失ったのは、私を含め4人。地震で引越しを余儀なくされたのが1人。家屋浸水は最低4人。20人ほどの会社ですが、幸いなことに家族に人的被害が出た人は1人もいませんでした。大島から通勤していた人は、連絡船がなくなってしまったので自宅に帰ることができず、そのまま高校の避難所において、ボランティア活動をしていたそうです。

みんなであれこれ近況報告をしていたのですが、そこで驚いたのが、テレビが映っているのです。エアコンが付いていて部屋の中はとても暖かく、照明がついているのです。な

んとお風呂がボタン一つで沸くのです。ついこの間まで当たり前だったはずのことに、なんだかものすごくびっくりしてしまいました。人間って便利にも不便にも慣れるものなんですね。

私を始めしばらくお風呂に入れなかった何名かとお風呂をいただき、3月分の給料（基本給）の一部を渡された後、社長から「津波で機械類すべて使えなくなってしまったので、今までの状態では経営ができなくなってしまった。20日付けで全員解雇という形にして、会社組織はしばらくの間、無事だった工場二階に仮事務所を置き、社長と専務のみで続け、機械類を手配できたら皆さんをもう一度呼び戻したい。その間、失業保険と退職金で生活をしてほしい」と言われました。「晴天の霹靂」とはこのような事をいうのでしょうか。突然失業者になってしまいました。

来られる人だけで翌日から会社の片づけを始めたそうです。私も何日か通い、その間に車に挑戦しました。幸いにも、フロント側のみに水が入ったようで後部座席は無事でした。流れてきた箱に後部車輪が乗ってしまったので、斜めになって入りにくかったのですが、電気系統の誤作動がうまい具合に窓を開けてくれたので、何とか入りこみ、トランクに乗せていた物も、座席を倒してかなり持ち出せました。

## 避難所を出て

幸い親戚の持っている空き家を借りることができ、3月いっばいで私の家族は一応避難所から出ることになりました。一応というのは、転居して何年も放置していたのと、もと

もと古いお宅だったので、ガスや水道が使えないので、食事は避難所で調理したものをもろうという、ほかの在宅避難者の皆さんと同じ形にしてもらいました。持ち主も「何年も様子を見ていないから、住める状態じゃないと思うよ」とは言っていましたが、そろそろ車中泊も辛くなって来ていましたし、ほとんどいい人たちばかりとはいえ、常に回りに他人がいて、今後のことを家族と相談することもできない状態からすれば、とても気が楽になりました。

昼間の対応係は、「通勤」という形で続けました。引越しのゴタゴタで数日振りに行った時、一緒に避難所にいたおばあさんに「あなたたちが来てくれて安心したよ」といわれてしまいました。

この避難所は小規模であったため、比較的初期に閉鎖することが決まっていました。そのため各家庭に電気と水が通る4月中旬まで、いろいろと問題は生じましたが、何とか協力してまとまることができました。

今回の震災は、今までにない未曾有の災害と言われていますが、あと一ヶ月前に起こっていたら、寒さでもっと多くの犠牲が出ていたでしょう。もっと暖かい季節であったら瓦礫の中でさまざまなものが腐敗し、捜索活動などにかなりの支障をきたしたことでしょう。ある友人が「同じ季節でもこれが12時間ずれていたら、夜中に停電では逃げるができずにもっともっと多くの犠牲が出ていたに違いない」とも言っていました。数多くの被害を生み出した災害ですが、いろいろと考えるとまだまだ「不幸中の幸い」であったと考えられるのかもしれません。

内陸に住む青年団仲間に「何で家をなくした人たちは『買ったばかりのテレビとかパソコン流した』とか細かいものを言うんだろ？ もっと大きいものがなくなっているのに」と不思議がられました。住宅展示場に行った際にも、営業の方に「沿岸部のみなさんは結構前向きに家の建築を考えている」と言われました。多分、いつまでもくよくよしていても始まらないということを各々感じているのだと思います。空元気の人の中にはいるでしょう。それでも鬱々としていては何も始まらないのだということを、知らずに実践しているのだと思います。私も最初の頃は、会社などで状況を説明する際に、「家がなくなつてて…」と少し控えめに言っていたのですが、するどう反応していいのか分からないような反応をしてくる人が多く見られたので、途中からは「家、流されちゃいました～」と笑って冗談交じりに話すことが多くなりました。実際、泣いたところで戻ってくるわけでもないし、笑うしかない状況、最早笑い飛ばすしかない状態でもあったわけですが。

改めて思うのですが、私は被災者とはいえ非常に恵まれた状態であったと思います。家はなくしたけれど家族は全員無事であり、当日も寒さに震えることもなく、本来なら十数km歩かなければならなかったのに、ご好意で送っていただき、避難所も小規模であったおかげで飼い犬とも離れずに済んで、家族で住む空き家も貸していただけました。周りの人たちに助けられてここまで来られました。今後何らかの形でお世話になった方たちへご恩返しをしていきたいと思ひます。

(宮城県青年団連絡協議会)

---

## 東日本大震災を経験して

登米市 岩崎 大輔

---

### 震災直後から帰宅まで

「あっ？地震だ・・・」この地震が多くの尊い人命を奪い、多くの人々の人生まで変えるような大地震になるとは、その時全く思いませんでした。

私は宮城県石巻市にある造船所「株ヤマニシ」の設計課に勤務する社員であります。3月11日震災当日、職場で巨大津波を経験しました。今回、地震発生から数日間の事を皆さんに伝えながら、震災で私が感じたことを書き記したいと思います。

地震発生の2時46分。私は職場の自分の机にいました。ちょうど休憩後、現場に船体ブロックの工事確認に向かおうとコーヒーを飲みながら関係図面の準備を進めていました。

もしこの地震があと15分遅かったら、私はどこにいたのでしょうか？係留していた船に乗って流されたか？あるいは検査の為にブロックの中において、そのまま倒壊していたのか？あとになって考えるとぞっとする思いです。

その時、最初の揺れが来ました。初めはそんなに大きな揺れではないだろうと思いましたが、次第に揺れが大きくなっていく状況から、その場にいた部下達が書棚の下敷きにならないように「書棚を押さえろ」と命じました。その後に揺れが収まったので、書棚を押さえるのを止めさせ、直ぐに外への避難を命じました。係長でもあり一番奥に机がある私が、最後にパソコンのサーバーの電源を切っ

てから避難しようと思っていたところに、2回目の揺れが来ました。今までに経験したことのない非常に強い揺れであり、建物の鉄骨が軋む音が聞こえて天井がひし形に大きく変形したので、建物の倒壊を想像した私はサーバーの電源が切れるのを確認する前に慌てて外へ逃げ出しました。

外へ逃げ出すと、アスファルトの地面が大きくひび割れていました。同僚が大声で私に向かって、「飛べ！」「早くこっちに来い！」と叫んでいる声が聞こえました。最初は何を言っているのか？と思いましたが、地面が大きく隆起していて50cmくらいの段差が出来ていました。同僚が手を差し伸べてくれたので、飛び降りることが出来ましたが、「お前あそこにもし足が落ちていたら引きちぎれていたぞ」と言われました。

適切な表現ではないかもしれませんが、宮城県は以前から地震が多い土地柄、震度5程度の地震は正直、慣れっこになっている感じはあったかも知れません。ところが、今回の地震で揺れが収まってピンときたのは「津波が来る」という危機感でした。誰もが今までに経験したことない長時間の大きい揺れだったのと海沿いに居たため、どこからともなく「10メートルの津波が来る」「逃げろ」という本能的な、誰かの叫び声が聞こえました。

私の職場は造船所という環境のため、当然、海に面しています。しかも元来、埋立地という土地のため、周囲を見渡しても高い場所は殆どなく、職場構内には船員の宿泊施設として利用している2階建ての建物か、船体ブロック製作用のタワークレーン、天井クレーンを装備しているため屋根が高い建物といった

限られた設備しか高い場所はありません。さらに我が社から津波を回避する為に内陸部の安全な場所に出る為には道路が1本しかありません。結果的には逃げる場所といったものではなく、とりあえず退避する感じの場所しか構内にはありませんでした。

以前から震災時の具体的避難計画の設定に関しては、労使間の協議事項となっていました。でも正直、ここまで巨大な津波が発生するとは誰も思っていなかったと思います。

我が社は200人程の従業員に対し、下請け業者が構内に400人程常駐しています。地震発生直後はそれが一斉に自分の車で逃げようと殺到したため、隣接する道路が大渋滞になりました。その為、従業員の殆どが車での避難を止め、構内の高い施設に避難することになりました。既に危険を察したのか、「逃げろ!」「とにかく早く上に行け!」と、管理職では無く親分肌の人物が自発的に声をかけて避難を促していた感じでありました。

私たち設計課の課員は、事務所の目の前にある船員宿泊施設(通称:リポウズハウス)に避難することになり、私も部下達に避難するように命じました。しかし、いくら高いといっても所詮2階建ての建物。1番高くても10メートルはなく、内心、「本当に大丈夫かな?」と思いましたが、最終的には60~70名くらいがその建物に避難しました。その直後、「建造中の船が流出した!」とか、「ブロックの下敷きになっている人がいるようだ」と数名の作業員が慌てて海の方に走り出しました。労働組合の役員をしている私も、「これはやばいよな」と思い、組合員の安否確認をしようと現場に向かいました。

途中、労組委員長と合流して現状と対策を協議しましたが、施設係の責任者である委員長はこの間に構内のガス・酸素の元栓を全て閉じたとの事でした。今思うとこの判断があったから火災などの大災害が発生しなかったと思います。現場の確認を終えると委員長も資材倉庫に避難するとの判断をしたようだったので、私もリポウズハウスに戻ることにしました。この間、多くの従業員や業社の人間が避難しろという制止を振り切って車で逃げる状況でした。私も何人か知り合いの業社の人間と出会い、施設に避難するように促しましたが、みんな、「自宅に帰る」とその場を急いで立ち去って行きました。

震災後に振り返ると、津波の第1波まで40分か50分あったので、この時に車で避難した方々は全員無事だったのですが、ただ当時は5分後に来るか、10分後に来るかわからない不安な状況だったのと、「自分の部下達を残して避難できない!」という思いからその場に残ったという訳であります。現場からリポウズハウスに戻る途中、誰かがラジオで聞いたみたいで、「(陸前)高田が壊滅だ!津波が来るぞ!!」と叫んでいる声も聞こえました。この頃、困った問題が発生していました。実は震災直後から私の携帯電話に数十件の安否確認の連絡が入っていました。全国各地の、青年団の仲間の多くの方々が私の安否を心配してくれるのは嬉しいのですが、こういった状況の中で一番ほしいのは災害の情報です。中には「お~い、大丈夫か?生きてたら返信くれよ!」といった気楽な内容のメールもありましたが、返信しようにも返信できません。基地局の回線がパンクしていたのもあります

が、命の危機を感じている中でそんな余裕など一切ありませんでした。

しかし、そういった中でも助けられたメールがありました。鹿児島の方からの安否確認メールには「大丈夫ですか？三陸沿岸に津波が来て被害がでている模様です。何か必要な情報や要請などありましたら連絡下さい」といった内容のものでした。ピンと来ました！「あっ、この人は行政の人だ」とすかさず「今、こういうわけで避難しているんだけど津波の到着予想時間とか何でも情報がほしいです」と返信しました。そしたら、不思議に遠くのメールは通じました。直ぐにSさんから返信が入り、「釜石とか宮古は被害が深刻みたいです。石巻には3時半くらいに到着予定です。必要なら上司に相談して防災電話で県庁に連絡しますので連絡願います」と何よりも貴重な情報を頂くことができました。

この時、私は作業着ひとつに足元はサンダル履きだったので、少々悩みましたがいったん自分の机に戻り防寒着と靴を履き替えました。部下の1人が「岩崎さんのです」と私のヘルメットを差し出してくれたので、「長期戦になるから食料集めて持って行け！」と冷蔵庫とか、部屋中の食料（お茶請けのお菓子とか）をかき集めさせました。何となく誰もが「たぶん夜中にならなきゃ帰れないだろうな」と予感がしたのか、傍らでは上司が、中に1枚余計にセーターを着込んだりしました。私も、県団データが入っているUSBメモリと県団事務室の鍵、車の鍵、持病の喘息薬を持って急いでリポウズハウスに戻りました。

この時の私たちの行動は、正直危険だったかもしれません。震災後に分かったのですが、

多くの方々がこうやって荷物を取りに自宅に戻ったりして命を落としています。でもこの時は「間違いなく津波が来る！」と確信した直後だったので、みんなが到達予想時刻まで急いで準備して戻るという状況でした。

その直後（時間にして2～3分くらいだろう）、「波が来たぞー！」と2階の見張りが大声を上げました。私は1階の入り口付近にいましたが、目の前に現場の人間が疲れた顔でトロトロ歩いてくる姿が見えました。「早く来いー」と叫んで建物に押し込み、最後に2階に上がりました。当初自分の想像していた津波は、壁のような大きい波が押し寄せるといった感じでしたが、やってきた津波は、真っ黒い水がチョロチョロチョロと、風呂水が溢れるような緩やかな感じでした。しかし徐々に、そして一気に勢いが増し、5秒後には凶暴になり牙を剥いて勢いを増して上がっていく感じでした。階段を、1、2、3歩、踊り場まで駆け上がって振り返ると、水はさっき自分がいた場所を既にのみ込んでいました。間一髪でした。そのまま2階に上ったら、その時点でもう2～3メートルくらいまで波が増していました。気が付くと駐車場に停めてあった車が、何十台、何百台と目の前を流されて行きました。水位は緩やかに増していき、目の高さを大型船が流れていくと、自分たちは海の真ん中を進んでいるような感じにさえ思えました。気づくと膝丈位まで水位が上がっており、一向に下がる気配はありません。辺りからは悲鳴にも似た感じの叫び声も出始めました。冷静さを無くす人、2階から屋上に上がろうと屋根を壊す人、通路を空けて入り口のドアと出口のドアを開けて水の流

れ道を工夫する人。みんなが試行錯誤していました。

正直、「あと1メートル水位が上がってくれば駄目だな」と一時は覚悟を決めました。しかし人間は不思議な生き物。気持ちの入替というものか、窓の外を眺めながら「こんなところで死んでられない、絶対生きなければ」と思ったら、今までちょっと諦めていた気持ちから、やる気側にスイッチが切り替わっていった感じがしました。「最悪どうしようか。泳いで外に出るか？窓を割って上に出るか？」と助かる方法を前向きにいろいろ考えました。考えているうちに、水がどんどん引きはじめ、ようやく水位が落ち着きました。

「は一助かった」と安堵感に包まれましたが、直ちに次の対策を講じる必要がありました。

我が社の場所は内湾でコの字の形をしている為、港側から入った津波の行き場所が無く、物凄い勢いの引き波となって戻ってくる可能性があります。またラジオからは「第2波、第3波の方がもっと勢いが強く巨大な可能性がある」と報道されており、次の波に備える必要がありました。といっても第1波で大破した建物ではどうする事もできません。

Sさんに「津波が来ました。今、孤立状態なので救援を要請します」とメールをしたら、

「了解しました」と返信のメールが入ったのが最後、この後メールは不通になりました。

午後4時くらいには雪が降ってきました。窓の外を見ると流出した船(300トンくらいの漁船)が引き潮でこちら側に向かって来ており、一瞬、脳裏に映画タイタニックのワンシーンが浮かびました。「何とかかわしてく

れ！！かわしてくれ！！」と祈る気持ちで不安でしたが、何とか無事に船は逸れて行きました。

その頃、必死に119番にみんなで通報していたのですが、なかなか通じることはありませんでした。たまたま私が電話した時に通じたのですが、

消：「火事ですか、消防ですか」

私：「すいません今、こういう状況(津波)で、ここに取り残されているんですけど」

消：「あー、今、そういう人いっぱいいるんですよ。頑張ってください」

という対応。

この瞬間、自分の心の中で「もう今の状況では何も信じられない。自分達で生き残る術を探すしかないのだ」と腹をくくりました。

第2波が巨大だと、ラジオから流れているので、残ったみんなで何とか屋上に上がろうとしました。建物には階段が無く、自力で屋上に上がることはできなかったのですが、建物にある寝具やカーテン等でロープを作り、部屋にあったテレビとか冷蔵庫を階段状に積んで、即席で階段を作りました。造船所なので作業者は安全帯を装備しているので、全員交代で、みんなで何とか屋上に逃げることができました。

屋上に上がり外の様子を見ると、構内クレーン等に多くの現場作業者が避難していました。ちょうどその時、大きな引き波が来て、どこかの鉄塔にしがみ付いていた作業者がその引き波に乗って泳いで来ました。その人いわく、「最後に賭けたんだ。この波に乗ってあそこに行かなきゃ、オレは死ぬって」とのこ

とでした。必死に泳いで、また一人、命が助かりました。

雪が降る中、屋上ではみんなで円陣を組み、まるでおしくら饅頭をするように寄り合って暖を取っていました。体調を崩してしまった人もいましたが、その円陣の真ん中に押し込んで、みんなで励ましあって難を逃れようとしていました。

その時、「来た、来た、来た、やべー、でかいよー！！」誰かが叫びました。そう、恐れていた第2波がやってきたのです。私が見たのは、ちょうど目の前の防波堤の切れ間から、まるで富嶽三十六景神奈川沖のような、巨大な黒い波が押し寄せてくる姿でした。

正直その瞬間、「あーっ、終わったな」と覚悟しました。しかしその波は、目の前の波消しブロック（テトラポット）でパタパタパタパタと消えて行きました。その瞬間、「助かった」という安堵感にみんなが包まれました。

屋上で夕方5時くらいまで避難していましたが、日没になり急激な寒さが襲いました。屋上では暖を取ることができなく、一晩過ごすことは難しくなったのと、この間に大きな波も来ていない事から、2階に移動する事になりました。

その頃には、クレーン等に避難していた作業員も私たちのリポウズハウスに合流することになり、知っている仲間との再会もでき、お互いに命の無事を確認しあいました。

私達が逃げ込んだハウスは6畳半から8畳程の小さい部屋でしたが、無理やり集まった20人程が入っていました。濡れていない毛布や布団、カーテンなどにみんなで寄り添い、それでも寒い奴は押入れに入り暖を取り合い

ました。食糧は無く空腹でしたが、何よりも一番怖かったのは余震と、もっと大きい津波が来ないか？という恐怖感でした。

当然ストーブも無く、寒い状況でしたが、「とりあえず寝ろ」と上司が言いました。でもあまりにも寒くて、みんな熟睡することができず、少し下らない会話をして、人の吐く息で暖かくなったころをまた寝るといったような感じでその繰り返しでした。

後日、若い連中が「当初、怖くて眠れなかったのですが、岩崎さんが堂々と鼾をかいたから安心して眠ることが出来ました」と笑い話にする程、私は熟睡していたようです。

不安のまま一夜を過ごしましたが、明け方5時近くになるとうっすらと明るくなり始めてきました。こういう時間帯になると「オレ、家に歩いて帰る」と隊列を乱す者も出てきました。「映画なんかじゃ、最初に出て行く奴って死ぬんだよな」と若い奴が言いました。玄関まで行ったら、「懐中電灯で照らしたら、辺り一面へドロか重油かなんかで真っ黒だ」と言いながら引き返してきました（造船所はタンクに潜ったりする関係上、みんな懐中電灯を持っている。夜中には、みんな交代で蛍光灯に当てながら過ごす事も出来た）。

そうしていると5時半くらいに、集団で歩いて対岸に避難する事になり、建物の前にみんなで集合すると号令が出ました。とりあえず先発隊で若い奴らが進んで下見になり、瓦礫を掻き分け2階から下りて広場までの通路を確保しました。そのうち建物に避難したおよそ100名が集合しました。しばらくすると向こうからガヤガヤと声が聞こえました。

「あーっ！！」なんと、死んだと思った現

場の仲間達が、一緒に仕事をしていた仲間達がみんな無事にやって来ました。この時見た仲間達の顔は一生忘れません。

何というのか、人間の存在を感じた瞬間でした。駄目かな？と諦めていた時に、人が顔と顔とを合わせて、お互いに「生きている」と確認した感じでした。

後日、聞いた話ですが、現場の仲間達は工場建屋の高い所やタワークレーンに逃げ込んだらしく、あまりにも寒かったので流木や製品のダンボールを燃やして過ごしたそうです。

やはり人間は追い詰められるといるんな知恵が出てくるもの。クレーンに逃げた仲間は暖を取るためにどうしたのかというと、機械の稼働部に塗るグリース缶にボロ布を染込ませて即席の缶ロウソクを作って燃やしたらしい。本当に全てがサバイバルだった感じです。その頃、東の空には物凄く真っ赤な太陽が昇っていました。多くの人の命を飲み込んだ感じがして、物凄く憎たらしく思いました。

ここからみんなで隊列を組んで、職場から4キロ程先の内陸部に避難することになりました。避難と言っても途中の道は全て池か沼になっているか、津波によって削られたのか、殆ど道はありませんでした。仕方なく水に入って歩くことにしましたが、腰まで水に浸かった時は物凄く冷たい水に身体感覚がおかしくなりそうでした。しかし、そんなことより早く内陸部に逃げたいという気持ちの方が先行していました。途中、職場から2キロ程先にある航空自衛隊松島基地にたどり着きましたが、不自然に転がっている飛行機や、基地内が混乱している状況から、直感でここまで津波が押し寄せたのだと感じました。この

地震はただ事では無く、阪神大震災レベルではないのだと、自然に気持ちが引き締まりました。

職場から3キロ程歩くと、周囲の水位が下がっており、道路のアスファルトが顔を出しました。しかし、道端には流された車や住宅の瓦礫が散乱しており、震災というより戦争の最中のような光景が広がっていました。道端には津波が来て逃げたのか、乗り捨てられた車が沢山ありました。また自宅のある方向に向かいたいのか、多くの方々が私たちの来た方向に入れないかと尋ねてきました。それと、私は見なかったのですが、部下の1人は遺体らしきものを目撃したと後日語っており、本当に全てが混乱している状況でした。

本隊はとりあえず避難所の方に向かうとの事でしたが、自宅まで帰る社員もおおり、正直戸惑いましたが、行動を共にしてきた上司が自宅方向に帰ると言うので、私もついて行くことにしました。この時、「最悪自分も歩いて帰るしかない」と覚悟を決めました。

同じ方向に向かうことにした数名で隊列を組んで少し歩いたら、一晩で相当数のコンビニが略奪にあったのか、商品がほとんどありませんでした。更に備え付けのATMが全て破壊され盗難されていました。昨晚のうちに被害にあったとして、あの余震や押し返しの津波の中で窃盗をしていた者がいると考えたら、「相当物騒だ」と恐怖感を感じました。

そんな中、とあるコンビニに長蛇の列が出来ていました。尋ねてみると店長の好意で食べ物を持って行って良いと言っているらしい。そのうち部下の1人が「俺、昔コンビニでバイトしてたんで」と素早く裏に向かい、でか

い箱に食料をたくさん頂いてきた。

せっかく頂いた食糧だから分けようということになり、私はオレンジとアップルのジュース2本、食料でピーナッツせんべいとポテチ一袋を頂きました。最終的にこれが2日分の食料になりました。10人くらいで隊列を組み、前からスナック菓子の袋が回ってくるのを食べたらまた後ろに回してと、みんなで回し食いをしながら北へ進んで行きました。途中、部下の自宅に寄り、確認したところ床上浸水で家族も避難した様子との事でした。

実はこの時、一つ心配事がありました。先日退院したばかりの女子社員と行動を共にしていたのです。当初、「ちょっと歩くのが大変だから肩を貸せ」と言われて預けられたものの、だんだん危機的状況を感じ始めると、自分が助かるために人のことを気遣う余裕がなくなるのか、だんだんと人が離れていってしまったのです。「まさか、ここで私が置いていくわけにいかない」と思い、何とか無事に自宅まで送り届けなければと必死でした。

途中、焚き火をしている所で暖を取らせてもらい休憩した時に、青年団をやり始めた頃に神戸での阪神大震災研修で学んだ事をふと思い出しました。

- ① 食糧は3日くらい入って来ない。
- ② 治安が悪くなること。
- ③ 必ずデマが流れる。情報は確実な物を自分で判断すること。

この3つだけが記憶にありました。サバイバル術は全然覚えていませんでしたが、この3つは肝に銘じる事にしました。

途中、前方から来た人が「この先の橋が落ちていて渡れない」と伝えました。しかしこ

の人は「人伝いに聞いた」とのことでした。別の方は「道が冠水してるんで、山越えで8時間掛かった」と伝えました。こうなると「この人は間違いなく自分で歩いているから正しい。こっちの人は人伝えだから信用できない」と情報を整理して進むことにしました。

みんながそれぞれ自宅方向に向かい始めたので、気が付くと女性3名と私の合計4名になっていました。時間も正午を回り、みんな前日一睡もしていない状況で、しかも1人は体調も思わしくないので、治安も悪い中を女性だけを歩かせて返すわけには行かないと思い、とりあえず寝床を探す為、最寄の避難所に向かいました。

私達が向かった避難所はヘリコプターが頻繁に飛び降りするほど、半島の方や離島から避難民を運んでくるくらい、前線基地さながらの光景でした。私たちは高校の教室の一角に今夜の寝床を確保したが、その日の夕食は30人くらいの人数におにぎりが15個、かりんとうの袋1つだけだった。正直食事はあきらめていたが、空腹に耐え切れないので、朝にコンビニで貰ったスナック菓子をチビチビ食べて一晩過ごしました。

翌朝、夜明けと共に目を覚ましたので、私は情報収集をしようと行動を開始しました。とにかく全く2日間、情報がない。携帯も全部圏外、ラジオも全国的な内容で地方は断片的。ワンセグも電池が勿体ないので使えない。情報という情報が全くないのでした。避難所の高校には市職員や係員がいるので比較的対応は良く、「どういう状況なんですか」と伺いながらも必ず混乱しているので、自分で判断しながら最低3人に同じ内容を確認しました。

その結果、近くの石巻赤十字病院内に災害本部があるという情報を入手した為、一緒に避難した女性の1人と病院に向かうことにしました。病院には安否確認の紙が壁一面にいっぱい張ってありました。各地の被災状況を確認したところ、私の自宅方向への道と、一緒に避難所にいる方々の地域へ向かうルートが確認できました。

避難所に向かったところ、なんと一人おにぎり3個の配給がありました。貴重な食料を得て、みんなで今後の動きを話し合うことにしました。「今日、帰りたい」という意見や「自宅がどうなっているか分からない。もう一泊した方が良いのでは？」という意見で判断に迷いましたが、「今日中に必ず自宅か避難所にたどり着くように行動する」と意見がまとまり、みんなそれぞれの自宅方面に向かうことにしました。

みんなと別れて1人、避難所近くで商売をしている親戚夫婦の店の方向に向かいました。店舗と自宅が別々なので、駄目もとで向かったところ、店の前から煙が上っていました。

「あーっ。これでオレ生き延びたー！」と思い、一目散に店に向かいました。店に着くと伯母が一人で店番をしており、私の姿を見るなり涙を流して喜んでくれました。

ちょうど炊き出しをしようと店を開けたらしく、近所では私の生存が絶望視されていたようです。伯父は不在でしたが、伯母から車を借り自宅へ向かうことにしました。

さっき別れた3人が心配で後を追いかけてきましたが、姿を見つけることが出来ませんでした（後日分かったのですが、3人は消防車をヒッチハイクしたとの事）。

職場から20キロ程内陸にある自宅に向かうと、倒壊した家屋やひび割れた道路など、被害は深刻でした。既にガソリンスタンドには長蛇の列が出来ていました。車中のラジオからこの地震がM9.0という事を知り、正直言葉が出ませんでした。

ようやく3日振りに自宅にたどり着きましたが、大きな被害も無く家族も無事でした。私が最後まで帰宅していない事を心配した近所の方々、同級生、所属している消防団の幹部の方々が何度も尋ねて来てくれたと家族から聞かされました。

自宅周辺は津波の被害こそ無いものの、家屋の倒壊・損壊の被害が大きく、近所の同級生は家の中に住めないで、農業用のビニールハウス等で寝泊りしていました。自宅に帰っても治安が悪い感じが強く、隣近所のコミュニケーションこそ問題なく、助け合っていたものの、見知らぬ人間を見かけると正直構えていた感じがしました。

様々な方々に心配をかけたので、何とか連絡できないものかと考えていたとき、友人が「携帯のアンテナが立つ所を見つけた。今から連れて行くからオレの車で携帯充電して、青年団とか仕事関係に連絡した方がよい」と連れ出してくれたので、何とか安否を伝えようと試みたところ、北信越方面に連絡が通じたので、青年団関係は石川県のMさんに、仕事関係は富山県のSさんに連絡をお願いして、皆さんに無事を伝えることが出来ました。

震災の混乱は1週間程続きましたが、水道は1週間、電気は2週間ほどで回復するなどライフラインも徐々に復活していきました。仲間の安否連絡も頻繁に入ってくるようにな

りましたが、残念ながら数名の方が命を落としていました。

職場の方は3月末に再建することが決定。市の内陸部に事務所を借り、震災前に受注していた仕事を外注することになりました。社員は雇用調整給付金を受給することになり、失業の危機は回避することが出来ました。被災した社員は自らの住まいの再建を行いながら職場の再建を行っております。労組書記長としての立場から、震災直後から組合員の安否確認や、流出した資料の回復や財政の把握、被災した組合員への慶弔共済の支給手続きなどを進めてまいりました。

宮城県団としては、震災直後は県団事務室に近いI前会長が主となって、青年団関係者や青年大会参加者への安否確認を行い、3月末によく全役員の安否確認が完了。4月9日、震災以来はじめて役員会を開催して、今年度の運動方針ならびに復興対策に向けて協議を行い、復興に向けて小さくても踏み出して行くことをみんなで確認しました。

### 震災後の宮城県団の対応

県団事務局長の立場として考えたのが、今後の宮城県団の対応と運営でした。

震災前の状況では、宮城県団では沿岸部の青年団が休会・休団しているところが多い反面、青年体育大会に出場しているクラブチームがこの地域の活動の中心となっていました。震災直後の混乱から徐々にライフラインが復旧し始める中、それぞれの団体代表者に安否確認を進めながら、被災の状況や救援物資等の情報収集を進めてきました。しかし他の団体が行なっている炊き出しや物資の配給など、

最前線での支援が全く出来ない状況でした。

なぜなら、青年団は大きな資金も無いことも理由の一つですが、これ程の大規模災害になると正直な話、我々のレベルではなす術が無かったのです。仮に材料が確保でき被災地に向かって炊き出しを行なうとしても、そこに向かう為のガソリンを個人では確保することが出来なかったのです。また、津波による被害を受けた地域も広範囲の為、偏りが無く支援していく為にはあまりにも人手が足りない状況でした。役員や加盟団理事も自らの自宅や職場の再建に向けて動き出していたり、自治体職員だと復旧任務で動けない状況だったりしました。何とか復興策を考えようにも役員が集まることも出来ない状況の中、農協青年部や青年会議所などが被災地に入り炊き出しを行なっているニュースが流れる度に、動くことの出来ない歯痒さを感じ、自分たちの無力さを恨んだりしました。

他県団からも支援物資の要請を受けましたが、前記のような理由で断りを入れる事が多々ありました。青年会館も施設の損傷が酷く、職員は施設の復旧に追われており、県団との連携も厳しい状況でした。これ程歯痒い思いをしたことは今まで有りませんでした

(逆に加盟団等で地域の活動基盤がある場合には率先して行動した所が多いと思います)。そういう状況から考えを改めたのは、「沿岸部のチーム、みんな無事ですか？復興に向けてみんなで何か元気付け出来ることがあったら教えてください」と過去に青年大会参加チームの代表者から頂いた1本の電話でした。内容を詳しく伺うと、

①青年大会をきっかけに相互交流が始まって、

ネットワークみたいなものが出来ている。

②それぞれの団体が被災していても、活動を再開したいと考えている。

③その足掛かりとして大会参加したい。復興大会みたいなものは開催できないか？

その結果、日青協を中心とした全国の青年団の支援を受けながら、震災復興に向けて県団の目標を「地域活動の再生と支援」と「復興事業の開催」とし、今年度は次の取り組みを進めてまいりました。

#### 1) 地域活動の再生と支援

##### (1) 宮城県青年団復興基金「がんばっぺ～基金」の設立

東日本大震災で被災した県内青年の地域活動の再生支援を目的に、宮城県青年団復興基金「がんばっぺ～基金」を設立しました。この基金は日本青年団協議会の東日本大震災復興支援基金や全国の青年団から寄せられた義援金を、県内の被災した青年達が、地域活動再生に有効かつ効果的に運営できるように運用をすることを目的に設立。県青協事務局が管理運営を行なっております。

##### (2) 宮城県青年団地域活動再生支援金助成制度の募集

「地域活動の再生と支援」として、「宮城県青年団地域活動再生助成金」を募集。現在までに青年大会等の参加経験のある数団体から申請があり、基金の中から助成を行なっています。助成を受けた団体は、津波で流出した用具の購入費用などに活用し、「生まれ育った地域の中で活動再開に向けての足掛りとなった。」といった声を頂いています。今後は、被

災地域から全国青年大会参加者へのユニフォーム等の費用の一部負担や、用具の再生に多額の修繕費用がかかる郷土芸能団体への助成を行う予定であります。

#### 2) 復興事業の開催

##### (1) 第60回記念全国青年大会宮城県選考会の開催

東日本震災の影響で開催中止となった、宮城県青年文化祭・青年体育大会の代替事業として、昨年8月に開催しました。大会には全国青年大会参加を目指して文化・体育両部門合わせて150名程の参加がありました。卓球部門には南三陸町から2団体のエントリーがあり、参加チームの一つ、戸倉ビッグウェーブの仲間からは「被災した直後、全国の皆さんから物、心共に多くの支援を頂いた。そのお礼を込めて全国大会に参加し、元気に頑張っている姿を皆さんに見せたい。」と復興に向かう力強い想いを感じることができました。

軟式野球部門には南三陸町のサンライズが参加。用具類を流出してしまった為、大会特例で公式ユニフォーム以外での競技参加となりましたが、対戦チームのピンクコングから用具の貸出しの申し出もあり、大会を通じての生まれた絆の強さを感じ取ることができました。参加者からは「県大会が中止となり心配したが、こうしてまた全国大会参加を目指して競技ができるのが嬉しい。復興に向けても頑張っていける」といった声も頂く事が出来ました。次年度は宮城県青年文化祭と宮城県青年体育大会を復興記念大会と位置付けて、多くの県内青年が参加できるような開催を望みます。

(2) 平成23年度子どもゆめ基金助成事業「青少年体験活動指導者全国フォーラム東北地区プログラム」の開催

地域活動のリーダー育成を目的とした、日本青年団協議会の主催事業、青少年体験活動指導者全国フォーラムの東北地区プログラムの開催を、宮城県団で受入れることにしました。この事業は今年度、全国4箇所での開催を目指していましたが、東日本大震災からの復興に向けて頑張っている姿を全国の仲間発信することと、東日本大震災で被災したこどもの心のケアを学ぶ事こそが、県団で行なう復興事業と位置づけ、7月から県青協役員を中心に実行委員会を組織して準備を進めてまいりました。東北各地や群馬・石川と全国各地から参加を頂き、震災からの復興に向けて力強いエールを頂くことができました。

フォーラムは実践報告を中心としたパネルディスカッションから始まり、その後3つのグループに分かれてのグループワークに進み、多くのこども事業のポイントを学びました。

1日目の夜には交歓会も開催され、こども事業の実践さながらの企画では、クリスマス会を開催。サンタクロースなどに扮した県青協役員が登場すると、会場は大いに盛り上がりました。2日間の研修で学んだ内容を、それぞれの地域の中で実践して行く事を、最後にみんなで確認して閉会しました。

### (3) 聞き取り事業の開催

震災直後の混乱した状況や、津波で甚大な被害を被った地域の青年が、当時どの様な状況だったかを聞き取り調査して、今後の教訓や後世に残して伝えていけるように「聞き取

り事業」を進めてまいりました。この事業は日本青年団協議会と連携し、東海大学特任講師である辻智子先生を聞き取り役として迎え、当時の状況を一度音源に記録して、その内容を文書化して記録に残すといった事業であります。

1月に開催した「第34回宮城県青年問題研究集会」では聞き取り事業の特別分科会も設定。沿岸部以外の内陸部青年の聞き取りも行うことができました。

今後もより多くの聞き取り調査の結果を記録として活用できるように継続的にこの事業を進めてまいります。

### 3) 今後の展望

次年度以降も県団の行動目標である「地域活動の再生と支援」と「復興事業の開催」を積極的に展開してまいりたいと思います。また日々変化する情勢を的確に判断しながら、被災地域の青年が求めるものを、日青協を中心とする全国の青年団と連携を図りながら進めてまいります。

## 震災時の青年団としての注意点

<災害発生直後>

①災害発生直後の安否確認の連絡は避ける  
→ 心配する気持ちは同じだが、多数の安否確認は逆に迷惑。今、避難が迫られているような場合には、被災者はとにかく正確な情報がいち早くほしいもの。絶対に不必要な連絡は避ける。(特に安否確認メールや長時間の電話)

②支援物資などは被災者からのニーズに応え

て行う。

→ 被災者の気持ちになって考えて頂けるのは嬉しいが、自分たちが良かれと思っても逆に駄目な場合もある。相手の状況を確認して行うこと。

③支援の無理押しを行わない

→ 今回の様な大災害だと、受入れする側も被災して動けない状況である。支援したい気持ちは理解できるが、「何か欲しい物ありませんか？」が度を越すと「何か欲しいものが必ずある筈です。何か送る所を探してください。」となつては逆に迷惑になる。状況を判断して行うこと。

<復興に向けて動き始めた段階>

①炊き出しや物資の配給は相手先の様子を伺い確認してから行うこと。

→ 復興に向けて動き出した段階では、殆どの避難所・仮設住宅では被災者の自立支援を目指して動き始めている。そこにアポなしで物資の配給や炊き出しは逆効果。きちんと内容を説明して確認を取った段階で行うこと。

(同じような企画を考える団体は物凄く多い)

②ボランティアや支援活動に入る場合は直前の申し込みを避ける。

→ 期間が無い行動は、逆に受け入れ側が大変。余裕を持った行動計画を進める。

③災害に学ぶのは重要。でも物見見物は逆効果。

→ 現地視察というだけで現地に入るのは逆

効果。きちんと知りたい事をまとめてから受入れを要請する。

<その他>

活動実績や支援のお礼を申し込むのは絶対厳禁!

(機関紙やウェブサイトにて報告する場合には、被災者の心境を踏まえて行うこと)

<震災直後から帰宅まで>

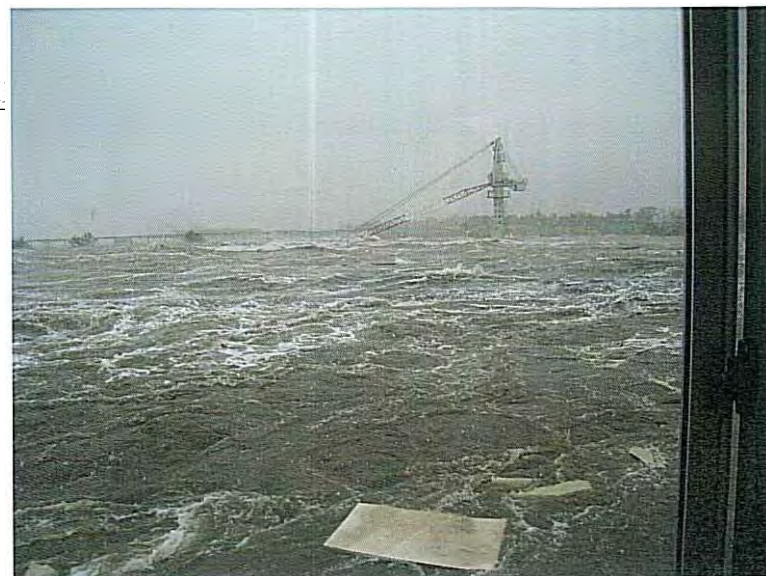


① 津波襲来直後 (津波によって流されてくる車両 その1)



② 津波襲来直後 (沖波によって流されてくる車両 その2)

■ 第1章 被



③ 津波襲来直後 (建物周辺が梅のように変化 その1)



④ 津波襲来直後 (建物周辺が梅のように変化 その2)



⑤ 津波艇来直後 (建物周辺が悔のように変化 その3)



⑥ 油波腿来直後 (建物周辺が悔のように変化 その4)



⑦ 建物屈根に避難した直後 (日没までi彫匠)



⑧ 12日 夜明け旺後 (水は引いたものの、あたり一而黒いへドロと瀧に股われていた)



⑨ 避難した建物の1階 (一而瓦礫と破版された構造物)



⑩ 迂路経路 (道格が大きく破坂されていた)



⑪ 乗り上げた船 その1 (波の威力を物語る1枚)



⑫ 乗り上げた船 その2 (建造中の大きな貨物船さえ簡に押し流す)



⑬ 避難経路 (あたり 1 而、悔か沼かといった状態)



⑭ 瓦礫が散乱した風屈 (広大な水田も瓦礫だらけの状態)



⑮ 私たちが避難した建物 その 1 (後日撮影)



⑯ 私たちが避難した建物 その 2 (後日撮影)

---

## 震災を経て

---

### 山元町 齋藤 緑

---

3月11日午後2時46分大きな地震がありました。私は仙台市の北側に位置する泉中央にある会社にいました。数日前にあったオーストラリアでの巨大地震が頭をかすめ、ビルが崩壊するのでは・・・と恐怖感がよぎりました。長い揺れが一旦収まった時に外に逃げると、電信柱が倒れてくるのでは・・・と思われるほどに揺れていました。近くにある「量販店の駐車場の天井が落ちた。」などの声が聞こえました。

私はPHSとソフトバンクの携帯の2台持っていたのですが、携帯は全く通じず、PHSは通じたので、自宅の父にはすぐに連絡がつき一安心です。また会社の同僚にも本社や他家族などの連絡などにも使って頂きました。揺れが収まるまで、会社の側で待機し4時ごろ同僚の車に乗せてもらい、仙台の市街地に向けて移動を始めました。いつもだと15分ぐらいで行ける所が、4時間ぐらいかかりました。停電の為、信号機は止まりバスも地下鉄もJRも全てストップしていたので、交通機関は全て遮断されていたため幹線道路には人が溢れていました。中にはダンボールに「乗せてください。」と書いたものを持ちながら歩いている人などもいて、まるで映画を観ているように感じました。車のワンセグテレビで繰り返し名取市あたりの津波の映像が流れていましたが、まさか、山元町にも津波が来ているとは予想もしませんでした。道路わきにある、

ビルや店舗のガラスが割れて飛び散っていました。

山元町の同じ駅から、毎朝一緒に通勤している友人Mがメールをくれていて、Mが勤めている会社がホテルを取ってくれたので、そこに一緒に泊まろうとメールをくれていたので、同僚の車を降りてからそのホテルに向かって歩き出しました。途中トイレを借りようと市役所に寄ったのですが、帰る術がなく行き場を失った人、近隣のマンションから避難してきた人等で溢れかえっていました。

ホテルまで来たのですが、どの部屋かわからず、友人に電話やメールをしても通じず、外で待っていました。街頭が全て消えていたので、街中なのに夜空はとてもきれいでした。近くのホテルを見ると1階ロビーにも人が溢れているのですが、ありったけの毛布などを配り、水やジュースなどを提供してくれていました。

ホテルの部屋は狭かったですが、友人Mと友人の同僚、私の3人で一晩過ごしました。夜中ずっと揺れ続け、毛布に包まって入り口の隙間に横になりましたが、いつでも外に出られるように靴を履いたまま横になりました。横になれるだけ他の避難所にいる人たちよりは良かったと思います。手回しのラジオで、ずっとラジオを聞いていました。「若林区に300～400の遺体があります」「山元町とは全く連絡が取れません」などの情報を繰り返し流れていて、とても怖かったです。しかし「大丈夫です。安心してください。ひとりじゃありません」など呼びかけるラジオの声に励まされもしました。とにかく早く夜が明け

てほしい。とっていました。

夜が明け、朝のうちに外に出て様子を見ました。県庁に勤めている兄に会いに行き、お互いの無事を確認し、街中を歩いてみると、薬局などが、店舗前で品物を販売してくれていました。棚が全部倒れごちゃごちゃの店内には入れないので、どの商品も100円で売ってくれました。私はペットボトルとカロリーメイトなど軽食代わりになるものを買って、ホテルに戻りました。午後には仙台駅の方にも行ってみましたが、タクシー待ちの長蛇の列ができていました。夕方4時になると信号機が復活し始め、ホテルにも電気が通じました。携帯の充電機をホテルで借りて、充電し、私の生存確認をどこかに連絡しなくては・・・と全国の友人に片っ端から電話しました。やっと繋がったのが、香川の友人で、第一声が「生きてたのか〜〜」でした。無事を伝えた事でだいぶ安心できました。ホテルのテレビも付き、映像が見られました。友人Mの自宅は海まで2kmぐらいですが、「たぶん家は流されちゃった・・・」とつぶやき、私は掛ける言葉もありませんでした。

自宅に戻れたのは、2日後の日曜日。友人と今日は帰ろうと決め、まず、金融機関で下ろせるだけの現金を準備し、買い物ができる店舗で下着や、食事の足しになりそうな食品等を買いました。この日は前日までと打って変わって天気が良く暖かい日になりました。なので、着ていたダウンコートなどは暑くて脱ぎたかったのですが、両手一杯に荷物を持っていたので、着たまま、町の中を歩いています。友人が「ホームレスみたい・・・あっ私ホームレスだ・・・あはは」と笑って

いましたが、私は笑えませんでした。駅の列は昨日とほぼ変わらず長いまま。これでは並んだとしても、いつ乗れるか見当もつかなかったもので、新聞社の前で待つ事にして、客が降りたタクシーを捕まえることにしました。少し待つと、目の前で客が降りるタクシーがあり、駆け寄って「すみません・・・山元町に帰りたいんです。山元町まで行ってもらえませんか？」とお願いすると、タクシーの運転手さんは考え込んでから「いいですよ。ただ、一件予約が入っているから、30分後ぐらい待ってもらうけど、いいですか？」と言って下さったので、「もちろん待ちます」と約束をして待ちました。もしかして、騙されたかな・・・ともよぎったのですが、本当に30分後に来てくれました。一瞬涙が出ました。タクシーに乗り込むと運転手さんが「今日で良かったね。タクシーも今日で終わりだよ。明日になるとガスももう尽きたので、走らなくなるよ」と教えてくれました。本当に良かったです。途中バイパス4号線は景色はあまり変わらず、ただいつもよりも交通量が少なく、タクシーは思ったよりも早く走りました。歩いている人は多くいました。途中同じ方向に歩いている女性2人を乗せて行きました。6号線に入り、亘理町はまだそれほど景色は変わりませんでした。山元町に入ると景色はすっかり変わっていました。途中で同級生の友人が軽トラで通ったので、自宅近くまで、乗せてもらう事にし、タクシーを降りました。山元町ではタクシーもかなり被害を受けていたので、私たちが乗ってきたタクシーはそのあと、山元町内を何度か走っていました。無事に仙台へ帰れたか心配です。

まず、私の家に行き、荷物を置いて、友人 M はロングブーツだったので、靴を貸し、友人の家族が避難しているであろう坂元中学校に歩いて行きました。そこで、友人の家族の無事を確認し、友人が自宅の方を見たいというので、歩いて行って見ると、何も無くなっていました。まるで、原爆でも落ちたかのように映画のセットのように何も無くなっていました。森の木の間に車が刺さっていたり、家の2階だけがコロンと転がっていました。隣町の丸森町に嫁いだ同級生が家族で来ていて、両親が犠牲になったらしく「逃げなかったんだ・・・仕方ない・・・」と泣きながら、風景を見つめていました。

それから2週間ほど、小さい子どもがいる親戚の方などが我が家に避難していました。散乱してしまった家の中を片付ける合間に、避難所にいる友人に着るものなどを届けました。特に不足していたのは下着。私の女性用と父の男性用と下着を出し、避難所に届けました。また喜ばれたのはホテルから持ち帰っていた歯ブラシ、くし、割り箸など。我が家から一番近い避難所の坂中の食事は家が残った山側に住んでいる方々が、新鮮な野菜やいちご、そして薪で炊いたご飯などをどんどん運んで下さっていました。また、給水車がいて自衛隊の方が水を汲んで下さるのですが、家の周りの家庭で井戸がある方が、ダンボールなどで簡易の看板をだして下さり、テレビなどでよく見るような行列ができるという光景はあまり見られませんでした。

携帯等の充電が切れていたもので、坂中に行って充電をしました。どなたかの厚意で置いてくださった1台の発電機があり、そこに

次々と蝸足になっているコードで充電させていただきました。常に30~40台くらい充電しているのですが、なかなか電気が入らずとても時間がかかりましたが、充電を待っている間に、知り合いなどと再会する事もあり、お互いの無事を喜びあったりもしました。

3月17日(木)にPHSが何とか使え、会社に連絡。しばらくお休みをいただきました。3月18日(金)の夕方に電気が復旧。それまで夜はろうそくの明かりで過ごしていましたので、片付けまで済ませるために早めに夕食を取っていました。この日も早めに夕食を済ませ、片づけをしていると、カチッと音がして、電気が復旧。その日の部屋の明るさが忘れられません。そして、その晩TVをじっくり見ました。

3月20日(日)に水が復旧。大震災後初めてお風呂に入りました。本当に気持ち良かったです。何日か前に関東の友人との電話で「ずっとお風呂に入っていない」と話したら、水無しで肌を清潔にするスプレーなどを送ってくれたのですが、丁度届いた日からお風呂に入れたので、友人に連絡して避難所に持って行きました。でも、このような気遣いがとても嬉しかったです。

山元町は防災無線も壊れ、電話などの情報網も絶たれてしまい、県等との連絡が全く取れない状態でした。被害状況などがほとんど報道される事無く、町内にいても何の情報も無いので不安と不満が募るばかりでした。その中、高橋厚さんが5年ほど前に山元町にFMを立ち上げようと活動した時に知り合い、友人になっていたFM長岡の方と連絡を取り、支援をいただくことができ山元町の情報を丁

寧に伝えるべく、役場1階の特設スタジオで3月21日(月・祝)「りんごラジオ」放送開始しました。「りんごラジオ」とは山元町の特産である「りんご」と戦後の復興時に国民に勇気と力を与えた「りんごの唄」から命名し、開局からずっとテーマソングにしています。

3月22日(火)家電・PHS復旧。3月24日(木)高橋さんから家電に連絡が入り「何してるんだ。早く来い」と唐突に言われましたが、「車を流されたし、父の車はガソリンが無いので・・・」と言うと「迎えをやるから、とにかく来い」と言われ、役場職員だった方が迎えに来て下さり、その日からFMでのボランティアがはじまりました。この日初めて役場に足を踏み入れましたが、被災者の方、自衛隊の方、役場職員の方など人で溢れ返っていました。役場の中は建物の壊れたものもそのまま、倒れたものを端の方に寄せて業務をしており殺伐とした感じを受けました。FMは朝7時から夕方6時台まで毎時間00分から放送を開始しその後は次の時間まで音楽を流しました。放送内容は山元町の被害状況や情報、水道や電気の復旧状況や給水車のスケジュール、行方不明者の名前、死亡者の名前、義捐金を下さった方の団体等の紹介、開いている病院情報。はじめのうちは歌が入った音楽をかけると「まだ早いんじゃないか？」というご指摘もありましたし、クラシックを多くかけると「歌が入った曲が聞きたい」と言う声もいただきました。開局当時は電気も復旧していないのところも多く、手回しや電池で使えるラジオの聴いて下さる方がとても多かったようです。全国のラジオ局等から沢山のラジオも届き、役場にいらした被災者の

方や、避難所を廻りラジオとイヤフォンを配りました。テレビや通常のラジオでは山元町の情報はほとんど流れないので「給水車の時間は?」「代行バスの運行状況を教えて」等の問い合わせがあり反応が多かったです。

次第に一日のプログラムもできて10時と15時に体操・健康の時間。11時は語り継ぐ私の3月11日。私の津波体験をインタビューして録音し毎日放送しました。初期の段階から海外から来て町内に住んでいる方にも、母国語で山元町の情報が伝わるようにと韓国語・中国語・英語・日本語の4カ国語放送を毎週土曜日13時から放送しました。自衛隊の方にも出演していただき、生でインタビューもしました。家族から遠く離れて、毎日冷食だけを食べて、活動して下さっている姿、そして山元町へのたくさんの温かい激励の言葉に本当に勇気をいただきました。そして、避難所に暮らす子どもたちに出演してもらった時に、今、一番食べたいものは?と聞くと「肉・肉・肉!」とこぼれんばかりの笑顔で大きな声で言ってくれて、周りにいる大人も笑顔になりました。本当に子どもの笑顔には力があります。また、高橋さんのネットワークで県内・県外からもアナウンサーの方がボランティアに来てくださったのですが、神奈川県川崎市のFMのパーソナリティが1週間ほど手伝って下さり、川崎へ帰ってから、川崎FMで山元町の被災状況を放送したら、用具を流されてしまった、スポーツ少年団の野球チームに野球用具一式が送られて来ました。この野球チームは試合のあるごとにりんごラジオに報告をしてくれます。

私は3月28日(月)から平日は仙台の友人

のマンションに泊めてもらい、職場に復帰しました。地下鉄が黒松駅から先がまだ復旧しておらず、黒松から泉中央までは代行バスでの通勤でした。マンションは都市ガスだったので復旧までに1ヶ月ほどかかりました。お風呂が沸かせないので、ポットややかんで卓上コンロで沸かしたお湯で身体を拭いたりしました。また、北海道の友人がマンションでガスが無くても食べられる食料をいろいろと送ってくれて本当に嬉しかったです。ただ、会社に復帰して同僚に再会できたのは嬉しかったのですが、やはり津波の被害を受けた海沿いと内陸に住んでいる方々との温度差を感じました。まだまだ避難所の人たちは1日2食で、不自由な生活を強いられているのに、会社に来るとガソリンがなくて不便とか、パンが食べたいとか・・・話を聞いているのも辛かったです。週末は山元町に帰りりんごラジオに通いました。

4月1日（金）海岸近くの施設にいた祖父の妹にあたるおばさんの火葬。予約が取れたのは山形県の火葬場だったので、そちらで火葬をしていただきました。秋田の友人が連絡をくれて何か必要なものは無いか？と言ってくれたので、家を流された人たちは着の身着のまま逃げたので、着替えはもちろんですが、履き替える靴（特に子ども用）が無くて困っていると伝えました。すると、近所のママ友にも声をかけてくれて、食料品と一緒に6箱も送ってくれました。すぐに避難所へ持って行くと、二次避難する日だったので、区長さんが箱の中身を見てとても喜んで受け取ってくれました。その秋田の友人はその後通学用のヘルメットも集めて送ってくれました。

山元町には早々に大学の情報学会の方々が支援に入って下さっていて、写真の復元を中心に取り組んで下さいました。りんごラジオにもニフティ等と一緒にパソコンを提供して下さいたり、人が足りない時は学生を借り出して下さったりしていました。その方たちの勧めで4月7日（木）りんごラジオブログ開始しました。「りんごラジオ」ブログは多くのアクセスがあり、5月26日で5万アクセス、7月23日で10万アクセスと、ハイペースでアクセス数が伸びています。

しかし4月7日の夜中に仙台の友人のマンションで大きな余震があり、再び停電になりました。少し落ち着いたところだったので、気持ちはドンと落ちてしまいました。翌朝、地下鉄は動いていたので、会社に着くと、また、物が散乱していて呆然としてしまいました。たまたま本社の男性上司が来仙していましたので、先に事務所に入り、大方片付けて下さいました。午後には電気が復旧し、一安心でした。

6月くらいから日青協のボランティアが山元町に来てくれました。また、北海道・東北の友人が会いに来てくれました。被災した自分の町に来てくれることに心から感謝したのと、それ以上にその頃の私は被災地以外の場所で被災地以外の人に会うのがちょっと怖いと感じていました。来てくださった事で、被災地以外の人に会う勇気が出てきたのと、被災地以外の場所へ出かける勇気も出てきたように思います。それを踏まえてご依頼を頂いて8月6～9日長崎へ。6日は前泊で東京に1泊。日青館で神宮の花火を見ました。子ども頃に家族で毎年見ていた志津川（現南三

陸町)の花火を思い出して涙が溢れました。長崎で山元町の被災状況とりんごラジオの活動報告をさせていただきました。震災後初めての遠出で、冷静に話をできるかどうかも不安だったのですが、思った以上に淡々と落ち着いて話すことができ、自分にびっくりしました。ただ、こんなに離れた場所でも心配して、支援をしてくださっている方がいると実感できたことに感謝で一杯になりました。このとき一緒に報告した方に、被災3県の生活とはすぐに結びつかないであろう民芸品などの工房などを助けようと活動して下さった方がいて、被災渦中にいると、毎日の生活に追われ、全く考えもしなかったそのような分野にも救いの手が差し伸べられている事に気付かされ、更に、感謝の気持ちが大きくなりました。

丁度、長崎の平和式典の日だったので、参列させて頂いたり、何年かぶりに原爆祈念館も見学しました。原爆記念館の原爆後の写真と津波後の景色が重なって見えました。また、戦後60年の祈念式典でしたが、今回の震災の祈念行事のようなものが今後行って行けるのだろうか・・・などと考えてしまいました。

あの大地震から1年が過ぎました。とにかくこの1年必死に時間を過ごしてきたという感じです。毎日利用していた駅が流され生活が一変してしまいましたが、できるだけ、深く考えず平常心で・・・というか、今までと変わらないような生活をしているように装っていますが、突然、経験したことのない感情に襲われる事があります。その時はどう対処していいか一瞬戸惑います。

例えば、私の町はとても小さい町ですが、

震災後怖くて一度も行っていない場所がたくさんあります。先日、国道の工事が始まり、渋滞していたので迂回しようと横道にそれたら震災後初めて通った道で、記憶にあった景色と違って、一瞬頭がパニックになり、急に涙が溢れて来ました。1年経って、このような感情に一瞬で襲われるとは思っていなかったのに自分にびっくりしました。このような心の影が潜んでいるのかと怖くなったのと同時に、私以上に大変な思いをした人々の心の中はどうなっているのだろう・・・と考えてしまいました。

自分自身に「忙しくて時間が無いので町内の様々な場所に行けないのだ」と言い訳をしていますが・・・。仕事と災害FMのボランティアで丸々一日お休みをした日はこの1年間で片手ほどの数日しかありません。大変のように感じますが、私にとってはその方が精神的に救われるのです。何もせずに家にいる事は大変な被災をした方に申し訳ないような気になるからです。私自身も車を流され被害があったのですが、それを悲観する事は憚られる感じがするのです。震災後思い出がたくさん詰まった車を流されたというだけでもかなり心が傷ついているのですが、たいてい「車だけなら良かったね」と言われました。もちろん家を流されたり、家族を失った方とは比べる事もできないほどだと思いますが、その言葉に何度となく傷つきました。

年末の12月22日から1月4日までドイツに行きました。20年ほど前から交流があったのですが、今回震災で山元町に義捐金を集めてくれているザールブリュケン市にある教会の財団に直接お礼を言うためです。28日の夕

方に山元町デーということで報告会を開いて頂きました。被災状況の報告をさせていただき、お礼の気持ちを込めて、日本の五円を一人一人に配らせて頂きました。五円と御縁の意味も説明して渡すととても喜んでくれました。そして「忘れかけていたけれど、まだあなたの町は大変な状態が続いているんですね。これからも応援します。頑張ってください」とたくさんの方に励ましの言葉を頂きました。

また、私がお世話になっている立子・ウォイガードさん夫婦がお世話したコソボ難民の方が、震災後2日後に黒服を着て、「あなたの母国が大変な事になっているので使ってください」と義捐金を届けてくれたそうです。ドイツに住んで、朝4時ぐらいから夜遅くまで安い時給で働いているという事です。それなのに、その方たちにとっては多額のお金を届けてくれたのです。私はその方のうちに直接お礼に行くと、とても喜んでくれて、今度は夕飯に招待していただきました。夕飯に行くと、心を込めたコソボ料理を準備してくれていました。そしてコソボで目の前で家族が殺されたり、たくさんの爆弾が落ちてきたなどの大変な経験を話してくれ、だからこそ、今回の震災で心が傷ついた皆さんの気持ちが良く分かると話してくれました。

それから、隣町の角田市出身でフランクフルト在住・ルフトハンザ航空に勤めている方が、山元町に何度もボランティアに来てくれました。あまりの震災の大きさに、いてもたってもいられなくなり、お休みを取ってボランティアに来てくださり、ルフトハンザ航空にもお願いして、フランクフルトで街頭募金をして下ったそうです。ドイツでは街頭募金

はめったに無いようで、集まるかどうか心配だったが、震災のニュースは衝撃だったようで、たくさんの方が来てくれたそうです。その中に、街のくず集めをして生計を立てているおじいさんが、手のひらにコインを握り締めて来てくれたそうです。「これは僕にできる精一杯の気持ちです。少ないかも知れませんが、今日一日働いてもらった賃金の全てです。日本の皆さんに届けて下さい」というお話を聞きました。本当にたくさんの善意を頂いているんだなあと感じます。

なかなかメディア等で紹介される事が少ない「山元町」ですが、その山元町をめざして全国各地からボランティアに来てくださる方もたくさんいます。今まで、山元町の知名度は全くなく観光に来る人はほとんどなかったので、このような形ですが、山元町に来てくださる方がいるという事に感謝しても感謝しきれません。復興までにはまだまだ時間がかかると思われますが、これからも一日一日大切に過ごしたいと思います。

(元・日本青年団協議会副会長)



りんごラジオで発信する齋藤緑さん(右)

---

## 東日本大震災以後の行動記録と感じたこと

会津若松市 吉田 恵三

---

2011年3月11日、私は、勤務先である会津若松市役所にいた。午後2時46分、携帯電話からの災害情報を知らせる音が激しく響いたと同時に、震度6弱の激しい揺れがはじまった。揺れは、その後も断続的に続き、職場内の書籍や資料が散乱した。私はすぐに職場の同僚に、外履きに履き替えること、防寒具を羽織るよう声をかけ、屋外への避難を指示した。携帯電話が不通になったが、固定電話は使用できたので、日青協事務局や家族へ連絡し無事を伝えた。日青協田中局長より、直ちにホームページ上に全国の仲間と情報交換できる場の設定の申し出があったので、その方針で情報収集するようお願いをした。携帯電話はこの後数日間使えなくなった。不便を感じたものの、災害時に携帯電話は役に立たない現実も知った。固定電話でも「ヒカリ」電話は、数日間不通だった。

地震後に市役所は閉庁となったが、この地震で市内でも停電、断水世帯が発生したので、直ちに避難所の設置が決定され、私は避難所へ毛布や食糧を届ける役割を担い、深夜まで救援活動に従事した。救援活動に従事していたため、全国の被害状況が分からず、帰宅してからテレビをみて愕然とした。福島、岩手、宮城などの海岸線沿いの津波被害、福島県内の原子力発電所の危険を知らせるニュースに見入ってしまい、住民や青年団の仲間の安否

が気遣われたが連絡がつかず、いっそう不安にかられた。翌日、不安は現実になり、福島県浜通りの原子力発電所周辺市町村の住民は、避難を始めた。県団で共に活動した仲間からも公衆電話から連絡があり、県団事務所のある会館に一次的に避難したという知らせを受けた（その後、秋田や埼玉に避難したという連絡を受けた）。その後、会津若松市にも市外の住民のための避難所が開設され、私自身も

5月上旬まで、避難所での救援活動を行った。また、日青新聞でお知らせしたとおり、私は、日青協会長として全国から寄せられた義援金を青森県・岩手県・宮城県・福島県（直接手渡しはこの3県）・茨城県・千葉県の各県団に20万円ずつ配布し、以後寄せられた義援金も含めて残りについては、今後の復興の様子をみながら最も必要と思われる県に配布していくことを決定した。

まず、震災から一ヶ月を迎えた4月11日に、福島県団の渡辺直也会長とともに岩手県の陸前高田市と大槌町を視察に訪れた。自衛隊の隊員らとともにガソリンの給油作業を行っている岩手県団の泉田将治会長のもとを訪問し、被災状況の報告を受けた。泉田会長からは「落ち着くまでにはかなりの時間を要し、県の青年大会や全国青年大会への参加は難しいかもしれないが、県団の再生に向けて取り組んでいきたい」とお話しいただいた。

この後、市内の避難所となっている米崎小学校にいる岩手県団常任理事の橋詰琢見さんと面会。橋詰さんは避難所の運営管理責任者の1人として、自らも避難所生活を送りながら地域支援や夜警に奔走していた。避難所の

責任者の方からは、これまでの日青協はじめ青年団の皆さんからの支援に感謝の言葉をいただきました。

続いて訪れた大槌町では、役場機能がある城山中央公民館を訪問。あいにく副町長は不在であったが、対応して下さった生涯学習課長兼中央公民館長の佐々木健さんからは「復興にあたっては、是非とも青年団の皆さんにご協力いただきたい」といったお話を伺った。

4月16日には、青森県でも特に被害が大きかった八戸市を訪れた。成田豊日青協常任理事をはじめ、青森県団の川井若奈会長ら県団役員が出迎えてくれ、漁船の被害が大きかった海岸線沿いの地域を重点的に視察した。

4月17日には、宮城県団の伊藤治彦会長（当時）らとともに、震災により自宅と車、職場を流されてしまった県団役員がいる気仙沼市本吉町を視察した。「電気がやっと復旧したものの水道が復旧しておらず、給水車により水を確保している。お風呂も自衛隊が用意した浴槽で、時間制限付きで入れるのみ」と、いまだ大変厳しい環境での生活を強いられていた。そして、南三陸町へも足を運び、全国青年大会に出場した野球チームの監督と面会した。「全国青年大会には出場したいが、ユニホームがないなど課題もある」とのことだった。

6月には岩手県団の再スタートとなる定期総会に臨席し、そして大槌町の加藤国雄さんのもとへ足を運んだ。悲しい対面だった。何故加藤さんが・・・という思いでいっぱいになった。加藤さんは最後の最後まで住民への避難誘導を行ったとお聞きした。人間として

これ以上立派な人はいない。真似できない。私は勿論、加藤さんを一生忘れない。そしてありがとうという言葉を送り続けたい。

今回、被災地を見て改めて支援活動について考えたが、私たちがしたくてもできないこともあり、また、今すぐに人手がいるという状況ではないところもあるということを教えられた。今後の支援活動については、まずは自分自身や地域が日常生活を取り戻しつつ、被災地からの要望などを的確に捉え、できることから、できる範囲で行動していくことが大切であると考えた。

私のやれる範囲での、やれることとして、日青協会長退任以降、私は、5月～7月にかけて3回、日青協からの義援金を含めて、福島県団とともに、チャリティ寄席の開催などにより義援金を募り、福島県庁、地方新聞社、会津若松市役所などへの寄付活動を行った。また、沖縄県団の呼びかけによるエイサー祭りへのいわき市青年団の「じゃんがら念仏踊り」の参加支援などを行ない、自分自身も沖縄でのエイサー祭りを見た。沖縄県民に福島県民の元気な姿を、青年団を通じて見ていただけたと感じた。

また地元においては、近所のお父さん方と協力しながら、放射線量の計測器を借りて子どもたちの通学路や遊び場を中心として計測して安全を確認し、PTA会長を務める地元小学校の校庭の土砂の入替え作業なども多くの保護者とともにいった。

まもなく震災から1年が過ぎようとしている。失われたものは単に形に見えるものだけではなかった。自宅を追われた人々の無念さ、家族、友人知人と離れ離れになった人々、伝

続行事の中止、伝統芸能の担い手の消失など、被害は止まることはない。地域住民の中には、もう震災を忘れかけている人もいる。

原発周辺の住民だった人々は、未だに、どんな状況下でも自宅に帰りたいと叫んでいる。自宅のみならず地域に帰りたいのだろう。地域のあんな顔、様々な顔に会いたいのだろう。でも今は戻れない。いや永遠に戻れないかもしれない。避難されている人々は今こそ、故郷の、住み慣れた地域の大切さを噛み締めているはずである。

私のまわりでも、こうした経験から改めて地域や仲間との集団活動、協力することの大切さを見つめ直した人々もいた。お互いを尊重しつつ、協力しあうことの大切さ……同世代のお父さんやお母さん方との定期的な集まりや会合が増え、集まった大人で何がしかの地域で活動しながら（地域貢献したい！という思いが強い）楽しく生活していけないか、という意見も出されている。

今回の震災で色々と考えさせられた。政治の無力さ、これは政治家すべてが悪いとは思っていないが大震災に対する対応策や支援システムを構築してこなかったこれまでの私たちも反省しなければならない。そして英知を結集して、今すぐに脱・原発に向けエネルギー政策を見直すべきである。

地域では今こそ、地域の大人や青年、子どもが集まって、地域の伝統や大切なモノを引き継いでいく仕組みを創り上げるべきである。大災害に対する対応策を話し合うべきである。そのためにも、地域において大人、青年、子どもたちの果たす役割分担を決めておくこともいいのではないだろうか。

最後に、一番大切なことは、住んでいる地域で自分自身の居場所を見つけ、1人で行動するのではなく、大勢の人々と行動をともにしていくという意識を自分自身の中に持つことだと思う。1人では何もできない。しかし何人か集まれば何かできる。人間は変わることができる。意識を変えることができる。自分自身そうした意識を強く持つことで、きっと地域も自分自身も良い方向に変わっていくと思う。

私も、できることを、できる範囲で、これからも大勢の人々とともに行動していきたい。

(前・日本青年団協議会会長)



宮城県団伊藤団長（当時、右）に義援金を贈呈する吉田恵三さん（左）



























## 第2章 支援の記録

東日本大震災に直面した全国各地域の青年団は、この一年間、様々な取り組みを模索し展開してきた。それらの中から本章では、石川県青年団協議会、大阪府岸和田市青年団協議会・泉佐野市青年団協議会、岡山県青年団協議会の活動を、主に関係者へのインタビューを通して紹介する。今号は、諸般の事情により、これら3県4団体に限定せざるをえなかったが、その他の多くの地域においても、現在多様な実践が展開されており、また今後も行われることだろう。これらの取り組みに対しては、今後も継続的に注目していきたい。

(編集委)

## 石川県青年団協議会

語りて：石井昌志(会長)、宮義一(副会長)、細川真嗣(事務局長)、酒井学(常任理事)、竹内瀨宣(局長)き  
きて：辻智子、板本加奈子

——2011年3月11日の地震の時は？

石井 仕事をしていて、地震というより眩暈がしたって感じ。でも電灯が揺れてるのを見て、これは地震なんだって初めてわかった。阪神・淡路大震災の時も揺れとるんで、ここでこれだけ揺れてるってことは、他にでかいところがあるのか？と。5年前の能登半島地震のことが頭をよぎった。

——仕事で被災地に入られたんですね。

石井 でかい災害だとわかった時に、病院からは緊急医療派遣っていうのがあるんですけど、うちの場合、そんなにでかい病院じゃないんで、そういうことはないだろうと思ってました。ある程度、時間がたって、最初の部隊が行って、帰って、その二次支援、三次支援で、こういう小さい病院が行くっていうのがあって、そういうのはあるのかなと思って、普通に土日をごしてました。でも、15日になって、福島原発が爆発して、私、被曝担当をしないとるもんで、単なる事務職なんですけど。もともと原発の近くの病院はそういうチームを持つというのがあって、だから、でかい病院だからとかじゃなくて、原発の近くの病院だからあるんです。石川県でも3箇所しかないです。志賀原発のまわりの3つの病院が持ってるんです。それで石川県の方から、緊急被曝の医療の方で行ってくれと。

——日頃から被曝については研修なども？

石井 何回もしてます。志賀原発で事故が起こって誰かが被曝したとして、その患者

さんを受け入れる準備をする。ブルーシートを全部に貼って、それごと全部処分するとか。もともと原発で何かあった時の対応っていうのをやってた。でも、他所に行くと、それをやるっていうのは想定してなくて。はっきり言えば、一生、それを使うことはないと思ってました。原発の安全神話を信じてましたから。

——県から職場への要請で福島への派遣の話がきたんですね。

石井 14日の朝、県から連絡があって、派遣できるならもう出てほしいって。でも、まだ派遣の準備をしてないのと、被災の状況がでかすぎるっていうのがあって、能登半島震災と新潟の震災にも行くとるんですけど、直後の派遣チームには入ってないんですね。準備が全然できてない。テントもない、寝袋もない。災害派遣で行って迷惑かけられないんで、すべてのアイテムは自分で持っていくんですけど備蓄がなかった。急いでかき集めるという状況で、例えば、車もないから、レンタカー屋に電話したら「何に使われますか」って言われたんで、「被災地に行きます」って言ったら、「じゃ、貸せません」って言われました。貸したら、ちゃんと返してくれるか分からないからってことだと思います。ああ、そういうところもあるんやな、と恨みに思いました。逆に、テントとか、寝袋とか、山系のグッズ作ってる会社に電話して、今から被災地に行きたいんですけど準備してもらおうことできるかって言ったら、地元には流通用の倉庫だけ

があって、通常は、そこでは販売も何もできないとこなんですけど、そこからモノを持って行っていいって、そこでお金も払って、そこで何でも出来るように、こっちで手配するから、ほしいものあったら持ってってくれって。会社によって対応がぜんぜん違うんです。「ノー」って言うところもあるし、でも「イエス」って言うところもある会社もある。マニュアルの怖さかなと。マニュアルで考えてる人はそういう時に対応できない。

——結局、いつ福島へ？

石井 県も混乱してて、14日の朝は行けって言われたんです。でもその夕方には、行かなくていいって言われたんです。今度は被災した人が逃げてくるからって。石川県に入ってくるから、その人らをチェックしてほしいって。我々は県の指示で動くって決ってるんですよ。広域災害になると、県の対応に従わないと、皆がバラバラな対応をしてしまうんで、県のルールにのっとってやります。

でも絶対、これは行くことになるからモノを買う準備は全部させてくれと上司に言いました。今の状況で行かなくていいとは思えない。それで、次の日になって原発4号機の頭がドーンとふっとんで、出てくださって県からまた連絡が入った。やっばり、と。準備できたらすぐに行ってほしいって話だったんで、15日の朝に運転手、医者、放射線技師、看護師の4人で出ました。

——福島では何を？

石井 運転手と記録をとる仕事で。福島と

か、郡山とか、いろんな場所に行って、サーベイをやってきてくれてってことで。

最初は、西郷村に入った。そこは田舎で逃げてきた人はほとんどいない。何を中心にやっと思ったかという消防団ですね。結局、人を見て回ってる人らが、外でどうしても活動してるもんで、被曝しているかって心配な人が多い。機械で計ってあげて、「大丈夫や」って。「それなら安心してまた活動してくるわ」って。緊急性はないんです。被曝ですぐ危ない人なんていないです。いないってことを確認に行ってるんです。全員大丈夫ですって言いに行ってるだけ。

その時で、線量の高い人が1人か2人くらい。実際、計ってる機械の一番マックスのメモリに合わせて、ふりきったところで、実際はたいしたことないんです。でも、ピーって鳴るんで、「びっくり！」みたいになるんですけど。家に帰って、服を洗ってっていう程度。服が気に入ってたら家に帰って洗濯してって、たいして気に入ってない服だったら、そのままゴミ箱に捨てればいっていいくらい。

——日青協の掲示板にも書いてますね。

石井 そこで伝えたかったことは、ただ一つ。行ったからとか、現地の状況が、ってことよりも、青年団で、すごい大事なことなんですけど、経験とか、自分の目で、見たり聴いたり考えたりしなきゃ意味がない人が、テレビのマスコミに踊らされてるってというのは、馬鹿馬鹿しすぎる。当時、テレビで東電の批判ばかりだったんです。でも、現地で命懸けてるのは自衛隊と東電の職員。もうやらんって東電の人らが逃げ

たら、もう爆発するしかない状況。それをテレビの向こうの平和な人が、こたつに入りながら批判してる、そんなやつらにはなるなよ、あほらしいって。それが言いたくて、掲示板に書いたんです。やってもないのに人を批判するなよって。

——福島にはどれくらいいたの？

**石井** 2泊3日って決まってる。その間、いろんな場所に行って同じようなサーベイをしました。うちら防護服とか何にも着ないで最初の日はやってたんです。着る必要がないので。それで2日目に行ったら、その人がみんな防護服を着てるんです。「なんで着てるんですか」って聞いたら、「いや、なんかわからんけど、こわいから」って言われた。その人は市役所の人だったもんで「着なくていいんですか？」って逆に聞かれた。そんなの何の役にもたたないと思ったけど、寒いから着るかって着ました。着る必要はまったくないってわかってるんですけど。ただ、相手からくっつけられた時の被曝は防げる。焼き肉のエプロンと一緒に。その時、我々、政府の人間と思われるんで、インチキしとるんじゃないかと言われました。機械のメーターをめいっぱいにして、実はすごい被曝しとるんやけど、全然出てないように、機械いじってやっとるんじゃないかって言われました。郡山のでっかい避難所で、何百人も避難して来てる、その人らをずっとやりつづけるなかで、そういうことと言われるたびに、「危なかったら僕らはいません」と言いました。うちら一番よくわかってるつもりなんで、「この場が被曝がすごいうって環境なら、私らが一番先に逃げますよ。うちらが計っとる間は安全です

よ」って。「あー、なるほど、なるほど」って。そしたら、すごい安心して。人としゃべるから安心してくれる。政府の発表では安心しない。

——証明書の話もありましたね。

**石井** 差別の問題なんですけど現地の避難所がたくさんできた時、被曝してないことを証明する証明書がないと避難所に入れなくて問題があった。うちら、一番最前線にいたはずなのに証明書ないんです。そんなの発行してなかったんです。必要だとも思ってなかったし。その日の夕方の報告会で、ある避難所で証明書がなくて避難所に入れてくれないという事態が発生していますって言われた。証明書？誰もつくってないけど？って話になったけど、そういう状態じゃない。急いで一万枚、県庁で印刷して、次の日からばらまいた。証明書を発行してる時、書類に住所も書いてもらうんですけど、子どもが自分で住所を書いたら、おかあさんが「そんな住所書いたって、もうそこに家も何もないのに」って言ってました。普通に、そういう会話。今、避難しとる場所の住所を書かんとだめやろって。それがないと病院にもかかれないうって。

——細川さんも仕事で被災地に。

**細川** 医療班で。普段は医療事務です。新潟の時も行ってますし。日本赤十字病院なので。今回は、私、最後の最後だったんで、夏前でした。うちの病院の事務は全員、出とるもんで。地震がおきて、もう半日後には第一班は出てました。その人らが帰って来て、次が行く、そして次、と、だんだん期間を置いて行った。日赤は石巻日赤が拠

点で、そこで5日間。

——現地では何を？

細川 雄勝エリアに唯一残ってた市立病院が津波でやられて、橋を渡って向こうに診療所があったんですけど橋が落ちてしまったもんで、雄勝エリアには医者がおらん状態になっている。そこを巡回してみなくて。それで、そこを主に回った形ですね。雄勝エリアの拠点になってるところに毎日、石巻から行って。あとスポット診療です。今日はこのエリア、あそこのエリア、あそこの避難所行って。ドクターとナースと連れて行って運転手をしました。おじいちゃん、おばあちゃんが多かったです。若い人も車の運転できる人は来てない。仕事も普通にしてますし。もう時期も時期なんで。薬がごっちゃになっていたり。慢性的な疾患の人ばかりなんで。薬なくなったりとか。この時期は健康診断みたいな往診で、おじいちゃん、今日、元気？みたいな感じでした。

——他に被災地に行ったメンバーは？

酒井 自分は24時間テレビのスタッフ、中部地区のまとめところでボランティアして、地震の一週間後ぐらいに、向こうの24時間テレビの東北ブロックの人間に、「何、ほしい？」って聞いた。とりあえず、被災地に行って、一番大事なの、食べ物もそうやけど、いろんなどで炊き出しやったり、作りおきしても、今日、つくったもの、今日はけてしまわないと腐るので、じゃ、電池持って行くわって。電池あれば暖も取れるし、何でも使えるわって。その時、だ

いたい24時間テレビのその年の予算の少し、余らせて何かあった時に災害とかにいつも回しとるんですけど、それで電池を1万個くらい持って行って。被災地に行ったら行ったで、子どもたちは子ども達で、テレビもなければゲームもできんし、かといって外で遊べる環境でもないんで、ちょっとケアするようなレクリエーションやったりして、その日のうちに、行ってすぐ帰ってくるって感じでした。24時間テレビの本部の方からも義援金を送っとるんですけど、それは決めるまでに、時間がかかって対応が遅いので、そんなの待とれんわって行って中部は中部で先に送ることに。120万くらい。

——県内の青年団や石川県青年団協議会としては？

石井 3月18日か19日あたりに各加盟団に義援金の募集をした。志賀町とかは子どもら呼びかけて街頭募金もやってた。ショッピングセンターの前で、すごいいっぱい集めてましたね。それを5月の日青協の定期大会に持っていった。



志賀町での義援金活動の様子

——過去の災害への支援活動の経験が、直接かかわってなくても、ある程度あるんですね。

酒井 口蹄疫、浅野川の災害。

石井 覚えてないくらい。何かあったら何かをするってあたりまえなので。県内から県内に、県外もある。まずできることは募金。その後、それからできることを考える。

細川 先輩だと福井地震<sup>i</sup>、ナホトカ<sup>ii</sup>。

石井 福井の地震の時、青年団は歩いて被災地に入った。県境を渡れなかったから、すぐに県庁にかけあって、お前ら、青年団を止めるってどういうことやって。おれらが手伝いに行きたいのに、お前らがなんで止めるんだって。それでゲートこじあけて。リアカーで、徒歩で、助けに行ったら話。それが青年団の最初やし、あたりまえやし。能登震災もそうだったんですけど、阪神の震災も、青年団ぬきに助けたっていうのがあから、その人らが能登沖の時にも来てくれて。だから、お互いに、あの時、助けてくれたから、今回って。前に受けた恩があるから。それをずっと繰り返したる気がします。

——県団としての取り組みは？

石井 青研（第57回）<sup>iii</sup>です。県団副会長の彼が、最初に言ったんです。震災直後、今は、みんな盛り上がってるから、みんなやるやろうけど、青年団の活動ってのは、ずっとやねんから、一年後とか、時間が経った時に、現地の人を呼んで、その話をして、ずっと忘れんとおるべきやって。彼が言ったんです。あの時、あの場で、いろんなものが足りなくて、何かしなきゃいかん、今、何ができるって言うときに、何年後

かまでずっとやらないかんから、一年後に皆がテンション下がった時に、継続でやろうって話をしだした。彼が青研担当で、そういう考えでやるべきやって言ったんです。おー、まともなこと言った、と思って。ほんとや！みたいな。それがあって、今回の1月の県青研までいくんです。加藤国雄さんの話は石川県の定期大会の時にも、何かあるたびにしてて。遠い話じゃないよ、青年団で同じ一緒にやるとる仲間が、そこで犠牲になつとるよって話を。近いってこと、遠い話じゃないって思ってほしかったんで。

——具体的な企画はいつ頃から？

石井 11月には山田美香さん(宮城、元日青協副会長)に頼む話になつとった。11月の終わりか12月の頭に、県団の役員会で、「山田さんに講師で来てもらうんなら、こっちから出向くのが筋やろが」って言ったんです。何も深く考えずに。そしたら、その日の夜に、義一(副会長)から電話かかってきて、17~18日に行きませんか。まじで？って。ほんとに行くの？って。

——宮城に行ってみて、どうでした？

石井 山田さんと合流して、仙台市宮城野区の実家に連れてってもらった。お父さん、お母さんに、その時のいろんな話きいた。その町に入ったら2軒くらいしか家が建ってなかった。ほとんど流されてしまった。よく、その家、残ったなって。弟さんが消防団しとって、当日、皆を避難させとったら、「おまえん家の、おとん、おかん、逃げてねえぞ」って言われて、家にバーって走ってって、そしたら、こっちから津波がもう見えとるなかで。急いで腰まで水につか

りながら2階に上げて。その地区の人、58人のうち半分以上が亡くなった。それから、その家を直して、そこに住み続けた。

**細川** 家のひさしの裏も砂だらけだった。

**石井** やっぱり現地みてから、話を聞くと、ぜんぜん違う。写真とかテレビで見るとも違うし、現実が近い。すごく近かった。山田さんの話で、当日、2階に逃げて、お父さん、お母さんと、弟さんと、もう水が上まであがってきとって、やっぱりもうだめかなって時に、3人して、体を縛った。見つかる時は一緒に見つかるようにって体を縛って、その日を耐えたって話きいて、ガンと来ますわ、ほんとに。テレビとは違う。すごい、くるなと思って。そういう話きけたの、ありがたい。さっきの話とっしょで、現地を見る、経験すること。山田さんちは、最初から最後までずっと避難所に入らなかったんです。最初から最後まで。それで、すごい差別されたって話してました。避難所の人には食べ物もあたるし、ものもあたるけど、あんたら家ある人らはここに来るなって言われたって。

——1月の県青研、当日はどうでした？

**石井** 人が多かった。青年団員以外に一般の人やボランティアの人らも来てくれた。

仕事辞めて被災地にボランティアに行ってしまった青年団員も来てくれた。彼女は、現地に入るのに丸坊主にして入った。そんなキャラやったっけ？って驚いた。彼女が、一緒にボランティア活動やっとする仲間を連れてきてくれた。だから、当日、その人にもしゃべってもらった。

——最後に、今後の展望や課題を。

**宮** まだ考えてない。話、集約して、今までにないことなんで、ほんとに。全国の皆がほんとに何をするのか、うわべじゃなくて、かっこつけじゃなくて、ほんとに何をしていくのかってこと。

**石井** こっからやねん。みんな流行らなくなってからやらないと。それが、どういったらいいのかな、やるのは当たり前なんだけど、何をやるかって言われると。みんなして被災地行けばいいよねって思うけど。バス借りて。今年度でも。バスツアー。

——どうもありがとうございました。

※これは2011年1月21日に行ったききとりをもとに再構成したものである(編集委)。

<sup>i</sup> 1948(昭和23)年6月28日、福井地震。マグニチュード7.1、死者3,769人。福井市で震度6。

<sup>ii</sup> 1997(平成9)年1月2日、ロシア船籍タンカー「ナホトカ号」が沈没・座礁して、重油が多量に流出。

<sup>iii</sup> 2012(平成24)年1月14日～15日、第57回石川県青年問題研究集会(石川県青少年総合研修センター)。第一部「県内市町村青年団協議会の活動報告」、第二部「東日本大震災の今とこれから」。第二部の講師は山田美香さん(宮城県在住、元日本青年団協議会副会長)。「東日本大震災体験談から今何ができるかを考える」との内容で行われた。

## 大阪府岸和田市青年団協議会・泉佐野市青年団協議会

語りて：塚本浩司（岸和田市青年団協議会顧問）、西野茂（泉佐野市青年団協議会会長）

ききて：辻智子、鳥澤文彦

——2012年3月11日は？

**塚本** 仕事してました。テレビで「あ、地震あったんやな」って。揺れたのも知らなかったの。気がつかなかった。テレビ見たら、えらいたいへんなことになってるなって。津波くる？きいへん？って言ってて、そのうち津波の映像がダイレクトに流れて。和歌山に津波が来る、来ないってのが、バンバン入って。テレビでは、車がおもちゃみたいに流されとったから、これはえらいことになってる、すごいことになってるんやなって。

——震災後、生活や仕事に変化は？

**塚本** 個人的に一番影響あったのは、たばこ。入ってきいへんかった。自分がダイレクトに感じたのは、たばこのフィルターは東北の方で作ってるの。スーパーでは、水、お茶、一人一本って、よう買われへんかった。僕、仕事で飲料関係もやとるんですけど、工場が東北の方にかたまっとるんです。自販機の仕事もしとるんですけど、限られた商品だけになったって影響もあったんですよ。

**西野** 節電すごかったです。コンビニとか、国道沿いの看板のネオンが全部消えてました。パチンコ屋も消えてました。いつも走る道がすごく暗かった。あと、さつまいもがなかった。買いに行ったんですけどね、宮城に送るのに。スーパー3～4軒回って、やっと。

——地震や災害に対しては？

**塚本** うちの泉州地域って災害が少ない

ところなんです。台風も地震もこーへん。

**西野** （湾が）入り込んでるんで。津波が来たとしても、こっから波はこーへんとか言われてる。でも防災について、今、もう常に話しあってますね。そればかりですね。今、取り組もうとしているのが各町での避難訓練。青年団が主となって、町会に言うて。やっぱり、そこが一番大事やと。自分が生き残らんかぎり、自分の町を助けることもできへんし、そのあとの活動につながっていくであろうから。必ず、自分を守らなあかんぞって意識を、まず。家の中でも、必ず、どこに逃げたらええとか、やっぱり家の中でもそういうのを話し合うべきやろうって。そういう身近なところから始めていこうって、青年団でも話してます。東南海地震が近々くるって、常に思ってます。

——青年団の動きは？＜岸和田＞

**塚本** 2日後の3月13日に岸和田のホールで、うち主催のイベントするんやけど、それを中止にするか、せえへんかって話でたいへんでした。予算を結構とって、寄付もいただいているイベントやったんで。郷土文化の継承で、青年を中心にしたイベントやから、最終的に実行委員で寄った時に、こういう大阪府下の祭りを中心に地域と地域の絆をやってるんですよって、震災にも役に立つやろうってことで、救国祈念ってことで組み替えてやりました。だから、はじめに安全祈願。僕ら、祭りイコール神事なんで。救国祈願ってこと

で一発目舞台でやってもろて、募金箱を設置して。そういう内容に変えつつ、こういう時だからこそ、若い子は、かたまっていかなあかんやろって、ちょっと変えて。物は言いようやないかって言われたら、そこまでの話なんやけど、ちょっと方向性を変えてやったんですよ。「決起集会や！」みたいな感じで。こんな時ほど、なんかエネルギーちゅうか、力を与えたるような形でもっていききたいなって。行政も巻き込んで。例年通り 3000~5000 人が集った。

——その後、被災地に？<岸和田>

**塚本** 当初、11 の校区で募金活動を展開しました。募金箱を渡して。青年団、むちゃくちゃするから無理に集めんようになって。募金って、実際どのように使われてるかっていうのも、ごっついぼやっとしとるやない。結局、大きいとこの受け皿に持って行くと、僕らみたいな若手のところにまで届くかなってところもあったから、じゃ、自分らで現地に持って行こうって言うたんです。役員で持っていこうかって考えた。でも、あの時って、飛行機は定価しかないし、特割もないし、結局、往復一人 10 万くらいかかるなって。10 万かかるんやったら、3 人で行ったら 30 万円かかる。30 万やったらバスで行けるでって話になった。せやったら、バス一台借りて、若い子ら連れてって、がれき撤去やったりとか。僕、山田美香さん（宮城、元日青協副会長）に言われたのは、とりあえず現地を見てほしいと。見てもらった上で、何ができるか、もういっぺん、持って帰ってくれっていうことを言われたから。なら、うちの若い子らみん

な連れてくわって。1 回目のボランティア派遣は、震災 2 ヶ月後の 5 月（5 月 13~15 日、参加者 35 人）。まだホットな時。バス 2 台 3 台で行かなあかんって。でも、とりあえず 1 台で先発隊で行こうっていうのがうちの団長の主旨やった。実際に行ってみて継続してどうするかっていうのを決めようと。だから 1 回目は、ちゃんと申込期間どおりに出してきた子を優先して人数を限定して入った。11 校区の連合（町単位の青年団）から 1 人か 2 人出て、出られへんところはこれします、って。

——じゃ、帰って来て報告会をして。

**塚本** そう。各連合にも持って帰って、そこで 1 回目のこのレポート<sup>i</sup>、全部渡して、こんなことやってきたって。

——お金はどうしたんですか？

**塚本** 岸和田市青年団協議会 60 周年事業に向けて積み立てしとったんやけど、1 回目は、その積み立てを崩して交通費に当てた。それで若い子らみんな連れて行こうって。2 回目は会費 1 万円とって行った。市役所の人からカンパももらったりしてね。



岸和田市青協のボランティア活動の様子

——それにしても、バスを借りて、これだけの人数が行くって準備とか大変でしょう？

**塚本** うちの場合、青年団のなかに観光会社の人がおったん。自分が旅行の営業しとるか

ら、段取りがええの。自分でパパパパって動いて、そういうノウハウを持ってるやん。バス用意しました、バスは何時間かかります、お金はどのくらい、往復どのくらいかかって経費も全部出せるやん。仕事の延長でできるやん。だから、人だけ紹介して、人間つないだから、後は、頼んだ、おまえ、それと話し合っつけて。

——現地での行動はどうやって決めたの？

**塚本** 現地での受け入れは、山田さんと宮城の県団、あとボランティアセンター。岸和田のボランティアセンターが気仙沼に派遣されとった。だから、岸和田の地元のボランティアセンターから気仙沼のボランティアセンターに紹介してもらった。岸和田のボランティアセンターのスタッフが向こうにも入ってるの。宿泊も考えないとあかん。バスで17時間もかけて行って、バスで寝て、体崩して帰ってきたらあかんから、雑魚寝でもかまわんからって、宮城の青年会館に泊まった。

——それで1回目は気仙沼に。〈岸和田〉

**塚本** 土曜日の朝に着くっていったんやけど、バスが思うように進めへんかって、結局、11時頃、着いたの。ボランティアセンターのボランティアって3時か4時くらいまでだから、それで、おまえら今から飯食ってゆっくりやってたら何しに来たかわからんようになるぞって。それで、飯ぬきでかまへんかって若い子に一回聞いた。そしたら、若い子らが、もう着替え出して、「やるよー」って言うた。

ほな、死ぬ気でしょかって。

——若い子たちって何歳？

**塚本** 20代前半。10代の子、高校生もいましたよ。僕らも青年団やねんけど、(岸和田

市青年団協議会というのは)上の組織。16歳、高校1年生から27歳までで青年団は終わるやねん。祭りの組織も一緒になってるから。祭りの組織が青年団で、その上に団体が一つ、そのまた上にもう一つ団体があるって形。

——その若い子たちは、自らすすんで？

**塚本** 行く、行く、行く、ってなったんですよ。はじめは、あかんかなと思ったんですよ。やってみて思ったけど、「行かな、あかん」

「何かせなあかん」って言う人間は多いんですよ。せやけど、いざ、行動に移す人間は半分以下になる。だから、一回行った人間は、(他の人に)行けって言うんです。一回行くと、やっぱり、すごいな、続けていかなあかん、ってなる。行こうと思ってても予定あわへんとかで結局、行かないと、ちょっと他人事になってしまう。行った方が絶対に動きやすい。みんな、やらなあかんって思うてるのは思うてるけど、体を動かす人間って、実際、何かきっかけがなかったら、よう動かさんって思う。

——2回目(2012年1月22~23日)は南三陸でボランティア活動をした後、陸上自衛隊東北方面隊仙台駐屯地に行ってますね。

**塚本** 受け入れは、どたばたでなかなか決まりへんかった。はじめ福島刑務所、ごっついマンモス刑務所に慰問に来てくれって話になった。刑務所のえらいさんが岸和田出身の人やねん。それで「来てくれ、来てくれ、ぜひ来てくれ」って言われたんやけど土日で職員がいないから、やりきれへんって言われて、どないする、どないするってなった。それで自衛隊に。なんで自衛隊に慰問に行くか

っていったら、みんな長渕剛に影響されて。あれは、すごいと。多いねん、長渕、好きなやつが。あれは負けてられへんなって。そこに一発目に来たのが GLAY、二発目がチャゲ&飛鳥、ほんで三発目がおれらや。ごっついアイドル、高いないかい、おまえって。

——そこで、だんじりをやった。

**塚本** だんじりの太鼓も小さいのを借りて全部持ってった。全部で半時間強くらい演奏をした。

——今後のことは？<岸和田>

**塚本** まだ被災地はこんな状態や。これからどないしてくか、3月にまた募金もするから、これをどないするかってとこなんですな。地元のローカルなマスコミは結構とりあげてくれた。僕ら2回とも撮影された。そうすると、ちょっとわいてくるやん。ほう、青年団、そんなことやったんかって。ほんで、今、次の第3弾をせなあかんって考えてる道中や。

——泉佐野の方も募金活動から始めたんですよね。<泉佐野>

**西野** まず地震あったその日に、3月20日の国際交流フェスタ<sup>4</sup>は中止と連絡した。音楽のフェスタで、外国の人らがいっぱい寄ってきて、どんちゃか、どんちゃかってするフェスタなんで、これはどうやろ、と。行政からは、最初、中止にするのは難しいって話もでたんです。行政も含めていろんな団体がいっぱい入ってきてる事業で、フリーマーケットとかもあって、ものすごい人が集まるから、これを一斉に断るのには時間もないし難しいんちゃうかって話やったんやけども。せやけど、いっきに中止やと決めました。僕と事務



泉佐野市青協の募金活動の様子

局で話して。それで、中止の連絡を行政の青少年課に話しに行っ、二つ返事で、よしわかったと言ってもらった。それで、そのまま、今度は義援金の活動に回った。その日から警察署に行ったり、いろんな場所に交渉しに行った。募金を始めるまでの1週間の間、ずっと交渉に走った。仕事もあるんやけど、職場の人もわかってくれてるんで、ずっと昼間、僕を出さしてくれたんですよ。だから僕、事務局と一緒に、ずっと回れると一緒に交渉に回った。だいたい二つ返事でさしてはくれたんですけど。

——青年団の仲間はどんな感じで？

**西野** もう、即、みんな、やりますって形で。当時、動員かかった以上に人数が集ってくれて。一日目に来てないメンバーも、またあくる日、駅でやったりとか順繰り順番でまわしていった。だいたい2週間つづけた。

——2週間連日、街頭に立って募金活動を？

**西野** できない日もあったんですよ。やっぱりいろんな駅で他の団体とぶつかることがあるんで、そこはなるべく避けてほしいっていうことで。そういった折り合いもあって。(募金活動で街頭に立つ時の) この黄色いTシャツも、僕、走って、作りにいったの。5日間

くらいでつくってもらった。僕らも、募金活動するのに、全員バラバラの私服やったら、あかんと。あやしいと思われるから。募金活動するのだから許可もらいに行くのに、ぼくらの総会資料とかも持って行っとる。ちゃんと、私らはこういうものですっていうのを示して、行政の人も連れて行って、一緒に話してもらって。場所を提供してもらってるから、駅も全部の駅に行ったんで。

——各町内の青年団でも？<泉佐野>

**西野** 例えば、うちの町で、岸和田の祭りでバッチつけてるやつ見て、あれを真似したところがあって。自分らの町だけでバッチつけて、まいて、そのお金を市青協へもってきてくれた。10万円くらい。「震災の復興願う」、みたいに書いたバッチを祭りの時に自分らで作って。防災意識がすごい高くて、逆に募金活動ができへんようになったんです。警察の許可もまったくおきなくて。ほな、どうしてお金を集めたらええんやって。それで、バッチつくって、自分らの町内でまくと。やっぱ祭りという大きい舞台のなかでそれをする事によって、みんな買ってくれるし、意識もついてくれるし、っていうので、一つの町がそれをやってくれたんです。町の祭りに、全員そのバッチつけてますもん。もう母さんが皆つけて。500個くらい売ったって。そのお金、今後、近畿ブロックで被災地に行く時のお金にできればと思ってる。この話をよその町も聞いてて、そんなやり方もあるんやなって、じゃ、それをみんなでもた考えるかって話してるんです。そやって、みんな予算つくっていかかって。ほんで、向こうに

行けたらって。行って、どろまみれになって帰ってくることしかできへんですけどね。

——現地へは？<泉佐野>

**西野** 職場の関係で南相馬の方に行ってくれへんかって話が来たので、まず僕が行った（7月14～17日）。同和地区で大阪府連の支部の関係でネットワークがあって話が来たんです。それで、職場にもう一人青年団がおるんで、そいつと僕、2人でいきますわって。行って、持って帰ってきますわと。それを、市青協側にも言うて、ああ、それやったら、行ってきてくれ、という形（市青協からの派遣も兼ねて）で行ったんです。

——現地に行きたいっていうのは、すぐ？

**西野** もう、話きいた瞬間、行きますって。（東京電力福島第一原発から）25キロ圏内で、まるまる一軒の家を貸しきってるから寝泊りするところもある。そこが事務所みたいになってた。エアコンが1台しかなくて。僕ら行って、わけわからんから、一回、窓、あけたんですよ。そしたら、部屋の中が0.9（マイクロシーベルト）もあがったんです。部屋の中で、もうピーピーピーピーなってるんですよ。機械が置いてるから。そしたら、「おらー、おまえら、窓、閉めんかい」って、おっさんに言われて。窓、閉めてても、0.45、0.5はあるんで。扇風機まわしてました。

——現地に行ってどうでした？

**西野** 南相馬のボランティアセンターの人たち、職員さんが受け入れてくれた。南相馬の議員さんも来てくれた。その人に、いろいろ南相馬のこと案内してもらって。その時、

あんまり写真撮れなかったんです。ボランティアセンターからは、もう、いっさい写真だめって。その時、南相馬で、問題があったんです。遺留品洗浄で、汚れた写真、それを、洗浄の前と後っていつて写真に撮って、それがネット上に流れた。そういうことした人がおったんです。ネット上に、すごい出たらしいです。だから、僕ら、いっさいカメラ持ち歩かんようにしてたんです。そういうとこも、やっぱり意識、高めな、あかんって思った。

——放射能に対しては？

**西野** 僕ら、防塵マスクは必ずしてくださいって言われたんですけど、暑くて出来へん。周りも、そんなことよりも、もう必死なんっすよ、やることに対して。僕らも、だからもう、始めはマスクやるんやけど、もう暑くて息できへんほどなるから、防塵マスクも何もせんと、とにかく作業した。「(マスク) やらな、あかん」って言われたんですけど。感じへんし。目に見えへんし。実際、南相馬の僕らが行った家の周りには、人ほとんどいないんですよ。家、あったとしても住んでないところもいっぱい。でも、ちょっと車で5分くらい走ったら、コンビニがあったりとか、たまに子ども連れのおばあさんが歩いてるとか。それを見たら、よけいに、そんなん気にしてられへんわって思った。

——帰って来て、それを青年団に伝えたわけですね。

**西野** 写真だして、全部、報告した。みんな、写真で見たり、テレビで見たりばかりなんで、(実際の話聞いて) とりあえず、こう、

「うーん」って、いうしかないんですよ。やっぱり。他に仕事関係で行ってるやつらも、向こうで工事したりしとる者もおったんで、その子らも呼んで、現地のいろんな話してもらったり。

——そのなかで青年団としてこれからどんな方向でやっていこうと？<泉佐野>

**西野** とりあえず、やっぱり今、自分らの防災意識を高めなあかんっていうのを、まず重点に置きました。それ、イコール、忘れたら、あかんっていうことなんです。いつ、自分らのところに同じものがきてもおかしくない。来るとも言われてると。ただでさえ、今、災害がない、この大阪、うちのとこ。でも、来た時に、ほんとに壊滅状態になるしって。いかに自分らが助かるかって。そういうふうな形で防災意識を高めていかなあかん、っていうので、ものすごく今、常に、話はしてるとこなんです。

——それで、防災の学習会(2011年6月23日)をやったんですね。講師は？

**西野** うちの市青協の先輩にあたるんです。消防署の署長なんです。防災意識を高めなさい、とりあえず自分の命を守りなさいと。そうしないとやっぱり力になれへんと。

——「第14回人権を考える青年のつどい」で。

**西野** 3.11以後、こういった学習会や集会を全部、防災に当ててるんですね。集会や学習会・勉強会、よくやるんです。先週も、議会の議長さんに来てもらって、防災について、泉佐野市の行政のことも含めていろいろ話してもらった。

——たくさん人数が集っているようで。

**西野** いつもです。青年団の役員と若い子たち入れて。

——でも男ばかり。女性がいない？

**西野** 女の人、ゼロです。祭りだけの女性部っていうのはあるんですけど、青年団にはいないんですよ、女の子。

**塚本** それも20歳までいかれへん、18歳まで。16歳から3年おるかなってくらい。こう言ったらあれやけど、男女差別が入った祭りになってるねん。

——女性も一緒に考えるようになったらいいですね。

**塚本** 市青協にも女子部をつくったらええんちゃう？俺ら（岸和田）も、今、その話になってる。地元の青年団ではちょっと無理やから、市青協で女子部つくろうって。

**西野** 僕らもね、何回か立ち上げようとしたんやけど、やるっていう子らもおるんやけど、実際に、なかなか。

**塚本** やっぱりちょっと、ふだん、そういうのになれてないから。だいぶ努力いるんちゃう。女子部つくろうと思ったら。興味ある女性、絶対いるねん、それはわかってんねん。つくったほうがいいって思ってたけど。

**西野** 努力いりますね。

——そして台風の被害が起きた<sup>iii</sup>。現地に行く、となったわけですね。＜泉佐野＞

**西野** もう、即ですね。「よっしゃ！」って。とりあえず自分の自己判断で、だ一つと電話を回して、「行くぞ、用意せい」っていつて。

（ニュースでは）勝浦くらいしか出てないんやないですか。でも、みなべでも何人も亡く

なってるんですよ。うちの青年団の役員の子の嫁さんの友だちも亡くなったりしてたんで。急きよ、アルファ米持って行かしてもらったんです。それで、青年団の近畿ブロックのつながりで交流があった青年クラブみなべの子に連絡して、僕ら20から30の団体つくって、毎週交代で、だーん、だーん、だーんって順番に入った。一発目は、僕と次長の人間、あと不登校の中学生の女の子も行きたいって言うから、連れて。なんで行きたいって言ったかって、そこ、ウミガメの里やったんです。そんな話をした時に、その女の子が、うちの職場の会館に来てて、その話を聞いてたんです、横で。「なに？ウミガメ助けにいくのん？」って言うから。彼女、学校に行かんと、うちの会館に来てたんで、「行きたい」って。でも、それ行ってから、中学校に行くようになってん。

——なんで？

**西野** わからない。何でかは、わからない。人と話すのは苦手なんやけど、それは同級生とかで、年上の人とか、受け入れてくれる人には大丈夫。

——次に被災地に入ったのは？＜泉佐野＞

**西野** 12月23日、宮城県団事務局の大輔さんや、事務局次長の芳賀さんに会って一緒に現地まわって、仮設住宅にも行かしてもらった。もうね、決めてたんですよ。震災が起きてから、クリスマスなんかもういらんって。だから年末、また行けるとこあったら行きたいって。ほんまやったら、がれき撤去とか、いろいろしたかったんですけど、準備が足らなくて言われて。とりあえず、それやったら、いつ

たん視察に行って、それで近ブロの集会に大輔さんや宮城の人に来てもらって、みんなに話をしてもらって、みんなの意識を高めて、それで皆が入ったらどうやって、今、段取りを組んでるところ。実際にやっぱり被災地の青年団の子らに来てもらって、話きいてもらって、意識高めてもらって。僕らも、もう何回か現地に行ってるんで、「せな」「やらな」と思うこと尽きんけど、実際、現地を知らん人間、テレビでしか観たことない人間ばかりやから。再来週の青研（2月25～26日）で、やろうと。そこから、メンバーが出てきて一緒に行けたらいいなって思います。

——ところで原子力発電の問題とか、エネルギー問題への関心はどう？

**西野** 身近では結構、原発に関しての話をして来てくれる先生が来てます。僕も一回、話聞きに行った。消防署の署長の時も、子どもいてるやつが質問して。うちら地元で原子炉があるんですよ。研究所に使用済み燃料棒があるんです。だから、そのことについて質問をバーンと投げかけてる青年団員は何人かいましたね。あれは、ほんとうに大丈夫なんですかって。

**塚本** 賛成も反対も、どっちの意見も聞かなかんと。せやないと、ぜったい、勉強にならんからな。僕らも、それは考えなあかんとは思いつつ、なかなか硬い話で難しいから。俺も何回か聞いたことがあるけど。

**西野** うちの会館（職場）で講演会があったんですよ。そしたら、なんでそれをもっと大きなホールでせえへんねんって問い合わせが、ものすごい来た。100人も入らないとこだっ

たんで。泉佐野にも、ホットスポットがあるところから、千葉からとか、宮城からとか、人がいっぱいきてるもんで、うちの会館でも、20何名が一緒にご飯食べたりするようなのをやった。そこにきた千葉のお母さんが、私の責任で、私が、浅はかだったので、子どもが被曝した」って。子どもも来てたんです。きゃっきや、きゃっきやって外で遊べるって喜んでる姿を見た時、泣きそうになったですね。奥さんを亡くされて、だんなさんだけで子ども2人みてる人もいたりして。その人ら、大阪で、もう住んであります。そういう人らを集めて、一緒に交流会して、遊びに行ったりとか、みんなで銭湯行ったりとかっていうのも、泊りがけでやりました。

——最後に今後の課題を？

**西野** 継続していきたいですね。やっぱり。日頃の防災意識を、やっぱり忘れんと、毎回。こうやって防災の学習会なんかを常に繰り返して行って、自分の命は自分で守ると。そして、何かあった時には、すぐに力になれるようにと、そういうような形で若い子たちには伝えていきたい、教えていきたい。

——自分の命は自分で守るって、自分のことがとても大事なものだっていう気持ちがないと、そこにいかないですものね。今の、特に、若い中学生たちにとっても、自分なんかどうなってもいいとか、自分なんか生きててもしょうがないとか、自分なんかいてもいなくてもいい存在なんだとか、誰にも役にたつてないしとか、認められないんだとか、そういう気持ちじゃなくて、自分も一人のかけがえのない人間なんだみたいに自分のこと

を思えないと、自分を大切にしよう、自分を  
守るって発想にならない。そういう意味では、確  
かに、響くのかもしれないですね。

**西野** 津波で被害を受けた人とかの話聞き  
かしたりしたら、自分の大切な家族も失う、  
住み慣れた町をなくすわけじゃないですか。  
でも復興という言葉がついてくるかぎり、  
自分の町をもとに戻したいっていう気持ちも  
必要やないですか。そうなんや、自分が生き  
らんことには、そういうことはできへんとか。  
そういったことも言ってる。必然的に。

**塚本** 岸和田は岸和田で続けていきたい。2  
回行ったけど3回目も行きたいなって話にな  
って。(泉佐野とも) うまいこと一緒になって  
続けていったら、こっちも知識もあるし、も  
っとこないしたらええんかなって思うことも

あるから、一緒になって考えられるとええな。  
お互い、別々に考えてても仕方ないから。現  
地に行く事業をやって思ったのは、役員が、  
めっちゃ結束力かたまること。こんな言  
い方したらおかしいんやけど、これをやるこ  
とによって、役員は、めっちゃめっちゃかたま  
った。道中の10何時間も一緒に、段取りから何か  
ら全部。行く前は週に3日くらい寄って打合  
せして。帰ってから、あの時は、ああやっ  
たでな、って、行ったこととか、段取りした  
こととか、今もごっつい話よくでて。若い子  
ら呼んで、そんな話するやん。これが、ある  
意味、伝えてることや。そんなんして話しと  
ったら、また行きたいもんもでてくるし。  
——どうもありがとうございました。

※これは2012年2月11日に日本青年館で行ったききと  
りをもとに再構成したものである(編集委)。

『被災地・気仙沼より無事帰還 報告(その1)』森田玲。

<sup>ii</sup> 泉佐野市青年団協議会主催「青少年と集う国際交流フェスタ」。

<sup>iii</sup> 2011年9月、台風12号。和歌山県で大規模な土砂災害。泉州地域でも浸水被害が発生。

## 岡山県青年団協議会

語りて：中園謙二(岡山県青年団協議会会長)、仲田俊範(岡山県青年団協議会事務局長)

ききて：高山盛光、辻智子、薬師寺あゆみ

——2011年3月11日はどうしてました？

**中園・仲田** 岡山は揺れてないです。まったく。

**中園** 第一報は会社でテレビを見て。夜の7時か8時くらい。コンビニートか何か燃えている映像を見て、何があったんだろう？っていうのが最初ですね。工場なので、テレビは仕事が終わるまで見られないから。これ、なんだろう？と思って、しばらく見てた。それで、皆に、なんか地震があったみたいだよって。そんな感じでしたね。だから最初は、そんなに大きな地震だとは思っていなかったし、すごい火事になったと思ってた。そして、その後、津波の映像が流れた。

**仲田** 建築関係の仕事なので現場に入っていました。そこで、携帯電話が通じんって、皆が言って。なんかおかしいなと思って、3時の休憩の時に携帯電話でツイッター見てたんですよ。そして、地震があったって流れて。震源が宮城沖だって言ってるのに、新大阪の辺で新幹線が止まったって。そんなん、おおごとなんじゃないって思った。映像を見たのは家に帰って夜8時くらい。一番最初は、ガソリンスタンドの支柱に家がぶつかって、メリメリって壊れていく映像が流れとった。あとは気仙沼の辺で海が燃えている映像があって、おおごとだなんていうか、もう日本沈没するのかな、くらい思いました。

——直後の身のまわりの状況は？

**仲田** そんな大きなパニックには、モノがな

くなるとか、そういうのは、なかった。停電も何もないですね。職場もまったく普段どおり。こっち（西日本）の電気をあっち（東日本）に送れないらしいんですよ。だから逆にこちらはガンガン働け、くらいの感じで。自粛ムードに乗っかっちゃだめだと。

**中園** たしかに、働いて金を落とせ、みたいな感じだったですね。意識はそうですね。経済をこっちが回さないといけないから。

**仲田** 5月の日青協の定期大会の時、品川で降りて、びっくりしたんですよ。真っ暗だったから。電気ほとんど全部落としてたんで。昼間なのに、照明を半分以上切って、何？ここ？って。話は聞いてたけど、実際の目の当たりにすると、ああ、ほんとだったんだなって。それまでは、テレビのなかの出来事。改めて実感した。

——震災以前から被災地には知り合いとか、親戚とかは？

**仲田** 全青研で一緒になった人が大槌町にいたんです。加藤さんの後輩の小林君。もちろん、加藤さんは当然知ってますから。でも、僕らが電波を使っちゃだめだなんて思ったんで、すぐには何もせずにいました。だから、小林君や加藤さんの消息を知ったのは、日青協の掲示板ですね。掲示板は、あの時は毎日チェックしてました。消息不明な人が心配で。あと、何かできることないかなと思って、情報を得たいという気持ちで。日青協の情報はピ

ンポイントだったんで有効だった。

**中園** 泉田さんとは面識はあったんですけど、話したのは、それこそ震災があった後、5月の日青協の定期大会の時です。

—青年団で何かしようっていう話は、一番はじめはいつ？

**中園** 役員の子が、募金しましょう、と言いつ出した。

**仲田** 3月12日の朝。それで翌日の13日(午前10時～12時)には岡山駅前募金活動をやった。2時間。そしたら108人くらい来た。想定外だったんです。急だし、そんなに集らないだろうって。募金箱も10個、20個くらいはつくってたんですけど、それだけあれば十分だろうって。ところが、ミクシィとか、ツイッターとか、それこそメルマガなんかで、「募金するんで、来れる人は来てください」みたいな感じで流してたら、ものすごい人が集って。大学生や、見たことない人が多かった。「この募金活動を何で知ったの？」って聞く暇もなく、説明だけして、「やってください」って。

**中園** 募金箱が20個だから、6人か、7人に一つ渡しますってことと、無理やりお金をもらわないようにとか、そういう基本的なことを説明した。想定は20人くらい。20人くらいはいいだろうと。僕は、お金を集めて回るのに、もう必死。お金が、無茶苦茶、入るから。だから募金箱がすぐいっぱいになって危なかった。募金箱を持ってるのは初対面の子ばかりだったんで、ある程度で回収するから、誰が何ていっても僕以外にお金は渡さないように、っていうことだけ言いました。



**仲田** 2時間で106万8455円。3月14日に日本赤十字に持って行った。午前中に募金して、昼から青年館で金額を数えて、すぐに岡山県青年団協議会のホームページの掲示板に、いくら集まりました、ありがとうございますって報告した。向こうからすれば、僕らも怪しい団体かもしれないんで。ちゃんとこれだけ集って送りますよって報告して。領収書も後にアップしたんですよ、掲示板に。

**中園** 募金詐欺じゃないですけど、募金もらってそのまま着服、そういうふうに使われてもいけないと思って。どこに渡しますとか、領収書はどこにアップしますとかっていうのは説明した。紙一重ですからね、そのへん。善意が悪くとられたらいけないし。僕らなんかだったらまだいいんですけど、来てくれた子らが悪く思われたら、おもしろくないと思うし、そういうところ、すごい気をつかいました。

—街ゆく人の反応、すごかったんですね。

**仲田** その日は裏方に徹した感じだったので、直接、街頭に立って人と話したりはしていないんですけど、新幹線を降りて直ぐにエスカレーターがあつて、エスカレーター降りてくる途中に、もう財布出して、一万円札だ

して、そのエスカレーターの前募金箱に  
て状態だった。

**中園** みんな財布からお札だして、入れる準備してたんですよ。

**仲田** またその次の週にもやった。1回だけじゃ駄目だよなって言って。その時にこれなかった人もいたんで、自分もやりたいって声があったので、その次の週もやった。その時は、20 数人くらいで。他でもやっているとこがあったから。

—集ったお金は？

**仲田** 日青協がやるって情報も入ってき  
なかつたんで、一週目は日赤に送った。

**中園** 第一週目は、青年団ばかりじゃなかつたっていうのもあるんですけど、やっぱり日青協に渡しますっていうよりは、赤十字の方が名前が知れてるっていうのもありますし。でも、日青協が始めたって知って、それなら直接ダイレクトに被災地の青年団に渡るので日青協にと。5月の定期大会に持ってった。20万くらい。

—義援金募集・募金活動のほかには？

**仲田** 物資を送りました。陸前高田の米崎小学校避難所。日青協のブログと、あとメールも来ていて。靴と食糧を送った。持ち寄って20足くらい。いっぺん日青協に送って、他のところから送られた物資とまとめて送ってもらったんですよ。第二便くらいから直接送ってください、となって。それから、根菜類と、スカートとかもあったかな。2回ほど送りました。現地に行った時、余ったから持って帰ってくださいって言われました。実際、岡山のメーカーから送ったジャージなんか、

ごそつとあったんですけど。てぬぐいとか、マラソンの参加記念品のとか。「持って帰るのがボランティアだと思ってください」って。手袋なんかも一人2つ3つ持って行ってくださいって。物資のミスマッチは感じましたね。

—現地へのボランティア派遣の話はどういう経緯で？

**仲田** 3月13日の募金の様子を見て、現地に行かないと駄目だよな、と。ただ、すぐ行っても、できることもそうないだろうし、夏休みくらいだったら学生もある程度集まるだろうからって話はしてた。今までの、阪神大震災の時とか福井の時とかの話は聞いてたんで。ただ、遠いよな、とは思った。結局、片道17時間かかりました。

**中園** 言い出したのは、さっきの募金活動しようって言った子。何かあった時にさっと動ける子なんですよ。普段は、忙しすぎて、仕事を3つもかけもちしてたりとかっていうのがあって来れないですが気持ちはあるんです。現地に行くって話は、まあ、ほんのりです。気持ちはありますけど、話は、ほんのりですね。日青協の定期大会で、僕、泉田さん（岩手県団）とか渡辺さん（福島県団）と話してもらって、行ってもご迷惑になりませんかということと、どうすればいいですかって、何がいますかとか、人が行っても邪魔にならないですかとか、そういう話をした。結局、泉田さんのところに行くことになった。その時、陸前高田の橋詰君の話とか聞いて、青年団のおかげで生きて来れましたみたいなこと言われてたんで、すごいことになったんだなって。

一定期大会でリアルに話を聞いて、具体的に話をして、ああ、行けそうだなと。

中園 OK というか、大丈夫ですという話をもらったんで。ただボランティア活動の内容については、その時にならないと、ニーズがあるから、わからないって言うことは言われました。あと、ボランティアセンターが仕切っているから、自分のところでは世話ができないかもということ言われたんですけど、でも大丈夫ですって。

仲田 募集かけだしたのが6月くらい。バスが2台で60人。民間のバス会社に行って、こういうように行きたいんですって言ったら、新車おろしてくれた。バス会社への交渉なんかは、実際には、青年館の方にお任せだったんですが。確か2台で70万くらい。

—お金はどうしようって思ってたの？

仲田 参加費を集めるのと、何かの補助金があるとればという形ですよ。結局、補助金ももらえて、なんとか帳尻は合わせられた。

—現地に行ってどうでした？

仲田 県団からは僕だけしか行かれなくて。平日だったんで仕事の関係で皆、休めなくて。でも、募集かけたら、半端ない人が集ってって聞いて。最初は、青年館の方に任しておけばいいかなと思ってたんです。20人か30人くらいなら。ただ、ものすごい人が集ってって聞いたんで、バス2台とか。それで、あ、県団からも行かんと駄目だなって。そういう形で。行かないと絶対後悔するっていうのも思ったんです、自分の中では。今、行っとかないと、って。最初から、学生を対象にして、学生を集めるつもりでやってたんです。たまたま岡山市内の高校に陸前高田から来ら

れている先生がおられたんです。その学校の生徒や大学生が中心で、あとは数人、社会人が参加しました。帰って来て、常任理事会で報告しました。他の皆も、行きたかったっていうのは、ありますね。反応として。でも、仕事って難しいよねって。やっぱり3日も4日も休みとれない。そういう感じはありましたね。でも、すごい大きいことやった、みたいな感じはあった。ただ、それをどうやって周りに伝えていくかっていうのは、行ったメンバーとも話したんですけど、行って来て見たことを、やったことを、近くの人、家族でも友だちでも来てない人に被災地の現状を伝えることをしてほしい、とは言った。今、岡山市青年館の1階に写真を貼っているのも、そういう形で思ってたってやっているんですけど。誰かが発信しつづけないと、どうしてもメディアは、次の話題にすぐ移るから。誰かが言い続けないと駄目だよなとは思ってる。

—どうもありがとうございました。



写真などを丁寧にひろっていく

(陸前高田市でのボランティア活動)

※これは2011年12月18日に、岡山県青年館で行った聞き取りを元に再構成したものである(編集委)。





## 日本青年団協議会ボランティア派遣の記録

日本青年団協議会では、6月～9月にかけて3度のボランティア派遣を行った。以下はその記録である。

### ■第1回ボランティア派遣

6月26日から27日にかけて宮城県山元町へ1回目のボランティア隊を派遣した。今回の目的地は宮城県山元町。バスで片道6時間～7時間の行程である。集まった6名の参加者は、午前3時に東京の日本青年館に集合し、一路宮城県へと出発した。

初めての被災地と、ボランティア活動に少々緊張しつつ、およそ6時間で宮城県山元町へ到着。朝9時にもかかわらず、ボランティアセンターが設置されている山元町役場の駐車場はすでに多くの車で埋め尽くされていた。到着すると、宮城県青年団連絡協議会の佐久間会長の激励を受けた。聞くとこれから東京へ出張とのこと。忙しいなか駆けつけてくれた佐久間会長の思いに応えるべく、いざボランティアセンターへむかう。

ボランティアセンターでは、グループの男女構成や希望などを確認しつつ、作業を割り振るのだが、スタッフの方の、「力仕事じゃなくても大丈夫ですか？」という一言に、少し現場の実態を垣間見た気がした。

私たちが割り当てられた仕事は、津波により流された写真の洗浄作業。現場では、想像を絶する枚数の写真を、一枚ずつ洗浄し、乾燥させ、デジタルカメラでデータに残し、ナンバリングを施したのち、取得した区画ごとにアルバムにしていくというもの。

写真の洗浄は、ぬるま湯に汚れた写真をつけながら、筆や刷毛で表面の汚れを落とすという作業。写真によっては、水につけ

た途端、色素が抜けていくものもあり、慎重な作業が求められる。手にする写真をみるにつけ、この人は無事なのだろうかという思いがよぎる。家も学校も何もかも流されてしまった人々にとって、この写真たちは生きてきた記録を証明するといっても過言ではない物だと思えば、1枚たりともおろそかにはできないと感じた。

作業終了後には、山元町で「りんごラジオ」と呼ばれる災害FMにボランティアとして震災発生直後からかかわる、元日青協副会長の齋藤緑さんとお会いし、現状や当時の様子についてのお話をうかがうことができた。また、りんごラジオを立ち上げた高橋厚さんにもお話をうかがい、ラジオに取り組んだその思いに触れることができた。

また、津波により壊滅した、坂元駅周辺を訪れ、被災の様子を目の当たりにした。駅は元の姿を連想させることが難しいほど損壊しており、かろうじて残ったホームとホームをつなぐ連絡通路が、被害の凄まじさを物語っていた。その夜は、宮城県青年団連絡協議会の岩崎事務局長と伊藤監事も合流し、宮城県団メンバーの現状や支援の取り組みなどを伺いながら、親睦を深める。

翌日には、被災したいちご農家で、いちごの苗を植えるポットの洗浄を行った。この日より、山形県連合青年団の小野寺団長も合流し、ともに作業を行った。訪れた農家の方は、ボランティアの方の協力も受けながら、何とかクリスマスケーキの時期には、いちごを出

荷したいと復興への思いを語っており、そうした思いを少しでもサポートできればと、各自無心で作業に取り組んでいた。

こうして2日間の行程が終了した。



丁寧に洗浄作業をすすめていく

## ■第2回ボランティア派遣

7月16日～17日にかけて、第2回目となるボランティア派遣を行った。今回は、第1回ボランティアでお世話になった、写真洗浄とデータベース化に取り組む「思い出サルベージ・オンライン」へ協力することとした。参加者は6名。今回は、日青協関係者にくわえ、東洋大学の学生2名が参加した。

7月16日の朝6時30分に東京を出発し、6時間かけ、再び、宮城県山元町役場へ。今回の作業場所は、山元町役場に隣接されている施設での作業となった。今回の作業は主に2つ。写真の洗浄と、洗浄した写真を整理し、展示することである。特に展示に関しては、大量のアルバムを地域ごとに仕分けし、プラスチックのケースにつめ、展示のための台を作成し、ならべていくという作業。一つ一つのケースには、アルバムがぎっしりと並べられており、かなりの重さとなる。さらに、アルバムはしっかりと洗浄ができないため、泥が付着したままの状態。当然、マスクと手袋

の着用は必須である。季節は7月であり、建物内はかなり暑い。参加者は、粉塵や脱水症状に気をつけながらの作業となった。

スタッフの方によると、これまで洗浄し、整理してきた写真を、今回の作業で相当程度展示し、なるべく多くの方に探さしてもらいたいとのことであった。そのため、今回は様々なルートでボランティアを呼びかけており、60名ほどが新たに合流する予定であった。我々が到着した段階では、いまだ手付かずの場所もあり、スタッフの指示のもと、全員がまさに「黙々」と作業に取り組んだ。

作業に取り組む参加者は、泥と波により脆くなったアルバムを慎重に扱いながら、およそ5時間にわたる作業を進めていった。決して楽な作業ではなかったが誰一人手を休めることなく作業を続け、体調を考慮したスタッフの促しでようやく休憩をとる者がほとんどであった。

18時頃には、ほぼ予定の作業を終了し、宿泊先である角田市の旅館へ移動。角田市は、山元町の隣町にあたり、宮城県青年団連絡協議会の佐久間会長の地元でもある。ここでも、第1回目同様に、佐久間会長の激励をうけた。また、福島県からも、福島県連合青年会の先輩である、宍戸克己さんが差し入れを持って駆けつけてくださった。そこで、お二人から、震災発生時のようすやその後の状況についてのお話を伺うことができた。震災発生直後の、ライフライン断絶による混乱や、放射能への不安と地域の状況などについて、当事者の口から語られる言葉に、参加者はメディアからの情報とは違う「重み」を感じていた。

翌日は、朝から作業を再開。日青協ボラン

ティアメンバーは、昨日から作業をしていたこともあり、各ポジションで、他のボランティアへの指示を出すなど、半ばボランティア、半ばスタッフという状態であった。一緒に作業する方々にお話を聞くと、関西から12時間かけてボランティアにきているという方が大勢いた。日本中が今回の災害に思いを寄せ、何かしたいという思いでいることを改めて実感する。

また、この日は日曜日でもあり、被災者の方が写真を探しに訪れていた。写真を探す方々の表情を見た瞬間、我々の作業の責任の重さと、その価値を再認識することとなった。

こうして、2日間が終了し、ほぼ初期段階の作業を終了させることができた。これからは、写真をデータベース化させる作業をより進めていくとのことである。道のりはまだまだ遠い。こうした、小さな一歩の積み重ねを、長い歳月をかけて続けていくことが重要であると実感することができた。



写真の整理をすすめていく

### 第3回ボランティア派遣

8月31日～9月2日の日程で第3回目となるボランティア派遣を行った。今回は、被災地の青年団の事業支援を目的にボランティア隊を派遣した。目的地は、岩手県陸前高田

市。ここで、54年に渡り開催されている、陸前高田市青年団体協議会主催の、陸前高田市青年芸能祭の準備作業に携わった。また、前回までと大きく違う点は、参加者がほぼ東洋大学の大学生であった点である。

これは、日青協の助言者として長年青年団と関わっていただいている、矢口悦子先生の紹介により実現することができた。

参加者は、学生12名を含む、計16名。8月31日の23時に東京を出発し、およそ9時間かけ、翌日朝8時に陸前高田市へ到着した。現地では、岩手県青年団体協議会の泉田会長に出迎えていただき、作業場所である横田町コミュニティセンターへ移動した。今回の主な作業は、過去数十年に渡り使用され今回の津波で喪失した芸能祭の看板作成と、チラシの作成、そして芸能祭の周知である。長い歴史を持つ芸能祭であるが、今回の津波により、道具や資材が全て流失してしまっていた。また、開催場所や開催時期も、震災の影響で大きな変更を余儀なくされていたことから、看板作成に加え、周知を行なうこととなった。

まず参加者は、立看板を作成するチームと、青年芸能祭のチラシを作成するチームにわかれ作業を開始。立看板チームは、角材を加工し看板の足を作成し、背板となる木材と慎重につなぎあわせる。そして、看板部分となる板に大きな紙を貼り、その上に、一文字ずつ手書きで文字を書いていく。全ての文字が均等になるよう、慎重に慎重に作業が進められた。

青年団のメンバーいわく、少なくとも4日～5日はかかるであろう作業を、参加した学生たちは、役割を分担しながら、絶妙なコン

ビネーションで次々に進めていく。そして、当初の想定を大きく超え、およそ半日で看板を作成することができた。また、芸能祭のチラシも、様々なバリエーションのチラシがつくられ、あとは現場で配布するのみとなった。想定以上の作業進行に、この日は急遽予定を変更し、3名の青年団のメンバーから、当日の体験を語ってもらう機会をつくることのできた。堰をきったように当時の体験を語る3名に、その場にいた参加者は、じっと息をつめ耳を傾けていた。

またその後、青年団メンバーの案内で、被災地を実際に見に行く機会を得ることもできた。先ほどの体験談と現実の映像が重なり、当時の悲惨な状況がよみがえるようであった。また、復興が進んでいるかのような報道もあるなか、あの日から時間が止まったままのような建物も数多く残されていることに、参加者もショックを受けていた。

その夜は、2時間かけ盛岡市の岩手県青年会館へ宿泊した。青年会館では、陸前高田市青年団体協議会の橋詰琢己会長と懇親し、橋詰会長から感謝の言葉が送られていた。

翌日は再び陸前高田市へ移動し、実際に仮設住宅でのチラシ配布に携わることができた。これも、地域と密接な関係にある、青年団の紹介あってこそできることであろう。仮設住宅を、一軒一軒周りながら、「青年会です。芸能祭のご案内に伺いました」と声をかける。すると、ほとんどの方が、青年会の存在も芸能祭の存在もよく知っていて、逆に活動を励まされる場面もあった。また、芸能祭の案内にとどまらず、自らの家族の話や当時の状況を話す方もおり、こうしたコミュニケーショ

ンそのものが、これからますます必要になるであろうことを実感した。

今回のボランティアは、通常イメージするものとは大きく違うものであった。しかし、同じ時代に生きる若者たちが、被災地で奮闘する青年団と交流し、現地の実情を実際に体験できたことは、参加者にとって貴重な経験となった。

(日本青年団協議会事務局)



学生たちの共同作業

## この記録冊子ができるまで

辻 智子

最後に、この記録冊子の作成にかかわった私の立場と視点から、これができるまでの経過と、そこで私が感じ考え行動してきたことについて記しておきたい。

### 1. 記録の取り組みへの模索

#### (1)2011年 3月 11日～4月

地震後、私も日青協に連絡を入れ、東北太平洋沿岸に暮す旧知の青年団メンバーの安否を問い合わせた。行方不明者もいる様子で不安になる。その後、日青協の緊急掲示板に何度もアクセスしながら一喜一憂した。徐々に不明だった方々の安否が判明してくる。日青協役員の加藤国雄さんが行方不明のままであることもわかった。

この掲示板を通して全国各地の青年たち相互のやりとりも手に取るように見えた。特に、岩手県陸前高田市米崎小学校避難所で責任者を任されていた橋詰琢見さんからの物資要請—例えば、靴何足、ジャージ何着、女性用ズボン何本、じゃがいも・人参などの根菜類いくらかでもなど—に対し、皆がそれに応えようと動いている様子も逐一読むことができた。後に聞いた話では、橋詰さんが要請した物資は、米崎小学校避難所のニーズだけでなく市内各所で避難所の運営などに携わっている同じ青年団の仲間たちからの要請も集約しての投稿であったようだ。

青年団活動をしている青年たちは、“青年団をやっている”というだけで初対面でも即座に仲間意識を形成する“習性”を持つと私は震災前から常々思ってきたが、今回なおいっそう強く感じさせられた。もちろん全国的な支援活動の展開は、日青協の事業を通じて震災前から顔と顔とを会わせてつながっていた者どうしであったことも大きかっただろう。

この時、青年団含め日本の至るところで、一人ひとりが、それぞれの状況の中で何かしたいと模索し動いていた。私もまた自らに問うていた。これまで青年団とは学習事業を通してかかわることが多かったことから、そんな私の役割にふさわしい支援活動のやり方は何だろう、そんなふうに考え始めた。

#### (2)2011年 5月～6月

日青協は毎年5月に定期大会を行う。今年はそこで泉田将治さん(岩手県青年団協議会会長、陸前高田市)と橋詰琢見さん(陸前高田市青年団協議会会長)が全国の仲間に地元の状況を話した。また5月 19～21日、日青協事務局員の松尾直泰さんは、盛岡市、陸前高田市、大槌町、気仙沼市、仙台市、山元町を回り、現地の実情を見るとともに青年団メンバーと会って様子を聴き、話をし、必要物資(チェーンソー、防虫スプレーなど)を届けていた。

6月に入り、田中潮さん(日青協事務局長)と松尾さんと私で話をする時間をもった。この時点で見えてきたのは次のようなことだった。

まず、被災地の青年団メンバーたちは、会うと堰を切ったように話をする。あの日、その時、自分はどこで何をしていたのか、揺れがおさまった時どうしたのか、どこに逃げて、その後、どうしたのか、そうした自分の体験をとめどなく語る。そして「ここも見せたい、あそこも見せたい」とあちこちに連れて行く。彼ら／彼女らには、青年団の仲間に出会ったら、伝えたいこと、知ってほしいことがたくさんある、これは確かなことだと思えた。

また、直接的な被災地以外の地域の青年団の中に、ぜひとも目に留めたい動きが様々に展開されていた。例えばある地域では、青年団以外になかなか居場所がないようなタイプの青年が、日青協事業で知り合った気仙沼の仲間と連絡をとり、震災後すぐに支援活動を行って周囲から驚かれたという。募金活動をしていても彼には被災地の仲間たちの顔が浮かんでいるに違いないと田中さんは言う。地域から地域へ、日青協を介さない直接的なやりとりが網の目のように存在しているようであった。

そして、青年団 OB・OG も動いていた。気仙沼信用金庫職員として地元中小企業への融資に奔走しながら伝統芸能の継承を目指し復活の動きを生み出している高橋弘則さん、災害臨時コミュニティ FM「りんごラジオ」のスタッフとして活動している齋藤緑さんらの様子が聞こえてきた。かつて青年団活動を通じて培ったものが、きっと、その後、そして今の、これらの活動につながっているのではないかと想像できた。

「100人いたら100通りの3.11がある。それを丁寧に、時間をかけて拾っていきたい」、これがこの時点で確認できたことだった。

### (3)宮城県山元町ボランティア、宮城の仲間との再会

6月26～27日、日青協第一次ボランティア派遣で山元町へ向かった。ボランティアセンターの仲介で、写真洗浄とその整理・返却に取り組む「思い出サルベージ・プロジェクト」に参加した。写真洗浄では、泥を水で落とすと写真の画像まで一緒に落ちてしまうため気をつかった。花見で盛り上がっている写真、家の中でくつろぐ家族の写真、海水浴を楽しむ写真、生まれたばかりの赤ちゃんの写真、屈託なく笑う子どもたちの写真、学校や同窓会の記念写真……この人々は今どうしているだろうか、もし自分だったら、もしこの子が私の子どもだったらと思うと胸がしめつけられた。このプロジェクトは、複数の大学関係者と日本社会情報学会会員、山元町役場によるもので、写真をデータベース化する作業も並行して行われていた。

ボランティア活動終了後、山元町役場の「りんごラジオ」で齋藤緑さんと再会。地震一週間前の全国青年問題研究集会(全青研)以来約4ヶ月なのに、たいそう懐かしく感じられた。緑さんからは、やはり、あの日、自分がどうやって仙台の職場から山元町にたどりついたか、地元の友人・知人の話などの話が語られた。なかでも印象的だったのは、まだ涙が出

ない、悲しいという気持ちになったり、落ち込んだりしない、ということだった。これは、きっとまだ現実を受けとめきれていない、現実を見ないようにしてるんじゃないか、自分の感情や気持ちに蓋をしている状態なのかもしれない、と緑さんは言っていた。とめどなく語る、その語りのなかには、こういう現実もあるのだということをも痛感させられた。

生放送を生で聴きながら、「りんごラジオ」発起人でメイン・アナウンサーの高橋さんに災害臨時コミュニティ FM の“哲学”をうかがった。今一番力を入れていることのひとつが、「語り継ごう、私の 3.11」というコーナー。町民への取材では、「あの日、どこに？」と一言向けただけで一人であつという間に 30 分話す人、取材を断る人、涙を流す人、いろいろだという。これらの話はテープに録音しているので、いずれ CD や文字に起こして小冊子にすることも考えられるとのことであった。

その晩、宿泊先の宮城県青年会館(仙台市)では宮城県青年団協議会の仲間たちが待っていた。事務局長の岩崎大輔さんとも再会。聞けば、石巻の海沿いの埋立地にある職場で地震にあった大ちゃんも、会社の 2 階で目の高さを海水が船を押し流しながら通り過ぎていくのを見ながら「もうダメか」と死も覚悟した。しかしそこから気持ちを切り換え、「生きてやる」と思い直し生還した。阪神・淡路大震災の研修が役に立ったともいう。そんな経験を踏まえて大ちゃんは、3.11 の記録を、もう少し落ち着いたら、皆に呼びかけて小冊子にできればと思う、年内くらいかな」と語った。私は即座に「手伝わせてほしい」と言った。

#### (4)2011 年・夏

田中さんと相談しながら概ね次のように今後の取り組みを進めていくことを話し合った。

##### <東日本大震災生活記録企画案(概要)>

- ・被災地の青年たちが書き手、語り手となって「東日本大震災の生活記録」といった文集にまとめていくことを目指し、日青協が主体となって広く呼びかけてゆく。書き手、語り手は青年団メンバー以外でも構わない。もちろん無理強いせず、本人の意思を尊重する。
- ・経験を文字にして記録することは、自分の暮らしと地域を見つめ直すきっかけにつながると考えられる。
- ・記録を書く過程や書かれた記録を仲間の中で共有し、それについて語り合うことで、青年団の次の活動につなげていくことができるのではないかな。
- ・同時に、未曾有の被災の経験を同時代の仲間や次世代に伝えていくことにもなる。
- ・体験記録の作成(8月～11月頃)、読みあいと語り合い(12月ないし県の青年問題研究集会)、まとめ(3月、冊子にして全国青年問題研究集会で配布・共有)というスケジュール。
- ・体験記録の作成方法としては次のようなものが考えられる。①自分で書いていく。②まず語り、それを自分で書いていく(協力者によるインタビュー形式で語り録音する→協力者が文字化する→文字化された自分の語りを読み返ししながら、それをもとに自分で書いてい

く)、③語り、それを協力者が記録として作成する(協力者によるインタビュー形式で語り録音する→語りをもとに協力者が記録を作成し、それを本人が読んで内容確認する)。①～③のなかから、本人に選んでもらえばよい。

基本的な方向性を描いたところで私は少しずつ周囲にこの企画を話し始めた。息の長い取り組みにしたいと考えたので一緒に担ってくれる人を広げていきたいとも思っていた。この時の周囲の反応は賛否両論あった。次のような危惧や批判も頂戴した。早すぎる、生々しすぎるのではないか、生活の基盤が立ち直っていないところに「ノコノコ出て行って」いいのか。また、語ることや書くことが何らかの強制力を持ち得そうな場合、途中で本人の気が変わった場合など、当事者の意思が何にも優先して尊重されるよう保障されるべきという忠告もあった。話を聴いてもらうことと記録してそれを読み返しふりかえることは必ずしも一連の流れのものとは言えず慎重に行うべきだとの懸念。地元に住み地元で責任を持ち続ける人たちと「外」の人々とのかかわり方は異なるのであり、現地の人々の日常生活世界において、これがどのような意味を持つのかという自覚を常に持ち、問いなおすいとなみが特に必要との意見。いったいこの取り組みは生活の再建とかかわるものなのだろうかという疑問などであった。

しかし、被災地の青年たちと私たちとのこれまでの関係、特にその関係がすでに多面的で継続的なものであったことを踏まえれば大丈夫だろうと判断した。加えて言えば、「現場」に介入する「外」の人間の立場と役割に関する自覚と問題意識は、むしろ私がこれまで常に意識してきたことでもある。

## 2. 記録の作成へ向けて

### (1) 8月末、岩手・宮城・福島

田中さんと私は、8月28日、岩手県青年会館(盛岡市)で県青協メンバー(泉田将治、松田恵美子、橋詰琢見、佐々木訓)と、同じく宮城県青年会館(仙台市)で県青協メンバー(佐久間祥平、伊藤治彦、岩崎大輔、芳賀広美)と会って話をした。記録の取り組みそれ自体については、岩手でも宮城でも既に“承知済み”の前提事項となっており、岩手では泉田さんと橋詰さんが、宮城では芳賀さんと岩崎さんが、さっそく自分の話をしはじめた。

泉田さんは、消防団員としての壮絶な体験をおもしろく語ろうとしており、それがまた何とも痛々しかった。橋詰さんからは、復興町づくり計画の会議のメンバーに青年層が入っていないことに疑問を憤り、明日にも市長に直談判に行くつもりだと話してくれた。また、陸前高田では、消防団員として水門の監視をしていて亡くなった青年団の仲間・中村豊さん(市役所職員)への思いを込めて恒例の市青協主催「青年芸能祭」を今年も開催する予定とのことだった。本記録冊子に掲載した泉田さん、橋詰さんの記録は、この時の話をもとに本人と日青協事務局でやりとりしながら作成したものである。

宮城の2人は、それぞれ写真や地図を用意してきてくれており、順を追って実に詳細に話ってくれた。芳賀さんは、話しながら「そういえば、こんなことが」「あんなことも」と次から次へと思い出しながら語り、細かいところまでよく覚えているものだと感心しながら聴いた。岩崎さんの話は、自分が直面した状況と自身の行動、その時の気持ち、思考の流れ、それらが既に一定程度整理されているかのように感じられた。本記録冊子の芳賀さん、岩崎さんの記録は、この時の話を文字化したものをもとに各人が執筆したものである。

さらに私たちは福島へ向かった。被災の状況も、復興へ向けた方向性も、福島は岩手・宮城とはまた異なる課題を抱えていた。青年団活動としても今後を模索しているところであり、青年団OBと会って話をする事ができた。会津で農家をしている福島県連合青年会会長の渡辺直也さんは、この時ちょうど農業実習生の受け入れ中で時間がとれなかった。久しぶりの彼の声を電話で聞きながら、元気そうというよりむしろ世の中に対して怒っているといた印象を受けた。とにかく皆、福島に来て欲しいと彼は訴えていた。

福島を後にして、私は再び北上し、日青協第三次ボランティア派遣(9月1～2日)に合流して陸前高田市内で活動に参加することができた。

#### (2) 10月、陸前高田市青協・第55回青年芸能祭

10月9日、いよいよ青年芸能祭が開催され(高田小学校体育館)、私も観客兼ボランティアとして参加した。50年以上続く青年芸能祭だが、今年の開催には幾多の問題があった。いつもなら「例年どおり」で即決の事柄(日時、場所、時間、演目、準備分担など)も、今年は、ゼロどころかマイナスからのスタートであり、会場一つ決めるのに何時間も議論をしなければならなかった。しかし、そのぶん、なぜ自分たちは青年芸能祭をするのか、メンバーどうしの意見が存分に交わされたという。

当日、体育館入口で受付を担当させてもらったおかげで、私は、出入りする「お客さん」と近しく話をさせてもらうことができた。市内の仮設住宅から2時間歩いてやってきた人たち、開場3時間も前から座布団を持って並ぶ女性たち、衣裳の紐の結び方に並々ならぬ関心を持ち最前列に陣取るおじいちゃん。フィナーレの高田音頭では会場が一体となって大きな輪をつくって踊り、アンコールまで要求されてたいへんな盛り上がりを見せた。体育館入口に立って海まで続く更地を他方で眼下に見ながら地元青年会の底力を強く感じた。

#### (3) 2012年1月、宮城県青年問題研究集会

1月28日～29日、宮城県青年団協議会による第34回宮城県青年問題研究集会が開催された。地域での青年団活動をふりかえり、実践を交流させ、今後の活動を展望する、この集会に、今年は特別分科会「震災を語り継ごう」が設置され、私もききとり役として参加した。またこれにあわせて個別のききとりの場も設定された。青年団OB・芳賀孝司さんからは津波に直面した漁師の貴重な経験を聞かせていただいた。本記録冊子の記録は、この

時の語りを文字化したものをもとにご本人が執筆されたものである。また、福島渡辺さんからは、農業者の立場、さらに浜通りの人々を受け入れる会津地域の視点からの話をうかがった。この時点ですでに渡辺さんは自分で書いた記録を日青協に送付済みであった。鈴木雄一さん(いわき市上高久青年会会長)からは、震災後も続く地元青年会の「じゃんがら念仏踊り」の活動と9月の沖縄のエイサー大会への参加・交流の話を主にうかがった。この時の話を文字化したものをもとにご自身が執筆されたのが鈴木さんの記録である。

特別分科会の方では、沿岸部の被災自治体の職員としての経験、高齢者福祉施設の看護師として3月11日とその後を生き延びたこと、内陸部での地震の経験とその後の生活の様子などが参加者から語られた。6時間に及ぶ分科会の最後には、自分の経験だけでなく他の人との経験のつき合わせができ複眼的にもものを見ることや情報収集ができた、震災以降他の市町村の人と話をする機会がなく新鮮だった、自分の職業上の目線や枠組みで物事を見てしまっていたことに気づいたといった感想が話された。

#### (4) 2月、岩手県大槌町青年団協議会「復興の集い」

昨年8月末、岩手の青年会館で会った時、佐々木訓(大槌町)さんは、ほとんど何も話をしなかったが、帰り際、私に、「震災直後から、こういう体験記録をやりたい、やった方がいいと思っていた」と告げた。秋、東京で全国青年大会(日青協)が開催され、人形劇部門に大槌町青年団協議会が出演するとの連絡をもらい、佐々木さんとの再会を楽しみに出かけた。佐々木さんは、会長の小林さんと2人で「明日天気になあれ」を上演した。2人の息はぴったりで、実に生き生きとして楽しそうだったのが印象に残った。

そして2月26日、大槌町青協で「復興の集い」が開催され私も参加させてもらった。「第一回 震災体験を綴ろう」との案内には、「今一度震災体験を振りかえり、今後の復興の中での問題や活動のヒントを探していきたい」「未曾有の震災を風化させることなく、後世に伝えていくことも被災地域に暮す私達が考えていかなければならない」とあった。また、参加者には事前に、「大槌町の誇れるところ、好きなどを教えてください」「復興支援活動や仕事をする上で、大変なことや悩みがあれば書いてください」「今後私達が取り組めることはなんのでしょうか」といったアンケートに回答してきてくれるよう呼びかけていた。震災後、青年団に入りたいという地元の若者が男5人・女5人も現れたそうである。ここから大槌の青年団を盛り上げていきたい、彼らの思いは確かに伝わってきた。

### 3. 記録の共有化と今後に向けて

#### (1) 2012年3月、全国青年問題研究集会(全青研)

全青研は、地域に暮す青年たちが抱える悩みや問題を持ち寄り、話しあい、学びあうなかで問題解決に向けた方向性を得るために、また各地域における青年団活動の実践を持ち寄り、ふりかえって課題を整理し、次へ向けた具体的実践の展望を描くために、毎年3月

に開かれるもので、今年で 57 年目を迎えた(3 月 2～4 日)。参加者が事前提出したレポートをもとに分科会が構成され、当日は計 12 時間ほどかけて各々のレポートを軸に徹底的に語り話しあう。今年は、北海道から沖縄まで 80 人を超える参加者が集った。

あわせて問題別集会「それぞれの 3. 11～東日本大震災を語る～」も開催され、佐々木訓・泉田将治・岩崎大輔・齋藤緑・渡辺直也・古農満の 6 人の方が体験を語った。本記録冊子に掲載された古農さんの記録は、この集会前に古農さんにかがった話を文字化し、編集・作成して、古農さんにも確認してもらったものである。

当初予定では、この記録冊子は全青研での共有を目指していたが、まだ執筆中の人がいること、支援活動の記録もまとめたいことから半月ほど予定を先送りし、その代わり手元にある原稿 11 人分をまとめて第 1 号(暫定・全青研版)を作成し、当日配布した。この時、佐々木さんからは、「この体験記録の取り組みは、青年団だからこそできることだ。なぜなら青年団では、これまで活研や青研などで記録活動をやってきた、もともと書くということをしてきたから。その経験と蓄積があったから自分も書けた。書くことは自分と向きあうことで、それは青年団という仲間と場があったからできたことだ」と言われた。

以上の経緯から、本記録冊子は、第 1 号(暫定・全国青研版)に大幅に内容を加えて作成された。佐々木訓さん、小國太一さん、村上宏さん、松田恵美子さん、加藤義弘さん、齋藤緑さん、吉田恵三さん、渡辺直也さんの記録は、日青協の呼びかけに応じて各々が執筆したものを基本的にそのまま掲載している(一部、全青研終了後に加筆修正)。

## (2) 今後に向けて

次に私たちがやることは、まず記録を読んだ人に感想や意見を聴くことである。率直な感想や意見を、ぜひ編集委員会までお寄せいただきたい。また、読み手たちどうしの話しあいの場の設定もしていきたい。

次の記録作成としては、2011 年 3 月 11 日とその直後の体験のみならず、それ以降の歩みも視野に入れることが重要だろう。直面した問題を、どのようにとらえ、どうやって乗り越えてゆくことができるか、一緒に考えていきたいと思っている。生活や地域を新たにつくってゆく力の一部になるような、そんな記録づくりができるよう努力したい。

また、震災前の故郷の記憶もまた、忘れたくない、忘れてはならないものとしてあるとの示唆を受け、今後は、そうした内容も記録に含まれうると考える。実は、地域と青年団の歴史に関する記録化への展望は震災直後からあった。私はかつて全青研の分科会で一緒だった泉田さんから青年芸能祭のプログラム『第 50 回陸前高田市青協青年芸能祭』(2007 年 2 月 4 日、市民会館大ホールにて開催)をもらっていた。その後わかったのは、津波は青年団の事務所にあった関係資料をすべて持っていったということだった。複数の青年団メンバーの自宅も同様の状況であった。「それ」をつくった本人たちの手元や地元には「それ」が存在せず、他方で「外」には「それ」が存在しているという事実気づいた時、私は、

今、私が手にしている、このプログラムは、私のところではなく、本来あるべきところにこそあるべきだ、本人たちが望むなら本人たちの手元に返るべきものだと思った。今後は、各所に声をかけつつ、こうした震災前の記録の収集にも取り組んでいきたい。

## おわりに ～青年団の仲間たちへ

未曾有の大震災を記録し、その実相を伝え広めていくこと。

読みあい語り合うことを通じて、自分や仲間、地域と向き合うきっかけへとつなげていくこと。

そして、そのことこそを、長い長い復興にいたる道の第一歩としていくこと。

そうしたことを目的にして取り組んだ「生きる ～東日本大震災と地域青年の記録～」が、ようやく発刊にこぎ着けました。ここにいたる経緯については、すでに辻智子さんが「この記録ができるまで」で明らかにされているとおりです。

この記録集作成にあたり、被災地の仲間たちや先輩たちが、今もなお、寸刻を惜しんで復興に取り組んでおられる最中、自らの体験をつづっていただきました。並々ならぬ気持ちを込めて、深く御礼を申し上げる次第です。

また、未曾有の大震災に、全国の仲間たちが立ち上がりました。焦点をあてたのは4つの活動にとどまりましたが、これ以外にも数え切れないほどの活動が繰り広げられたことを、強調したいと思います。このことにも、深い敬意を表します。

この記録集を手にとっていただいた方々、とりわけ、青年団の仲間たちにはお願いがあります。何よりもまず、一つ一つの手記を丁寧に読んでみて下さい。一人でも構いませんし、地元仲間たちと声を出して読んでもいいでしょう。そして、読んでみて思ったことや感じたことを、わき上がる気持ちとともに仲間たちと語り合ってみて下さい。被災の事実を胸に刻むこと、それは復興支援活動の出発点であるはずだからです。

3. 11から、一年がたちました。今日からまた、復興が実現する日をめざし、精一杯歩いていきましょう。それは、ふるさとを守ろうと大震災に立ち向かい、殉職した仲間たちが、生きたかった明日でもあるのです。

日本青年団協議会

事務局長 田中 潮

## 生きる ～東日本大震災と地域青年の記録～ 第1号

編集・発行：日本青年団協議会・

「生きる ～東日本大震災と地域青年の記録～」編集委員会  
(代表 辻 智子)

発行日：2012年3月28日

連絡先：〒160-0013 東京都新宿区霞ヶ丘町7-1 日本青年館内  
日本青年団協議会気付

電話 03-3475-2490 F A X 03-3475-0668

URL <http://www.dan.or.jp> E-mail [jsc\\_soumu@dan.or.jp](mailto:jsc_soumu@dan.or.jp)

：〒259-1292 神奈川県平塚市北金目4-1-1

東海大学課程資格教育センター 第四研究室 辻 智子

電話 0463-58-1211(内線 3184)

E-mail [tsujitomo@tokai-u.jp](mailto:tsujitomo@tokai-u.jp)

※この取り組みに際し、2011年8月末以降、科学研究費補助金(研究活動スタート支援・平成23～24年度「地域共同体の変容と青年集団―東日本大震災に直面して―」課題番号 23830076、代表者：辻智子)をききとり旅費等に活用させていただいた。

